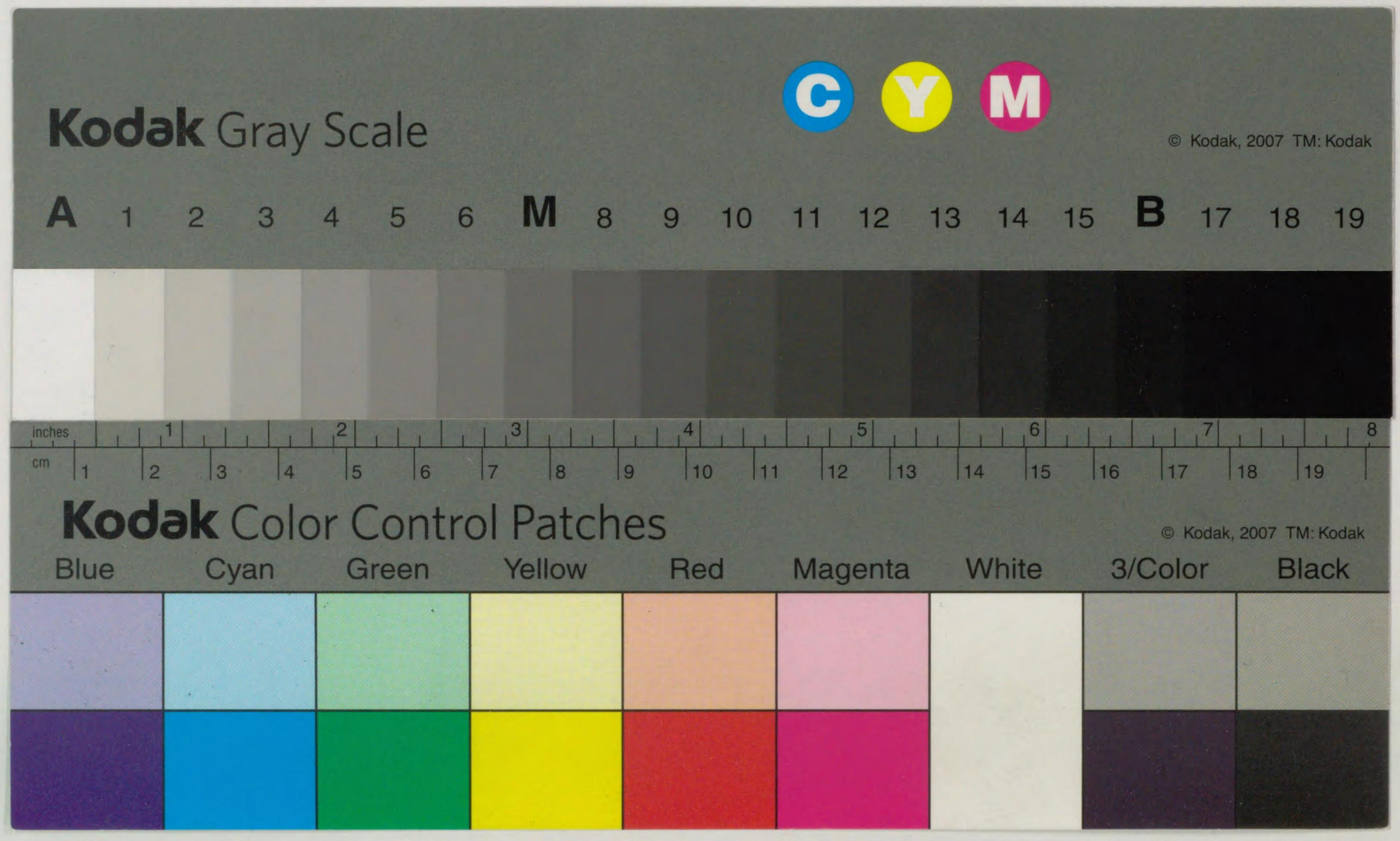

732-76
1200501589764
91

291.4W-71

帝國圖書館藏

封建社会

源氏物語

吉田義則著

732
76

凡例

一本書は本文篇六冊、附卷一冊から成る。

一本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所藏の河内本を以て嚴密に對校して本文を立てた。

一繙讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。

一底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩樣に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の俤をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。

一對校の記號としては黒點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黒點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。

例へば、

いろ〳〵の紙なるふみどもを引きいでて

とあるのは、湖月抄本には

いろ〳〵の紙なるふみどもを引きいでて

とあるのが、河内本では

いろ〳〵のかなぶみを中將引きいでて

となつてゐるといふ意味である。而して一般に假名の清濁は、「お・ぼし煩ふ」の如く、前後の續きによつて變更するのである。

一句讀を切る事は、半ば意味を解釋するのであるから、この點に特に留意し、從來の句讀を改めた箇所が尠くない。

一湖月抄本には本文の右傍に若干校異を施してあるが、印刷の都合上、今それらの校異は左傍に移した。例へば本書に

あなくるし　むつまじう

とあるが如きは、もと底本に「あなくるし」「むつまじう」などとあつたのを、河

内本と對校し異同を記入する必要上斯く改めたのである。

一註釋は讀者の便を思つて、同註の反復も厭はなかつたのであるが、又多少簡にしたもの、省略したものがないではない。それは附卷の語句索引によつて明瞭ならしめるやうになつてゐる。

一附卷は源氏物語の解題・語句の索引・系圖及び年表から成り、本文篇と相俟つべきは勿論であるが、單獨に分離しても、啻に源氏物語の辭書たるにとどまらず、廣く王朝語・王朝文學の基礎的研究資料たり得る事を信ずるのである。

著者識

手姫

卷五所收目次

橋姫　一
椎木　四五
總角　八九
早蕨　一九五
宿木　二一七

その頃　光源氏の榮えた時代を廣く指していつたもの。

古宮　この「古」は古里の「古」と同じく、「荒廢」の意である。すたれものの宮様。源氏の御異母弟で桐壺院の第八皇子故八宮と申す。その御生立は奥に詳である。

時移りて　冷泉院が立坊された事。時勢が變つて。

世の中にはしたなめられ　世の中に居づらい目にあはれた騒ぎに。弘徽殿大后が八宮を春宮に擁立なさうとして失敗した事件をいふ。八頁に委しい。

御後見　八宮の世話係の家司達は、宮の立坊をあてにして我身の榮達を夢見てゐたのに。

親たちの　未來は后にもと考へて八宮に差上げた親達の事を思ひ出して見ると如何にも心細いので。

深き御契りの二つなき　類ない程深い夫婦仲だけを。

年頃經るに　數年たつても御子もお生れにならなくて氣が氣でなかつたので。

いかでをかしからむ　せひとも可愛い子供がほしい。

宮ぞ　北方はそれほどでもなかつたが、それも產故に亡くなられたのの意、いつた因緣があつたとかいふ意味まで考へに入れて書かれたものと解くべきであらう。

女君の　これを大君、又總角の君ともいふ。

その頃、世にかずまへられ給はぬ古宮おはしけり。（世間からのけものにされておいでになる）（八宮の外戚も家柄が高）母方なども、やんごとなく物し給ひて、（常の親王とは筋あひの違ふやうな嘸卽ち朱雀院の御在位中春宮にお立ちになる程の聲望）筋異なるべき覺えなどおはしけるを、時移りて、（などもおありになつたの意）世の中にはしたなめられ給ひける紛れに、（一時勢力があつただけに却つて全く以前の俤もなく衰へて）なかく（それやこれやで）いと名殘なく、御後見（期待が外れたので）なども、物怨めしき心々にて、かたく（八宮は公私共に世間から見放されてしまつてたよりなささうだ）暇を取つて出て行つてしまつたので）につけて世を背き去りつつ、おほやけ（北方の心中）私に、より所なくさし放たれ給へるやうなり。北の方（八宮の）も、昔の大臣（だいじん）の御むすめなりける（北方の）親たちのおぼしおきてたりしさまなど（計劃なさつた）思ひ出で給ふに、たとしへなき事多かれど、（悲しい事が）深き御契りの二つなきばかりを憂き世の慰めにて、（八宮と北方と）かたみに又なく頼みかはし給へり。

年頃經るに、御子も物し給はで心もとなかりければ、「さうく（八宮）しくつれく」なる慰めに、いかでをかしからむ兒（ちご）もがな」と、宮ぞ時々おぼし宣ひけるに、珍らしく、女君（をんなぎみ）のいとうつくしげなる、生れ給へり。これを限りなくあはれと思ひかしづき聞え（大君を）

又さしつづき　又引續いて。但しその間に三年を經てゐるのである。

同じさまにて　これを中君といふ。

ありへるにつけて　暮して行くにつれて、誠に居心地のわるくて堪へられない事の多い世の中だが、出家しようにも振捨てておかれない氣立てに引きとめられて、樣々に氣を揉んでくらしてゐたのだ、自分一人だけ生き殘つてゐる一層この世に對する興味も持てなさうだ。

一人はぐくみ　男手一つに育てるといふ事は。

限りある身にて　親王といふ高貴の御身分でありながら。

見讓る人も　跡の世話を託すべき人もなしに姫君達を殘しておくといふ點を大變問題として出家もしかねて年月を送る間に。

おのづからぞ　知らず識らずの間に月日を送つて行かれる。

いでや折節心憂く　いやどうもわるい時に生れて下さつたものだ。中君故に母北方が逝去されたので愚痴をいふのである。

給ふに、又さしつづき姫宮の模樣で氣色ばみ給ひて、この度は男にてもなどおぼしたるに、又女君で同じさまにて、安產はなさつたが平らかにはし給ひながら、北方はいと八宮は呆れて宮あさましくおぼし惑ふ。以下八宮の心あり經るいたく煩ひて亡せ給ひぬ。

二

北方の亡くなられた事を思ふと、前世の宿命も怨まれはしまし、北方の亡くなられた事を思ふと、前世の宿命も怨まれはしまし、思はれる折節でもあるが、これも因緣と諦めて。夫婦仲の長短は前世に定められた運命なのである。

うしろめたげに　前に「ただ此の君をば形見に見給ひてあはれと思せ」と言はれた事をさす。

思し出でつつ　「ありけめと」「宣ひしをと」以上二つの「と」を受ける言葉。

ゆゆしきまで　あまり美しい人は若死するといふ迷信によつて書かれた語。

いたはしく　いぢらしく御身分がらな點は、妹君の方がまさつて居つて。五頁に「おほどかにいらたげなるさま」とあるのと同樣に落ちぶれきれない言葉である。「やんごとなきもの」はおほどかなるさまをいつたものである。

かなはぬ事多く　家政不如意な爲に、年月共に御殿の內は次第にびれてゆく。

さぶらひし人も　一方前に御後見なども物怨しき心にて一暇をとつて出て行つてしまつた人は殘つてゐるが、まだ多少の奉公人はをつたのである。北方逝去の騷ぎの折に雇入れた事として、しつかりした者を選擇する餘裕もなかつたので。

ただこの君をば　一意この君を私の形見と思召して可愛がつてやつて下さい。

北方が臨終の御重態で意識のない折にも拘らず

ど、限りのさまにて、何事もおぼし分かざりし程ながら、中君を特にこれをいと心苦しと思ひて、北方ただ此の君をば形見に見給ひて、あはれと思せ」とばかり、ただ一言なむ八宮に遺言しておかれたので中君をば形見に見給ひければ、前の世の契りもつらき折節なれ・・・ど、さるべきにこそはありけめと、今はと見えしまでいとあはれと思ひて、中君を氣づかはしさうにうしろめたげに宣ひしをと、思し出でつつ、中君を特に不便にかけられたこの君をしもいとかなしうし奉り給ふ。中君は八宮が北方の遺言を誠にいとうつくしう、怖ろしい程でゆゆしきまで物し給ひける。姫君は大君性質が落着いてなしも、け高く心に奥ゆかしい樣子くきさまぞし給へる。姉君よりもいたはしくやんごとなき筋はまさりて、八宮がお二人をそれ〴〵大事にお育てになるがいづれをもさま〴〵に思ひかしづき聞え給へど、かなはぬ事多く、年月に添へて、宮の內物淋しくのみなりまさる。さぶらひし人も、將來の見込がないから我慢が出來ずにたづきなき心地するに、え忍びあへず、順々に暇を取つて立去つて次々に隨ひてまかんで散りつつ、妹君若君の御乳母も、さる騷ぎに、乳母はは北方逝去の騷ぎの折に雇入れた事として、しつかりした者を選擇する餘裕もなかつたので。程、決心して限りある身にて、落ちぶれはしても落ちぶれきれない出家の不憫裁でもあり馬鹿らしくもあらうと思し立ちて、本意も遂げまほしうし給ひけれど、見讓る人もなくて殘しとどめむを、いみじく思したゆたひつつ、年月も經れば、姫君達二人とも成人されるその樣子容貌のかはいらしく思ひ通りであるのを　おのおのよすがまさり給ふさまかたちの、うつくしうあらまほしきを明暮の御慰めにて・・、おのづからぞ過ぐし給ふ。のちに生れ給ひし中君をば、中君の侍女達さぶらふ人々も、「いでや、折節心憂く」などうちつぶやきて、精を入れてお世話も申さなかつたのだが心に入れてもあつかひ聞えざりけれ

羈絆として

さすがに　前の「かなはぬ事多く年月に添へて宮のうち物淋しくのみなりまさる」を受けていふ。何といつても宮様の御屋敷だけあつて。

取りつくろふ　邸内の手入をする人もないので。

折々につけたる　四季折々の花や紅葉の色をも香をも、北方と一緒に賞翫したればこそ氣の紛れる事も多かつたのだが。

持佛　常住わが傍に安置して信仰する佛。

斯かるほだしどもに　以下八宮の御心中。かうした手足まとひに拘つて出家も出來ずにゐるのさへ意外でもあり殘念で、自分ながら思ふ儘にならぬ運命と諦めてゐるのに、何で人並ましてようぞ。今更後妻などを迎へて、年月と共に俗世間の事を斷念して、心はれて。聖になりきつてしまはれて。

例の人のさまなる　常人と同じやうな考などは冗談にも思ひ出しなさらなかつた。

などかさしも　何もそれ程迄になさる事はありませぬ。死別當時の悲しみは世に又と類のないやうに感じるもののやうだけれども、月日がたてばいつ迄もさうばかりではありませぬ。

つきづきしく　緣故を辿つて、尤もらしい口實を以て再婚を勸める者が多いけれども。

ことならはし　箏や琵琶などを稽古させ。「こと」は一般に絃樂器。

篇附　漢字の旁を示してそれに適當なる篇を附けて完全な一字にする遊戯。附け得ない者、附けた字を讀み得ない者は負け。

常ははかなき　北方の生前には別に氣にもおとめにならなかつたのだが。

は乳母だけの淺い考から中君の頑是ない御身がらを見捨てて暇を取つたので

につけたる心淺さにて、をさなき程を見捨て奉りにければ、只八宮ぞはぐくみ給ふ。

さすがに廣く面白き宮の、池山などの氣色ばかり昔に變らで、いといたう荒れまさるを、つれ〴〵と眺め給ふ。家司なども、指圖の出來るやうな人もむねぐ〳〵しき人もなかりければ、取りつくろふ人もなきままに、草・青やかに繁り、軒のしのぶぞ所得がほに青みわたれる。折の生前には折につけたる花紅葉の色をも香をも、同じ心に見はやし給ひしにこそ慰むことも多かりけれ、いとどしく淋しく、よりつかむ方なきままに、持佛の御飾りばかりをわざとせさせ給ひて、明暮行ひ給ふ。斯かるほだしどもにかかづらふだに、思ひの外に口惜しう、わが心ながらもかなはざりける契りと覺ゆるを、まいて何にか世の人めいて今更に、とのみ、年月に添へて世の中を思し離れつつ、心ばかりは聖になり果て給ひて、故君の亡せ給ひ・しこなたは、例の人のさまなる心ばへなど、たはむれにても思し出で給はざりけり。」人々「などかさしも。別るる程の悲しびは又世にたぐひなきやうにのみこそは覺ゆべか・めれど、あり經ればさのみやは。なほ世人になずらふ御心づかひをし給ひて、いと斯く見苦しくたづきなき宮の内も、おのづからもてなさるるわざもや」と、人はもどき聞えて、何くれと、つきづきしく聞えごつ事も類に觸れて多かれど、聞召し入れざりけり。御念誦のひま〳〵には、この君だちを・もてあそび、やう〳〵およすげ給へば、ことならはし、碁打ち、篇附など、はかなき・遊びわざにつけても、心ばへどもを見奉り給ふに、姫君は、おほどかにらうらうじく深くおもりかに見え給ふ。若君は、おほどかにうたげなるさまして、物づつみしたるけはひ・、いとうつくしう、さまぐ〳〵におはす。」春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの、羽うちかはしつつ、おのがじし囀る聲などを、常ははかなき事と見給ひしかども、つがひ離れぬを羨しく眺め給ひて、

いとをかしげに　大層可愛らしげに小さいなりをして。

とり〳〵　それ〳〵。「あはれにをかしく」を修飾する。

打捨てて　「打捨てて…水鳥の」までは「かり」の序詞、水鳥の雁とかゝるのである。歌の本文は「假の此の世に立ちおくれけむ」である。子ども達はなぜこの假の世にとりのこされたのだらうの意。「かりの此の」に雁の子（卵）のひびきがあるので、そこから「子ども」の意味が生れてくるのである。

さてしも　痩せ細つてこそ却つて上品にあでやかで。

君だちをかしづき　幼い姫君達の世話をなさるお心遣の上から直衣も糊氣の落ちて皺になつたのを召し御様子は、なつて、取繕はれない位である。

硯には　河海「硯は文殊の眼也。此故に眼石といふ。この聲をかりて硯石とは書也云々。仍おもて記に物を書かざる也。菅家の御日記にも硯の面に不書とあり」

いかで斯く　成人してこんなに思ふにつけても、母君に早く死別した我身の不幸な因縁が思ひ知られる。憂きみの意味にとりなしづ鳥」を憂き身のであるもの。

その折は　折が折とて胸を打たれるものがあつた。

よくも續け給はぬ　放ち書きの幼いさまをいふ。

姫君達に君だちに御ことども教へ聞え給ふ。いとをかしげに、小さき御程に、とり〳〵搔鳴らし給ふ物のねども、あはれにをかしく聞ゆれば、涙を浮け給ひて、

「打捨てて番去りにし水鳥のかりの此世に立ちおくれけむ」

思へば氣の揉める事だ心づくしなりや」と、目おしのごひ給ふ。かたちいと清げにおはします宮なり。年頃の御行ひに痩せほそり給ひにたれど、さてしもあてになまめきて、君だちをかしづき給ふ御心ばへに、直衣のなえばめるを著給ひて、しどけなき御さま、いと恥かしげなり。姫君、御硯をやをら引寄せて、手習のやうに書きまぜ給ふを、「これに書き給へ。硯には書きつけざンなり」とて、紙奉り給へば、恥ぢらひて書き給ふ。

いかで斯く巣立ちけるぞと思ふにも憂き水鳥の契をぞ知る

よからねど、その折は・・あはれなりけり。手はおひ先見えて、まだよくも續け給はぬ程なり。「若君も書き給へ」とあれば、

久しく　長くかかつて書きあげられた。

泣く〳〵も　涙の中にも育てて下さる父宮がおいでにならなかつたならば、自分こそ育つ事は出來なかつたのです。

かつ讀みつつ　一方に經を讀みながら一方に姫君達の爲に歌をうたはれる。

箏の御ことを給ふ　この下に「教へ」などの語省略。

合せつつ　お二人が合奏しながら稽古されるので。

父御門にも　以下八宮の生立を語るのである。

高き人と聞ゆる　八宮は貴人と申す中でも、呆れる程上品に大やうな女のやうな方でおいでになるので。

ふるき世の祖父大臣　母女御の父大臣。桐壺院―八宮

御そうぶん　祖父大臣―母女御御處分。遺産。

姉君よりもいますこしをさなげに、久しく書き出で給へり。

泣く〳〵も羽打著する君なくば我ぞ巣守になるべかりける

姫君達の御ぞどもなどなえばみて、姫宮達の側には外に女房達も居らずお前に又人もなく、いと淋しくつれづれげなるに、姫君達がそれ〴〵可憐なさまをして さま〴〵いとらうたげにて物し給ふを、八宮が御覽にあはれに心苦しういかが思さざらむ。經を片手にも給ひて、かつ讀みつつ唱歌をし給ふ。姫君に琵琶、若君に箏の御ことを。お二人ともまだをさなけれど、常に合せつつ習ひ給へば、聞きにくくもあらで、いとをかしく聞ゆ。

桐壺院父御門にも母女御にも疾くおくれ給ひて、はか〴〵しき御後見の取立てたるおはせざりければ、學問ざえなど深くもえ習ひ給はず。まいて世の中に住みつく御心おきては、いかでかは知り給はむ。高き人と聞ゆるなかにも、あさましうあてにおほどかなる女のやうにおはすれば、ふるき世の御寶物、祖父大臣の御そうぶん、何やかやと盡きすまじかりけれど、行くへもなく・はかなく失

わざとうるはしくて 家柄が家柄であるから。

參りさぶらひ聞え 誰一人として八宮方にお見舞に參上し、御味方する人もない。例の事件があつたからである。

雅樂寮 治部省の被管。

はかなき 「遊び」の性質をいつたものの意ではない。遊びのやうなつまらないものの義。

朱雀院の大后 朱雀院の御母后即ち弘徽殿大后。

わが御時 弘徽殿の大后が、御自分の權勢にまかせて。

あいなくあなたざまの 「あいなく」を修飾する。源氏方のお仲間からは、のけものにされてしまはれたので。

いよ〳〵えまじらひ給はず 「えまじらひ給はず」を修飾する。この「ず」は中止形であつて、修止形ではない。それでないと次の文へのつながりがよくない。意味の上のこの「給はず」は「なり果てて」とを受けて「今は限りと云々」とつた文勢である。

今は限りと 世の一切を斷念して了はれたと。河内本は「おぼし捨てたりける程に」

いとどしき世に 只でさへつらい世の中に、御殿までが燒亡したので、宮は一入ひどくがつかりされて。

今はと住み離れ もうこれ限りと京を住み離れる事を宮は感慨深く思召す。

網代のけはひ 宇治の山莊は附近に網代もあるらしく、水音や川岸でも、靜かに三味に耽らうと念佛三昧に本意にはは添はない缺點もあるが、それも仕方がない。網代は川瀨を上流に向ひ並べ、上の方に杭を密に打ち、その點にて口を狹くあけて、そこに基點にて口を狹くあけて、そこに簀を當てる。さて簀かからの水には漏れ魚は殘る。その水に寄せて捕る裝置。

心をやるたよりに寄せて 氣を晴らすために見てをりながら、それにつけてまた。それに北方つけて追憶、その念が禁じられなかつたので、その旨はこもり」とある文で説明されてゐる。

見し人もの歌 北方も亡くなつて邸宅も燒亡し火葬の煙のとなり、なぜ自分一人が生き殘つたのだらう。事だ北方追慕の情が切なく爲に生きてゐるかひもないやうに思ひ召す。

生けるかひなく 「尋ねまゐる人もなし」客に係る。京に居つた時さへ訪問客はかつたのに、この山奥では一入の意。

いとど 下の「今は限りと」世の中の憂さ—この歌を引いて「晴るる」の枕詞に用ひてある。清僧らしい。

髮の朝霧 古今雜下「雁のくる峯の朝霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中の憂さ—この歌を引いて「晴るる」の枕詞に用ひてある。清僧らしい。

せ果てて、御調度など（手まはりのお道具類だけ）ばかりなむ、（格別立派なお品が）わざとうるはしくて多かりける。參りさぶらひ聞え、心寄せ奉る人もなし。つれ〳〵（宮は所在なさに）なるままに、雅樂寮（樂師）の物の師どもなどやうの、すぐれたるを召寄せつつ、はかなき御遊びに心を入れ、おぼし出で給へれば、そのかたはいとをかしくすぐれ給へり。（音樂の道はすぐれて上手であつた）源氏のおとどの御弟（この宮は源氏の異母弟で）八の宮とぞ聞えしを、冷泉院の春宮（八宮を春宮にお立て申さうと）におはしましし時、朱雀院の大后の、横さまにおぼし構へて、この宮を世の中に立ちつぎ給ふべく、（非謀をたくらまれて）わが御時、もてかしづき奉り給ひ、（八宮をお世話なさつた騷ぎの爲に）ける騷ぎに、あいなく（八宮が源氏方から交際を斷たれたのである）あなたざまの御中らひにはさし放たれ給ひにければ、（今では源氏の子孫）いよ〳〵（八宮はますます出仕も御出來になれないし）えまじらひ給はず、又（の御代になりきつた世の中の事として）かの御つぎ〳〵になり果てぬる世にて、この年頃、斯かる聖になり果てて、今は限り、とよろづをおぼし捨てたり。斯かる程に、（八宮の京の御殿が）住み給ふ宮燒けにけり。いとどしき世に、あさましうあへなくて、（京中には）移ろひ住み給ふべき所のよろしき（適當な場所も）もなかりければ、宇治といふ所に（風流な山莊を持つてゐられたその山莊に引越された）よしある山里も給へりけるに

渡り給ふ。思ひ捨て給へる世なれども、今はと住み離れなむをあはれに思さる。網代のけはひ近く、耳かしかましき川の（宇治川）わたりにて、靜かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかがはせむ。（花や紅葉や水の流れにつけても）花紅葉水の流れにも、心をやるたよりに寄せて、（一層物思ひに耽るより外に仕）いとどしく眺め給ふよりほかの事なし。斯く絶えこもりぬる野山の末にも、（世に跡を絕つて引籠つた野山の奥にも）（方がなかつた）昔の人ものし給はましかばと、思ひ出で聞え給はぬ折なかりけり。（故北方が御存生ならば）

（八宮）見し人も宿も煙になりにしをなどて我身の消え殘りけむ（煙の緣）

生けるかひなくぞおぼしこがるるや。（火をひゞかす煙の緣）

いとど、山かさなれる御（宇治の）すみかに、尋ねまゐる人もなし。あや（賤しい）しきげすなど（人）、田舍びたる山賤（やまがつ）どものみ、稀に狃れ參り仕（八宮方になれ〳〵しく）うまつる。峯の朝霧晴るる折なくて（心の晴々する折なくて）明し暮し給ふに、この宇治山に、聖だちたる阿闍梨（學問に精通して居つて世人の歸依も淺くはないが）住みけり。ざえいとかしこくて、世の覺えもかるからねど、をさ〳〵おぼやけごとにも出で仕へず（朝廷の法會にも殆ど出仕せず）籠り（宇治に）

淋しき御さまに 淋しい御生活の中に念佛をなさりながら、經文などを阿闍梨に習つてゐられるので。

尊び聞えて 阿闍梨が八宮を尊敬して始終山莊にお訪ねする。

心ばかりは 身はとにかくとして、心だけは極樂の蓮臺の上に生れかはり濁りない七寶の池の中にも住めさうに思はれるが。阿彌陀經一極樂國土有二七寶池一、八功德水滿二其中一、池底純以二金沙一布レ池、池中蓮華大如二車輪一」拾遺哀傷空也一度も南無阿彌陀佛といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし」

例のさるべき書 いつものやうに冷泉院が然るべき佛書などを御覽になつて。

内教 外敎に對す。內典ともいつて佛書の事。

心深く 佛道に深く心をひそめておいでになる御樣子は、眞の聖僧の御心構へと見受けられます。

俗聖 此處に居る若い人達は八宮に聖とかいふ綽名をつけて居るのだが。俗聖は俗の形で佛道を修行してゐる人で、その男子を優婆塞といひ、女子を優婆塞の宮とも申す。八宮を優婆塞の宮といふ。

この若き人々 丁度薰等が院の御前に居つたから、薰等を指しつつ仰しやるお言葉である。

ねたるに、（八宮が）この宮の斯く近き程に住み給ひて、淋しき御さまに、尊きわざをせさせ給ひつつ、法文（はふもん）などを讀み習ひ給へば、尊び聞えて、常に參る。（八宮が年來學得してゐられる佛經上の深遠なる意義を阿闍梨が御說明申上げ）年頃學び知り給へる事どもの深き心を說き聞かせ奉り、いよ〳〵この世の・・（いと）假初にあぢきなき事を申し（阿闍梨が）知らすれば、（八宮に）八宮「心ばかりは蓮（はちす）の上に思ひのぼり、濁りなき池にもすみぬべきを、いと斯くをさなき人々（二人の姫君達）を見捨てむうしろめたさばかりになむ、（一圖に出家もしかねて居ります）えひたみちにかたちをもかへぬ」など、隔てなく物語し給ふ。この阿闍梨は、冷泉（れいぜい）院にも親しくさぶらひて、（冷泉院に）御經など敎へ聞ゆる人なりけり。京に出でたるついでに參りて、（冷泉院に）例のさるべき書（ふみ）など御覽じて、（院が阿闍梨に）問はせ給ふ事もあるついでに、（佛敎の御學問に造詣深くいらせられる）內敎の御ざえさとり深く物し給ひける（賢明で）かな。（前世から佛緣があつてお生れ遊ばしたお方で）さるべきにて生れ給へる人にや物し給ふらむ。心深く思ひすまし給へる程、誠の聖（ひじり）のおきてになむ見え給ふ」と聞ゆ。

阿「八宮のいとかしこく、

冷「いまだ（まだ御出家はなさらぬか）かたちはかへ給はずや。俗聖（ぞくひじり）とかこの若き人々のつけ

あはれなる 八宮の道心深きをお感じになつてのお言葉。

出家の志は 八宮はもと〳〵出家の素志は持つておいでになりますが。

はかなき事に 一寸した事の爲にこだはつて決行しないで。

女子 をんなどと讀む。姫君達の事。

げに 「心苦しき女子ども……」と思ひ捨てぬ」とあるのを受けて、「思ひ捨てられぬ」と仰しやるのも御尤もで、如何にもといつたもので、「いと面白く」を修飾する。

はた 姫君達はお氣の毒な身の上ではあるが併しその音樂はの意。

古代に 古風なほめ方をするので。極樂に思ひを寄せたほめ方を批評したもの。

さる聖のあたりに そんな聖僧（八宮）のそばで生長したのだから、姫君達は世俗向の事には暗からうとおもはれるのに。

もし暫しも もし私のの方が八宮よりも少しでもあとに生殘つてゐるならば、その間姫君達を私に預けては下さらないだらうか。

たゝなる、（殊勝な事ですあはれなる事なり」など宣はす。宰相（さいしやう）の中將もお前（冷泉院の）にさぶらひ給ひて、我こそ世の中を・いとすさまじく思ひ知りながら、（以下薰の心中人から注目される程熱心には佛道修行もせず）行ひなど人に目とどめらるるばかりは勤めず、口惜し（遺憾な狀態に）くて過ぐしけれ、など人知れず思ひつつ、（俗形の儘で聖僧となつてゐられる八宮の心）俗ながら聖になり給ふ心のおきてやいかにと、耳とどめて聞き給ふ。（の持方は如何）

阿「出家（すけ）の志はもとより物し給へるを、『はかなき事に思ひとどこほり、今となりては、（氣の毒な）心苦しき女子（みこ）どもの御（み）うへ・・（ども）をえ思ひ捨てぬ』となむ歎き侍（はべ）り給（たま）ふ」と奏す。（八宮のお言葉をまねぶのである）（世事を捨てた聖ではあるが音樂ずきな僧で）さすがに物のねめづる阿闍梨にて、（抄木侍りたぶ）

阿「げにはた、この姫君たちの、（箏や琵琶を合奏して）こと彈きあはせて遊び給へる、河波にきほひて聞え侍るはいと面白く、・・・・・・・・・・（極樂では）（菩薩が常に樂を奏してゐられるから）思ひやられ侍るや」と、古代（こだい）にめづれば、御門ほほゑみ給ひて、

冷「さる聖のあたりに生ひ出でて、この世（音樂といふやうな）の方ざまは、たど〳〵しからむと推し量らるるを、（音樂に堪能とはおもしろい）をかしの事や。（八宮は姫君達を見捨てかねて始末に困つてゐられるだらうから）うしろめたく思ひ捨てがたくもて煩ひ給ふらむを、もし暫しもおくれむ程は、讓

十の御子にぞ　「もし暫しもおくれむ程は」のお言葉について説明的の記述である。冷泉院は桐壺院の第十皇子で八宮の異母弟故、自然の順序からいへば當然あとに生き殘られるからである。

なか〳〵　年長な冷泉院（四十九歳）が姫君を手に入れたいと思召すに、年若な薫（廿歳）は、却つて姫君達には心引かれず。

必ず參りて　屹度參上して宮から色々お教の受けられるやうに、まづ内々御意を伺つておいて下さい。

御言傳にて　口上で傳言された

人づてに　人傳に聞くなんて何といふ事でせう、自分で出かけて貴方がいふのだが、親しく見たいと思ふのさらないと思召すに、年若な薫（廿歳）は、却つて姫君達には心引かれず。

世を厭ふ　これは物に記して御意味寄せて歌に續くのであるが、これは物に消息であるの。俗世を厭離したいと思ふ私の心だけはあなたのおいでにな治山までも、身を運ぶことの出來ないのは、幾重にもかさなる雲の隔てを設けてあなたが疎隔なさるのでせうか。

さるべき人の　始終音問すべき普通の身分の人の使までも滅多に訪ねて來ない山奥故。

さる方に　山里らしくおもてなしになつた。

りやはし給はぬ」などぞ宣はする。この院の御門は、十の御子にぞおはし・・・ける。朱雀院の、故六條の院に預け聞え給ひし入道の宮の御ためをお・ぼしいでて、かの君だちをがな、つれ〴〵なる遊びがたきに、など打ちおぼしけり。中將の君は、なか〳〵、親王の思ひすまし給へらむ御心ばへを、對面して見奉らばや、と思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨の歸り入るにも、薫「必ず參りて物習ひ聞ゆべく、まづ内々にも氣色賜はり給へ」など語らひ給ふ。御門は御言傳にて、「あはれなる御すまひを、人づてに聞くこと」など聞え給うて、

阿闍梨、この御使を先に立てて、かの宮に參りぬ。なのめなる阿闍梨　世を厭ふ心は山にかよへども八重だつ雲を君や隔つる

冷泉院は十の御子に、朱雀院が女三宮を源氏に託された前例を思ひ出されて、八宮の姫君達を、八宮の佛道に專念してゐられる御樣子を、院の御使などいふやうに、宮が院の御使を、院のお使と連れだつて、なのめなる貴い御使はさておき、山里に似合はしい御馳走などを調へて、御使を、

跡絶えての歌　浮世を捨てて住んでゐるといふ譯でもありませんが、この宇治山に假住居をして居るのです。古今雜喜撰法師の「わが庵は都のたつみかぞすむ世をうぢ山とひとはいふなり」を踏んだ歌である。「心」は「清む」の意でいひかけた枕詞。「世を」は「憂」といひかけた枕詞。

法文などの心　以下薫の言を八宮に傳へるのである。經文の義理を悟りたい希望は幼少の折から深く持つて居りながら。

いとまなく明け暮し　ずつと句を隔てて「おのづからうちたゆみ云々」に續いてゆく句法。

わざと閉ぢこもりて　殊更に交際を絶つて經文を習ひ讀み、（一世體大した身分でもないので）捨人ぶつたところで何の遠慮もいらぬ身の上なのだが。

懇に申し給ひし　私を通じて一所懸命にあなた樣に申して居られました。「給ひき」とあるべき格であるが、連體形を以て句を切つて餘情を持たせたもの。

何事も飽かぬ　何不足もあるまいと思はれる身分だのに。

跡絶えて心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ

八宮　跡絶えて心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ

修行の爲の山籠りではないと佛道の方を卑下しての御返歌故　聖のかたをば卑下して聞えなし給へれば、なほ世に怨み殘りけられるのだと、冷泉院は世を憂と歌はれた所を見るとやはり例の一件を根に持つてるいとほしく御覽ず。阿闍梨・・、「薫中將の君の道心深げに物し給ふ」など八宮に語り聞えて、阿「『法文などの心、得まほしき志なむいはけなかりし齡より深く思ひながら、餘儀なく俗生活をしてゐるため公事私事に餘暇えさらず世にあり經る程、おほやけ私にいとまなく明け暮し、わざと閉ぢこもりて習ひ讀み、大方・はか〳〵しくもあらぬ身にしも、世の中を背きがほならむも、憚るべきに・あらねど、自然なまけがちで公私に取紛れがちに暮して居おのづからうちたゆみ、紛らはしくてなむ過ぐしくるを、世にも珍らしいいとありがたき御有樣を承り傳へしより、斯く心にかけてなむ頼み聞えさする』など、懇に申し給ひし」など語り聞ゆ。宮、「世の中を假初の事と思ひ取り、厭離の心の萌すのも厭はしき心のつきそむることも、我身に憂へ事のある時に世間全體が怨めしく感じられるさういふ動機があつてこそ道心も起る譯のもののやうに思ふのにわが身に憂へある時、なべての世も怨めしう思ひ知る初めありてなむ道心も起るわざなめを、薫は將來もあり年若く世の中思ふにかなひ、何事も飽かぬことはあらじと

さはた それにも拘らず左様に後世の事まで研究してゐられるのが世にも珍らしく殊勝な事です。

ここには 私などは、運命なのせうか、一圖に世を厭離せよと、佛などが勸め促して下さるやうな境遇なので、自然修行の念願も思ひのまゝになつていくけれども。

はか〳〵しくもあらで しつかりした悟も出來ずに死にさうであるのに、今までもさうであつたが、今後とても何の求め得る所もないであらうことが分つてゐるのに。「過ぎぬべかめるを」「思ひ知らるるを」の二句は併立して次の「却りては云々」の句に續いてゆく句法。

却りては 薫は却つてこちらで恥ぢ入る程の法友でいらつしやるのです。

げに聞きしよりも 實際來て見ると、宇治は噂以上にいかにも感に堪へない。

思ひなし 隱遁生活と思つて見るせいか萬事が簡素である。

物忘れうちし 「物忘れうちする程もなげに」の意。同句の重複を避けたのである。晝は水の音や波の響のために物思ひを忘れる暇もなく、夜は打寛ろいで夢見るひまもなさうに凄く風が吹きまくつてゐる。

女君たち 大君中君。

覺ゆる身の程に、さはた後の世をさへたどり知り給ふらむがありがたさ。ここには、さ・べきにや、ただ厭ひ離れよと、殊更に佛などの勸めおもむけ給ふやうなる有様にて・・・、おのづからこそ・・靜かなる思ひにかなひゆけど、殘りすくなき心地するに、はか〳〵しくもあらで過ぎぬべかめるを、きし方ゆく末更にえたどる所なく思ひ知らるるを、却りては心恥かしげなる法の友にこそは物し給ふなれ」など宣ひて、かたみに御消息・かよひ、げに聞きしよりもあはれに、すまひ給へるさまより初めて、いと假なる草の庵に、思ひなし、事そぎたり。同じき山里といへど、さる方にて心とまりぬべく、のどやかなるもあるを、いと荒ましき水の音、波の響きに、物忘れうちし、夜など、心とけて夢をだに見るべき程もなげに、すごく吹き拂ひたり。聖だちたる御ためには、斯かるしもこそ心とまらぬ催しならめ、女君

世の常の女しく 世間並の女らしく柔和な點は乏しからうと推察される。

佛の御方には 持佛の間とは襖一重だけを隔てて次の間にゐられるやうだ。

氣色ばみ寄りて 姫君達に懸想しかけて。

さすがにいかが 「世の常の女しくなよびたる方は遠くや」と推察されるものの實際はどんな姫君達かと好奇心のそそられる匂ひがする。

宮の御有様の 殊勝に修行してゐられる八宮を懇切にお見舞申しあげ。

度々參り この下に法談を聞いた意味の文が省かれてある。

思ひやうに 豫想したやうに。「いとよく宣ひ知らす」を修飾する。

優婆塞が 宇津保藏開下「優婆塞が行ふ山の椎がもとあなそばそばしく床にしあらねば」に導かれた詞で「深き」の序。

宿德 高德。

世にいとまなく 公私に加持祈禱などの爲に多忙で。

その人ならぬ 身分のない僧は戒律を守るだけの尊さはあるが。

たち、何心地（どん氣持で）して過ぐし給ふらむ、世の常の女しくなよびたる方は遠くや、と推し量らるる御有様なり。佛の御方には、障子ばかりを隔て・てぞおはすべかめる。すき心あらむ人は氣色ばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかがと、ゆかしうもある御けはひなり。されど、さる方を思ひ離るる願ひに、山深く尋ね聞えたる本意なく、すき〳〵しきなほざりごとを打出で、あざればまむも、事にたがひてや、など思ひ返して、宮の御有様のいとあはれなるを、懇にとぶらひ聞え給ひ、度々參り給ひつつ。思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、わざとさかしげにはあらで、いとよく宣ひ知らす。聖だつ人、ざえある法師などは世に多かれど、あまりこはごはしうけどほげなる宿德の僧都僧正の際は、世にいとまなくきすぐにて、物の心を問ひあらはさむも事々しく覺え給ふ。又その人ならぬ佛の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊さはあ

物馴れたる 狎れ〳〵しく無遠慮なのは。

いと物しくて 「いとさすがに物むつかしく」を修飾する。

け近き御枕がみに 打寛ろいだ奥御殿などに召入れて佛教を談ずるにしても。「御枕がみ」は「枕もと」で寛いだ部屋の意。

いとさすがに さういふ卑しい僧と語るのはとかくに氣が進まないのに。「さすがに」は、持戒の尊さはあるといふものの併しの意。

よき人は 高貴な方は物の理解の仕方が普通の人とは違つていらつしやるから。

暇なくなどして 公務多忙の爲暇がなかつたりなどして久しく御面會の出來ない折には、薫は八宮を戀しくお思ひになつた。

年頃音にも折節に 數年來八宮の事は殆ど噂にも上らず。時折につけて冷泉院から立派な御音物もあり。下の「心寄せ仕うまつり」に係る。

まづ 何はさておき。

をかしきやうにも 花紅葉の折などに歌など書きかはす事。

まめやかなる 米錢衣服などを贈つて生活上の助けをする事。

れど、けはひ賤しく言葉だみて、こちなげに物馴れたる、いと物しくて、晝は落着いた夜分にかなる宵の程、け近き御枕がみなどに召入れ語らひ給ふにも、いとさすがに物むつかしくなどのみあるを、いとあてに心苦しきさまして、宣ひいづる言の葉も、同じ佛の御教へをも、耳近きたとひに引きまぜ、いとこよなく深き御悟りにはあらねど、よき人は、物の心を得給ふ方のいと殊に物し給うければ、やうやう見馴れ奉り給ふ度ごとに、常に見奉らまほしうて、暇なくなどして程經る時は、戀しう覺え給ふ。

そこなどありて、年頃音にもをさ〳〵聞え給はず、いみじく淋しげなりし御住みかに、やう〳〵人目見る時々あり。折節にとぶらひ聞え給ふ事いかめしう、この君も、まづさるべき事につけつつ、をかしきやうにもまめやかなるさまにも、心寄せ仕う

秋の末つかた 「移ろひ給ひて」を修飾する。

四季にあてつつ 八宮が毎年四季に一度づつ行はれる。

此頃はいとど 前にも「網代の波は、ひ近く耳かしかましき川のわたりにて」とあつたが、今は九月で氷魚を捕る節に入つたから一層喧しいのである。

久しく參らぬ 宇治に久しく御無沙汰した事だと。

まだ夜深く 下句ではあるが月のない時分ではなく、夜深いながらもまだ月の出る頃。「夜深く」は曉近い頃をいふ。

河のこなた 山莊は宇治川のこちら岸即ち京都のがはであつて舟に乘る世話もないから。

しげきのなかを 繁木の中を。

風のきほひに 競ひ吹く荒々しい風に。

ほろ〳〵と 「散りかかる」を修飾する。

人やりならず こんな苦勞をするのも人から强ひられたのではなく薫の心がらでするのであるから斯くいふ。

まつり給ふこと、三年ばかりになりぬ。

秋の末つかた、四季にあてつつし給ふ御念佛を、この河づらは、網代の波も、此頃はいとど耳かしかましく靜かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひ給ひて、七日の程行ひ給ふ。

姫君たちは、いと心細くつれ〳〵まさりて眺め給ひける頃、中將の君、久しく參らぬかな、と思ひいで聞え給ひけるままに、有明の月の、まだ夜深くさし出づる程に出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなく、やつれておはしけり。河のこなたなれば、霧りふたがりて、道も見えぬしげきのなかを分け給ふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろ〳〵と落ち亂るる木の葉の露の散りかかるもいと冷かに、人やりならずいたく濡れ給ひぬ。斯かるありきなども、をさ〳〵ならひ給はぬ心地に、心細くをかしくおぼされけり。

山おろしに 山颪に堪へきれずにこぼれる葉末の露にもまして私の涙はわけもなくもろく流れる事ではある。

柴の籬を そこはかとなき 柴垣の間を通つて。はつきりとした川にもなつてゐない水の流れの幾條もを。

なほ 「おどろく」を修飾する。前に「山賤のおどろくもうるさしとて」とあるのに對したいひ方である。

ぬし知らぬ香と 古今秋上「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野にたが脱ぎかけし藤袴ぞも」

そのこととも 何樂器のねとも聞きわけかねる樂のねが、すごい程佳い音に聞えてくる。

常に斯く親王 以下薫の心。八宮。

琴のね 和琴の音。

琵琶の聲の 前に「そのこととも聞きわけぬ物のねども」とあつたのを琵琶と聞き定めたのである。

黄鐘調 黄鐘を宮とした律旋音階。

搔合せ 琵琶の奏法の一。

絶え〳〵 琵琶の音の絶間々々にとぎれて。

忍び給へど 薫は隱れて聞いてゐられたのだが。

薫「山おろしに堪へぬ木の葉の露よりもあやなく脆き我涙かな

山賤のおどろくもうるさしとて、隨身のおとともせさせ給はず、柴の籬を分けつつ、そこはかとなき水の流れどもを、踏みしだく駒の足音も、なほ、忍びて、ぬし知らぬ香とおどろく寢覺めの家々ぞ・ひぞ、風に隨・ひて、ありける。

近くなる程に、そのこととも聞き分かれぬ物のねども、いと凄げに聞ゆ。常に斯く遊び給ふと聞くを、ついでなくて親王の御琴のねの名高きもえ聞かぬぞかし、よき折なるべし、と思ひつつ入り給へば、琵琶の聲の響きなりけり。黄鐘調に調べて、世の常の搔合せなれど、所がらにや耳馴れぬ心地して、搔返す撥の・おとも、物清げに面白し。箏のこと、あはれになまめいたる聲して、絶え〳〵聞ゆ。暫し聞かまほしきに、忍び給へど、御けはひしるく聞きつけて、宿直人めくをのこ、なまかたくなし

しかく〳〵なむ 八宮は阿闍梨の寺に七日間參籠でお留守でございます。

御消息をこそ 薫御來訪の由を八宮に傳へませう。

何かは いやなに、それには及ばぬ。

あはれと宣はせば 姫君が、それはお氣の毒なと仰しやつて下されば、それで滿足です。

立つを 姫君の方へ立去らうとするのを。

年頃人づてにのみ 今まで噂に居つた御彈物の音を。

御ことのねどもを 姫君達の琵琶と箏を。「こと」は絃樂器の總名。この句は下の「聞くべき云々」に續く。

さるなほ〳〵しき 宿直人のやうな無趣味な心にも、大層お立派に勿體なく感ずるので。

下人にても 召使の者でも京から來てゐる者のある折には決してお彈きになりませぬ。京人は下人でも音樂を聞き分ける耳を持つてゐるから。

き、出で來たり。宿直人「しかく〳〵なむ籠りおはします。御消息をこそ聞えさせめ」と申す。薫「何かは。しか限りある御行ひの程を、紛らはし聞えさせむにあいなし。斯く濡れ〳〵參りて、いたづらに歸らむ愁へを、姫君の御方に聞えて、あはれと宣はせばなむ慰むべき」と宣へば、醜き顔うちゑみて、宿「申させは・べらむ」とて立つを、薫「暫しや」と召寄せて、薫「年頃人づてにのみ聞きてゆかしく思ふ・・御ことのねどもを、嬉しき折かな、暫しすこし立ち隱れて聞くべき、物の隈ありや。つきなくさし過ぎて參り寄らむ程、皆ことやめ給ひてば、いと本意なからむ」と宣ふ御けはひ顔かたちの、さるなほ〳〵しき心地にも、いとめでたく忝く覺ゆれば、宿「人聞かぬ時は、明暮斯くなむ遊ばせど、下人にても、都の方より參り、立ちまじる人侍る時は、おともせさせ給はず。大方、斯くて女君たちおはします事をば隱させ給ひ、なべての人に知らせ奉らじとおぼし宣はする・・」

あぢきなき　それは詰らぬお隠しだてといふものだ。そんなに隠してはゐられるが、世間では世にも珍らしい例として聞き出さずにはおくまいと思はれるのに。

麗え給はぬなり　自分に敬語を用ひたいひ方で、當時下人に對して用ひたものである。

透垣　板や竹などで間を透かして作つた垣。

皆隔て異なるを　格別に厳しく仕切つてある、その部屋をお敎へ申した。

あへしらふ　接待する。

身ぼそく　衣服のいかにも身細いのである。

なえばめる童　糊氣の落ちて皺の寄つた着物を着てゐる女童。

扇になつて　湖月師説「琵琶の撥などに似たれば、女君の形末廣なれば、月は是しても招きうべしとなるにや。」河云、月隱ニ重山ニ撃レ扇(愉レ之、又云、水原に月を學ぶといふ説あり。不レ用レ之。又云、後嵯峨院此物語の以レ扇招レ月事を諸道に尋られしに、何も無二所見一後日基長卿漢書にあり云々。然共細流には用ひ給はず」諸抄頗に出典を探してゐるが、これは中君の思ひ遣ひであつたことは、後に「大君が「入日を返す撥こそあれ」云々といつてゐるからである。湖月抄はこの一節の大君と中君とを取違へてゐる。琵琶は中君の大君が取違へてゐる。

月に離るる物かは　細流抄「琵琶の隱月に撥はをさむるものなれば斯くいへり」

昔物語などに　昔物語などに語り傳へて、若い女房などのそれを讀んでゐるのを聞くに、吃度こんな風な話が書いてあるが、實際はそんな事も無かつたのだらう。嘘感を持つたのだが。昔物語は反感を持つたのだ。住吉宇津保の類。成程昔物語にもあるやうに、人目につかない所に面白い事實が潜んでゐさうな世の中だと。

げにあはれなる心移りぬべし　世間に興味を持つて、世間になかつた薫の氣が變つて、世間に興味を持つやうになりさうだ。

人おはす　どなたか立ち聞きしてゐらつしやいます。驚きがほには　人々の奥に引込む時の樣子をいふ。

匂ひやかなるべし　月影で見るのだからはつきりとは分らないのである。

いみじくらうたげに　五頁に「若君はおほどかにらうたげなるさまして」とあつた。

入る日を返す　奥入「還城樂陵王をあやぶめんとす。日の暮るるに撥して日を午にかきかへすといふ事也。委は不レ知。史記魯陽以レ戈廻二落日一(私左傳歟)」

と申せば、（藁は）打笑ひて、（藁）「あぢきなき御物隱し・・・なり。しか忍び給ふなれど、皆人、ありがたき世のためしに聞きいづべかめるを」と宣ひて、（藁）「なほしるべせよ。（やつばし姫君達の方へ案内してくれ）我はすき〳〵しき心（好色心）などなき人ぞ。」姫君達がかうしていらつしやるのが不思議に世間普通の女のやうには思はれないのだ　斯くておはしますらむ御有樣の、あやしくげになべてに覺え給はぬなり」と、（恐に頼まれるので）こまやかに宣へば、（藁）「恐人ります　あなかしこ。こんな場合の御案内しないではゐとで物の分らない仕打だと取沙汰されませう　心なきやうにのちの聞えや侍らむ」とて、姫君達のゐられる部屋は　あなたのお前は、竹の・・・（あめる）透垣（すいがい）しめぐらして、靖じて　皆隔て異なるを敎へ寄せ奉れり。御（藁の）供の人は、西の廊に呼びすゑて、この宿直人あへ（ひ）しらふ。（藁は姫君達のお居）あなたに　間の方に通じてゐるらしい透垣の戸をかよふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて見給へば、月を（風情）ある程度に霧こめてゐるのを　かしき程にきり渡れるを眺めて、簾垂をすこし・・・（高く卷きあげて）短く卷きあげて、女房達　人々居たり。箕（すの）子に、いと寒げに身ぼそくなえばめる童一人、（童と）同じさまなる大人（大人女房）など居たり。内（奥にゐる姫君達）なる人、一（中君）人は柱（柱のかげになるやうに坐つて）に寄りかかりすこし居隱れて、琵琶を前におきて、撥を手（いぢりつつ）まさぐりにしつつ居たるに、雲隱れたりつる月の、俄にいとあかくさし（雲間から）出でたれば、（中君）「扇な

らで、撥でも月を招き返す事は出來るものでした　これしても月は招きつべかりけり」とて、（月の面を）さしのぞきたる顔、（中君の）いみじくらうたげに匂（顔色がよささうだ）ひやかなるべし。添（前かがみに）臥したる人（大君）は、箏ことの上にかたぶき（かぶさるやうな姿勢をして）かかりて、（撥で入る日を招き返したといふ話は聞いて居りますが）大君「入る日を返す撥こそありけれ。」撥で月を招き返すとは風變りな思ひつきをなさるものですね　さま殊にも思ひ及び給ふ御心かな」とて、打笑ひたるけはひ、（五頁「姫君はらうらうじく深くおもりかに見え給ふ」）今すこしおもりかに由づきたり。（中君「撥で月を招き返す事までは出來ないにして）及ばずとも、これも月に緣故のないものでもありませぬ　月に離るる物かは」など、はかなき事を打解け宣ひかはしたる御・けはひども、更に（見ないで）よそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。（人の心を引くものがある）昔物語などに（以下薫の心）語り傳へて、若き女房などの讀むをも・聞くに、必ずかやう（意外な處に案外な美人が住んでゐる事など）の事をいひたる、さしもあらざりけむと、憎く推し量らるるを、げにあはれなる、物の隈ある（りぬ）・べき世なりけりと、心移りぬべし。霧の深ければ、（姫君達の方がはつきりと見）さやかに見ゆべくもあらず。（えさうもない）又月さし（雲間から出てほしい）出でなむと思す程に、奥のかたより、「人おはす」と告げ聞ゆる（姫君達に注進する女房が）人やあらむ、簾垂おろして皆入りぬ。（喫驚したといふ樣子もなく）驚きがほにはあらず、なごやかに（おだやかな態度で）もてなして、やを（そろりと）ら隱れぬる

なよよかに 物柔かにいぢらしい程に感ぜられて。

やをら立ちいでて 薫が簾の間から。

御車ぬて參るべく 薫はいそいで馬で來たのだが、歸路は車でとて、車取りに使を京に遣したのである。

ありつる侍かごと 例の宿直人。貴女方の爲にこんなに濡れましたと。

參りて聞ゆ 宿直人が姫君達の所へ行つて。

怪しくかうばしく 姫君達の心に思ひ合されるのである。

思ひかけぬ程 思ひもかけぬ時の事とて、氣づかなかつた心鈍さよ。

御消息など 薫と姫君達との挨拶を取次ぐ女房もごく物馴れない人のやうだが。

折からにこそ 何事も時と場合で適宜に振舞ふべきだ。卽ちあまり遠慮せずに直々に話しても差支ないものだと薫は思つて。

ありつる御簾 先刻の御簾。

さしいらへむ言の葉も 御挨拶の言葉も分らないで、御茵を差出す物越もあぶなさうである。

けはひども、衣のおとも(きぬ)せず、いとなよよか(び)に心苦しう(く)て、いみじう上品に優雅であるのであてにみやびかなるを、薫はいたく感動されたあはれと思ひ給ふ。

やをら立ちいでて、京に、御車ぬて參るべく人走らせ給ひつ。

ありつる侍(さぶらひ)に、薫「八宮のお留守にあしく參り侍りにけれど、姫君達の音樂が聽けてなか〳〵嬉しく、日頃の物思もすこし滿足しました思ふことすこし慰めてなむ。私が參つた旨を姫君達に傳へよ斯くさぶらふよし聞えよ。いたう濡れにたるかごとも聞えさせむかし」と宣へば、參りて聞ゆ。薫の仰を

姫君達は薫に見られたかしらなどとは不平を姫君達に斯く見えやしぬらむとは思しも寄らで、打解けたりつることど奏をもを、薫が聞きやし給へらむと、いといみじく恥かし。怪しくかうばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひ(も)かけぬ程なれば、薫の來て居る事に驚かざりける心おそさよと、心も初心な人惑ひ(し)て、恥ぢおはします(おはします)はさうず。御消息など傳ふる人も、いとうひ〳〵しき人なめるを、折からにこそよろづのことともとおもひ(ほ)て、まだ霧があつて姿もあらはでない時故霧の紛れなれば、ありつる御簾の前に歩みいでて、つい寅子に若女房いらへ(聞え)む言の葉も覺えで(ず)、御しとねさし出づるさまもたど

うちつけに淺き心 假初の淺い出來心だけではこのやうに尋ね參る事も出來さうにない嶮しい道だと思つて居りますのに。

さま殊にこそ 簾内にも入れて下さらないとは一風かはつた御待遇だと存じます。

斯く露けき度を かうして露に濡れ〳〵幾度か參りましたならば。

消え返り 消え入る程恥かしがつてゐて挨拶しないのも不體裁で見てゐれないので。

わざとめいたるも 格別な返事の工夫でもしてゐるやうに思はれるのもつらくて。

何事も思ひ知らぬ 薫が「さりとも御覽じ知るらむと頼もしう侍る」といはれたのを受けての詞。

かつ知りながら よく心得てゐる一方、つらさを知らぬふりをするのも世の習とは十分知つて居りますが。

一所しも あなたといふ方が(何も心得てゐられる筈の)あまり空々しい口のきき方をなさるのが殘念です。

ありがたうよろづを 珍らしくも萬事を悟りすましてゐられる御父宮の御住居などに。

たどしげなり。

薫「この御簾の前ではきまりがわるいちつけに淺き心ばかりにては、斯くも尋ね參るまじき、山のかけぢに思ひ給ふるを、さま殊に・こそ。斯く露けき度をかさねてば、いくら何でもおしまひには私の心持がおわかりドさるだらうと力づよく思つてゐますさりとも御覽じ知るらむとなむ頼もしう侍る・」と、いと眞面目にまめやかに宣ふ。若き人々の、なだらかに物聞ゆべきもなく、消え返りかがやかしげなるも傍痛ければ、姫君の心に女ばらの奥深きを起で大分ひまどつてしいづるほど久しくなりて、わざとめいたるも苦しうて、姫君の心に大君「何事も思ひ知らぬ有樣にて、知りがほにもいかがは聞ゆべき」と、にも物の分らぬくせに何で知つたかぶりな御返事が出來ませういとよし風情のあるありてあてなる聲して、引き入りながらほのかに宣ふ。奥に引込みながら姉君が

薫「かつ知りながら、憂きを知らずがほなるも、世のさがと思ひ給へ知るを、一所しも、あまりおぼめかせ給ふらむこそ口惜しかるべけれ。ありがたうよろづを思ひすましたる御すまひなどに、一緒に暮してゐられるあなたの御心の中は何もかも悟りきつてゐられる事と推察されますから たぐひ聞えさせ給ふ御心のうちは、何事も涼しく推し量られ侍れば、なほ斯く忍びあまり侍る深さ淺さの程も、分かせ給

世の常のすき〳〵しき 世間普通の好色の筋とは全く別に考へて頂きませう。

さやうの方 すき〳〵しき筋をさす。

おのづから 私が實直な人間である事は有名なのですから、自然噂にも聞きあはされる事でせう。

つれ〳〵とのみ 始終徒然と淋しく暮してゐる私のお話相手になつて頂きたいと思つて居りますし、あなたの方でも又かうして交際もなさらずぼんやりして いらつしやる退屈凌ぎに、進んで文通して下さる程親しく出來ましたらどんなに滿足でせう。

起しつる老人 前に「女ばらの奥深きを起しいづる」とあつた。これが柏木の乳母辨の尼である。

あなかたじけなや 薫を賞嘆する事である。

傍痛き 案内した方できまりのわるい意。作法を辨へない仕打である。

若き人々は 若い人達は物がわからなくて困る。薫のわるい事を叱るのである。

いともあやしく 妙に世間のものづけもの やうな御事情で、おたにに無くなる筈の方々までが次第にますます。一方のやうでございまして。

はむこそかひは侍らめ。（申すものです） 世の常のすき〳〵しき筋には、思召し放つべくや。（私の奢りますのは） さやうの方は、わざと勸むる人侍るとも、靡くべうもあらぬ心強さになむ。（好色の方面は） おのづから聞召しあはするやうも侍りなむ。（志操堅固） つれ〳〵とのみ過ぐし侍る世の物語も、聞えさせどころに頼み聞えさせ、又斯く世離れて眺めさせ給ふらむ御心の紛らはしにも、（薫は獨身故斯くいふ） さしもおどろかさせ給ふばかり。（給へなどやうに心やすく） 聞え馴れ侍らば、いかに思ふさまに侍らむ」など、多く宣へば、つは氣がひけて つましくいらへにくくて、起しつる老人の出で來たるにぞ讓り給ふ。（この老女は） たとしへなく（無遠慮に） さし過ぐして、「あなかたじけなや。（薫を） 傍痛きおましのさまにも侍るかな。（とんでも） 御簾のうちにぞ。（ここそ） 若き人々は（侍る）、物の程知らぬやうに。（侍る）こそ」など、したたかにいふ聲の、さだすぎたるも、（年ふけてゐるのも） 傍痛く（きまりわるく姫君達は思召す） 君だちはおぼす。「いともあやしく、世のなかに住まひ給ふ人の數にもあらぬ御有様にて、さもありぬべき人々だに、とぶらひ數まへ聞え給ふも見え聞えずのみな

ありがたき御志の 世にも珍らしい御親切の程は、物の數でもない私如き者の心にも、餘りと思ふまで忝く存じあげて居るのでございますもの。

けはひいたう人めきて 人間らしいものもゐない中に辨の態度が一人違つてゐて聲も風情があるので。

いとたづきも知らぬ 御簾の前にほつたらかされて取りつきはもないやうな心地で居りましたのに、あなたの御取りなしを嬉しく思ひます。

何事もげに思ひ知り 「げに」は前から度々「何事も思ひ知らぬ」「若き人々は物の程知らぬ」「若き御心地にも思し知りながら」など言つたので、その詞を受けたのである。

げにやつし給へる 一七頁に「御供に人などもなくやつれておはしけり」とあつた。

怪しきまで 薫物の匂ひは濕氣を持つと引立つものである。

あはれなる昔の御物語の 哀な話を、どうぞよい機會に申上げて、その一端なりとお話せ申したいものと、年來念佛の度毎に、この願ひをまぜて祈り續けるお蔭でございませうか。

りまさり侍るめるに、ありがたき御志の程は、數にも侍らぬ心（薫の） にも、あさましきまで思ひ給へ聞えさせ侍るを、若き御心地に（辨の） も思し知りながら、聞えさせ給ひにくきにや侍らむ」と、いと（御若い爲御挨拶がなさりにくいのでは それとも御しやらないのでせう） 慄りなく物馴れた口をきくのも（薫の御志を忝く） つつみなく物馴れたるも、なまにくきものから、けはひいたう（薫の心に） 人めきて、よしある聲なれば、「いとたづきも知らぬ心地しつるに、嬉しき御けはひにこそ。何事もげに思ひ知り給ひける頼みこよなかりけり」とて寄りゐ給へるを、几帳のそばより見れば、曙の・やう〳〵物の色わかるるに、（何事も心得てゐられるあなたがゐられるので大變氣丈夫に思ひます） （物に寄りかゝつてゐられる薫を） （端から） （色目の見わけがつく中に） ゆる狩衣姿の、いと・濡れしめりたる程、うたて此の世のほかの匂ひにやと、怪しきまでかをり滿ちたり。（天上界などの）

この老人はうち泣きぬ。（辨） 「さし過ぎたる罪もやと、思ひ給へ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならむついでに、うちいで聞えさせ、片端をもほのめかし知らしめさせむと、年頃・念誦のついでにも、うちまぜ思ひ給へわたるしるしにや、嬉し（女三宮と柏木との悲戀物語について） （出すぎてゐるとのお咎めもやと） （差控へてゐます）

まだきに 言ひ出しもせぬ前から止めようとして止められぬ涙に心もくらんで、とても申上げる事が出來ませぬ。

大方さだすぎたる 一體に年寄といふものは涙もろいものだと見たり聞いたりはしてゐられたが。

斯くあはれ知り給へる あなたの様に物ごゝろの分つてゐて下さる方がないので、行き來の道も只一人露にびつしより濡れてゐるより外はなかつたのです。

言な殘い給ひそ 一部始終語り聞かせて下さい。

夜の間の程 今夜死ぬかも知れない私の命は、あてにもならないのでございますもの。

ただ斯かる古者 こんなばあが世にあつたとだけ知つておいて戴きたう存じます。辨自身の事をいふ。

小侍從 柏木と女三宮との間に立つた女。三宮の侍女。女三宮の乳母の娘。

世界藤大納言 田舍。紅梅右大臣の事。この人が大臣になつたのは竹河卷であるから、これはそれより以前の事である。

き折に侍るを、まだきにおぼほれた(侍)る涙にくれて、えこそ聞えさせ・(ず)侍らね・(れ)」と、うちわななく氣色、誠にいみじく物悲しと思へり。大方、さだすぎたる人は涙もろなるものとは見聞き給へど、いとかうしも思へるも怪しうなり給ひて、薫「此處に斯くまゐることは度かさなりぬるを、斯くあはれ知り給へる人もなくてこそ、露けき道の程に一人のみそぼちつれ。嬉しきついでなめるを、言な殘い給ひそかし」と宣へば、辨「斯かるついでしも侍らじかし。又侍るとも、夜の間の程知らぬ命の、賴むべきにも侍らぬを。さらば、ただ斯かる古者世に侍りけりとばかり、知ろし召され侍らなむ。三條の宮にさぶらひし小侍從は、はかなくなり侍りにけると、ほのかに聞き侍りし。そのかみ睦まじう思ひ給へし同じ程の人、多く亡せ侍りにける世の末に、遙かなる世界より傳はりまうで來て、この五年六年のほどなむこれに斯くさぶらひ侍る。薫にはお分りになられますまいえ知ろしめさじかし。此頃藤大納言

衛門の督にて 柏木の事。

過ぎ給ひて 薫の生れた年に柏木は逝去されたのである。薫今年二十二。

故權大納言 柏木の事。

人に知られず 誰にも分つてゐない、といつてお心一つにはつつみかねた御秘密を、時々ほのめかされたのでございますが。

聊か宣ひおくこと 柏木が辨に遺言したのである。

のどかになむ 又ゆつくりお仕舞まで聞いて頂きませう。

若き人々も 此處に居る若い女房達も、私の事を片腹痛く出すぎてゐると思つて、つゝつきあつてをります、それも尤もでございます。

怪しく 以下薫の心。「怪しく」は「珍らかにおぼさるれど」に係る。

夢語り 夢物語。

巫女 かむなぎ、かみなぎ、かうなぎ。神を祀り、神樂を奏し神の口寄せをする未婚の女。みこ。

と申すなる御兄(このかみ)の、・(右)衛門の督にてかくれ侍(給)りにしは、物の(何かの機會に)つ・(逝去後)ぎ給ひていくばくも隔たらぬ心地のみし侍る。その折の悲しさも、まだ袖のかわく折侍らず思ひ給へらるるを、手(指を)を折りて數へ侍れば、斯く(薫が)大人しくならせ給ひにける御齡の程も、夢のやうになむ。かの故權大納言の・(君の)・御乳母に侍りしは、辨が母に(辨と同年輩の女房)なむはべりし。朝夕に仕うまつり馴れ侍りしに、人數にも侍らぬ身なれど、人に知られず、御心よりはた餘りける事を、折々うちかすめ宣ひ(せ)しを、今は限りになり給ひにし御病の末つかた(御臨終の折に私を召寄せて)なむ一こと侍れど、かばかり聞え出で侍るに、殘りをと思召す(殘りを聞きたく)御心侍らば、のどかになむ聞召し果て侍るべき。若き人々も、傍痛く、さし過ぎたりと、つきしろひ侍るめる・もことわりになむ」とて、さすがにうち出でずなりぬ。怪しく(き)、夢語り、巫女やう

あはれに「いと奥ゆかしけれど」を修飾する。心から聞きたかつたが。

事の筋。女三宮と柏木との祕密をいふ。句宮巻にあつた。

げに人目も「若き人々も云々」の語を受けていふ。

こちゝしかるべければ現代の辭書は「無骨」と解いてゐるが、孟津抄に「ことゝゝしき也」とあるのに從ふべきである。「ことゝゝしの」の音轉と見るのである。大層らしいから。

霧晴れゆかば下の「御覽じ咎められぬべき」に續く。

はしたなかるべききまりわるい程のこのやつれ姿を、姫君達の御目にとまつて恥かしい目をしさうですから。

峯の八重雲後撰離別「思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらむ峯の白雲」この歌の語を借りて「隔て」の枕詞にしたもので霧によつてゐる上にて、想像の路が隔てられてゐるとの意味で應へ、一方に父宮の參籠してゐる寺への隔てをなげかしたものである。

すこしきき「すこしきき」を受ける文脈。

雲のゐる峯のかけ常住雲のかかつてゐる峯の道を、此比秋霧まがひ給へるさまの目にはまして。

まいていかがはこの句は前の「立ちかへりやすらひ給へる」を受けて、

朝ぼらけ朝方京に歸らうとしても家路も見えない。また折角尋ねて來たのに、八宮のゐる山は霧に閉ぢこめられてゐる。どうして見やうもなくなつてしまつたもの。

ぼらけ朝方京に歸らうとしても家路も見えない。また折角尋ねて來たのに、八宮のゐる山は霧に閉ぢこめられてゐる。どうして見やうもなくなつてしまつたもの。

なほいと殊にかうした人を見だりがたいものがあるとい
ふ意味に、八重雲まで立隔てゐるとひがませたもの。

まいていかがは「立ちかへりやすらひ給へる」を説明しかたもの。

雲のゐる峯のかけ常住雲のかかつてゐる峯の道を、此比秋霧まがひ給へるさまの目にはまして。

すこしきき「すこしきき」を受ける文脈。

なほいと殊にかうした人を見だりがたいものがあるとい

ゆきかふさまどもの　宇治川を往來してゐる舟はたよりない水の上で、それも安定性のない浮いた狀態にある。

我は浮ばず　自分の境遇は彼等の如くに浮いたものではなくて玉の臺に靜に世を送る身であるべき世の中ではない。「我は浮ばず」は中止形で「浮はぬ身」と續くべき語。

橋姫の歌　古今戀四の「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」の歌語によつて、橋姫を姫君達のなしたもので、本歌の意味をとりつつ、姫君達の意にとりを推察して同情の涙に袖が濡れます。

疾きをこそ　斯かる折の返歌は早いが第一だとあつて。

さしかへる　川長は渡守で大君自身に比してある。私は朝夕濡らす涙で袖はくさつてしまひませう。

身さへ浮きて　伊行釋引「さす棹の雫に濡るる袖故に身さへ浮きても思ほゆるかな」大君の文を見て

まほにめやすく　の薫の感じ。

御車ぬて參りぬ　前に「京に御車ぬて參るべく人走らせ給ひつ」とあつた。

濡れたる御ぞ　薫が宇治に來られる途中一木の葉の露の散りかかるもいと冷かに、人やりならずいたく濡れ給ひぬ」とあつた狩衣である。

(小)・舟どもに柴刈り積み、おの〳〵何となき生業・・・

さておはしますほどの 八宮がどうせ僧達に布施を遣はされるだらうから同じくば寒さを凌ぐ絹や綿をと薫が氣をきかして。

大德達 前の「行人ども」と同格語。

狩の御ぞ 狩衣。

移し著て 衣裳だけは薫の身から移し著たが、からだは交換が出來ないので。

心にまかせて その香の爲に氣輕な動作も出來ず。

所せき人の御移香 あまりひどい移香で。「人の御移香」で一語で、人の親、人の恩などいふのと同じいひかた。

あまりなるや 香氣の高すぎるのもいゝかげんなものだ。

斯く御消息 薫から姫君に斯樣々々の御文がございました。

何かは いやなあに。「何かは苦しからむ」の意。

懸想だちて 薫を普通の懸想人扱ひにはせずに、平氣で應對されるがよからうの意。

例の若き人に 薫は通例の若者とは違つた性格のやうだから。

御みづからも 薫へ返事するやうに姫君達に促されたばかりでなく宮御自身も。

三の宮の 以下薫の心中。匂宮が、こんなに引込んだ處にゐる女で、逢つて見ると案外よいといふやうなのが面白いと、假想までして仰しやるのだもの。

聞え勵まして おだてあげて匂宮の心をいらだたせ。

見し曉の有樣 姫君達が琵琶や箏を弾いてゐられた時の事。

さればよ 「聞え勵まして御心騷がし奉らむ」との薫の考へが的中したから。

まろならましかば 私ならお見せするのだに。

さかし さうでせうとも。逆語である。

かの渡りは 宇治の姫君達はこんな日蔭者のやうな私が内證に獨占して其儘にしておくべき方のやうでもございませんから。

もりの僧ども、此頃の嵐にはいと心細く苦しか・らむを、さておはしますほどの布施賜ふべからむ、とおぼしやりて、絹綿など多かりけり。御行ひ果てて出で給ふあしたなりければ、行人どもに、綿、絹、袈裟、衣など、すべて一領の程づつ、ある限りの大德達に賜ふ。宿直人、かの御脱ぎ捨ての、艶にいみじき狩の御ぞども、えならぬ白き綾の御ぞの、なよ〳〵といひ知らず匂へるを移し著て、身をはたえかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとに咎められ・めでらるるなむ、なか〳〵所せかりける。心にまかせて身を安くも振舞はれず、いとむくつけきまで人の驚く匂ひを、失ひてばやと思へど、所せき人の御移香にて、えもすすぎ捨てぬぞあまりなるや。

君は、姫君の御返事、いとめやすくこめかしきを、をかしく見給ふ。宮にも、斯く御消息ありき、など人々聞えさせ御覽ぜさすれば、「何かは。懸想だちてもてない給はむも、なか〳〵うたてあらむ。例の若き・人に似ぬ御心ばへなめるを、『亡からむのちも』など、一言うちほめのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」など宣ひけり。御みづからも、三の宮の、かやうに奥まりたらむあたりの、見まさりせむこそをかしかる・べけれと、あらましごとにだに宣ふものを、聞え勵まして、御心騷がし奉らむ、と思して、のどやかなる夕暮に參り給へり。例のさま〳〵なる御物語聞えかはし給ふついでに、宇治の宮の・事語り出でて、見し曉の有樣など、委しく聞え給ふに、宮いとせちにをかしとおぼいたり。されば・よ、と御氣色を見て、いとど御心動きぬべくいひつづけ給ふ。「さてそのありけむ返りごとは、などか見せ給はざりし。まろならましかば」と怨み給ふ。「さかし。いとさま〳〵御覽ずべかめる端をだに見せ・給はぬ。かの渡りは、斯くいともうもれたる

いかでか尋ね 宇治までおいでになれる筈のものではございませぬ。

すかまほしくば 浮氣がしたければいくらでも浮氣の出來る世の中です。

さる方に見どころ 正妻などいふのではなく、それはそれで見ばえのあるやな女でれ物案じがほなのが人目を避けて住んでゐる家も。

いと世づかぬ聖ざま 隨分普通とは變つた坊さん臭い姫君達でご大層なのだらうと今迄は輕蔑して居りまして。

ほのかなりし ところが先夜ほのかに月下で見た姫君達の姿が書見てもなほ劣りしなければ、申分のない器量でせう。

けはひ有樣はた 「けはひ有樣」で一語と見るべき語。態度かといつても。

いとねたく 「ゆかしう思す」を修飾する。後世ならば「ねたくも」といふべきところである。

いま〳〵しい が見たくなる心を禁ずることが出來なかつたといふ意。

おぼろげの人に 並大抵の女に惚れる筈のない人がこんなに深く思ひこんでゐるのだもの、いよ〳〵加減な女ではあるまい。宮は勝手な振舞の出來ぬ高貴な御身分を厭はしく思ふ位にじれつたがられるのだ。

見果ててしがな その聖僧じみた詞の果てが見屆けたいものだ。

古人いとど打驚かされて 薫はもと三宮の事については疑を持つて居つたのだが、辨の話を聞いて一層その疑が刺戟されて感慨無量であるので。

をかしと見ることも この一句は婦人關係に就いて一般的にいつたものである。

網代をこそ此頃は 此頃は網代見物なさる季節です。

何かはそのひをむかしに 何でひを氷魚をむしとはかなさを競ふ身で氷魚を取る網代見物などをするものぞ。蜉蝣は朝生れて夕には死ぬ蟲。「その」は「ひを」にいひかけた枕詞。「寄らむ」は氷魚の縁語。竹又は檜の網代で車箱の屋形や左右の脇を張つた牛車。

縁 固織の義で地質を固く織つた薄い絹。やつれ衣のさまである。

いでやよしなくぞ侍る 薫が心にもない事をいつて一層宮をじれさせようとするのである。

暫し 後世ならば「暫しも」といふべきところ。暫らくでも。

思ひ給へる 河内本によるべきである。

身に引きこめてやむべきけはひにも侍らねば、必ず御覽ぜさせばやと思ひ給ふれど、（姫君達を宮に）いかでか尋ね寄らせ給ふべき。（宮樣ともあらうあなたが）かやすき（私如き手輕な身分）程こそ、すかまほしくば、いとよくすきぬべき世に侍りけれ。（の者こそ）うち隱ろへつつ多かめるかな。（人目につかぬ處に美しい女が深山あるやうです）の物思はしき、打忍びたるすみか・も、山里めいたる隈などに、おのづからはべるべかめり。この聞えさするわたりは、いと世づかぬ聖ざまにて、こちく〳〵しうぞあらむと年頃は思ひあなづり侍りて、耳をだにこそとどめ侍らざりけれ。ほのかなりし月影の見劣りせずば、まほならむはや。（嘆辭）けはひ有樣はた、さばかりならむをぞ、あらまほしき程と覺えはべる・べき」など聞え給ふ。はて〳〵は、まめだちていとねたく、おぼろげの人に心移るまじき人の、斯く深く思へるを、おろかならじ、とゆかしう思す事限りなくなり給ひぬ。猶又々よく氣色見給へ」と人をすすめ給ひて、限りある御身の程のよだけさを、厭はしきまで、

（宇治の姫君達）（宇治の姫君達）（以下句宮心中）（句宮は本氣になつて）（姫君達の事を）（句宮が姫君達を見）（句姫達の樣子を）（薫を）

心もとなしと思したれば、（薫はおもしろくて）をかしくて、「いでや、よしなくぞ侍る。（いやなに、女の事で苦勞するなどつまらぬ話ですよ）暫し世の中に心とどめじと思ひ給へるやうある身にて、（浮世に執心を持つまいと思ふ子細ある身故）なほざりごともつましう侍るを、（氣まぐれの戀なども氣がひけますもの）心ながらかなはぬ心つきそめなば、大きに思ひにたがふべき事なむ侍るべき」と聞え給へば、（素志に反するやうな事が出來ませう）「いでやあな事々し。（大袈裟な）例のおどろ〳〵しき聖言葉見果ててしがな」とて笑ひ給ふ。（薫の）心のうちには、かの古人のほのめかしし筋などの、（女三宮と柏木との事）いとど打驚かされて、ものあはれなるに、をかしと見ることも、（女も）めやすしと聞くあたりも、（女も）何ばかり心にもとまらざりけり。（薫の心にも）

神無月になりて、五六日の程に宇治へまうで給ふ。（薫が）「網代をこそ（今が丁度氷魚の節だから）此頃は御覽ぜめ」と聞ゆる人々あれど、（網代見物は拔きにして）薫「何かはそのひをむしに爭ふ心にて網代にも寄らむ」とそぎ捨て給ひて、（例のいと忍びやかにて出で立ち給ふ）身輕に・かろらかに網代車にて、縑の直衣指貫縫はせて、殊更び著給へり。（わざとらしく目立たぬやうに）宮待ち喜び給ひて、（八宮）所につけたる（宇治の山里にふさはしい御馳）

書請じおろして 経文。山からお招きして。

うちもまどろまず 敬語がない。研究ないから、中止形と見て、一さつたといふやうな意味の語が省かれてゐるものと考へなければならぬ。

ありししののめ 姫君達の音楽を立聞きした時の事。

なか〳〵に なまなか少しばかり聞きはつたので却つてはつきり聞きたゞして見たく物足らぬ感じがします。

色をも香をも 浮世の風流韻事を一切斷念してからは。何か本歌のありさうな語であるがおもひ出せない。

いとつきなく 世捨人となつた今日では琴を彈くなどの事は。

しるべする 合奏してくれる人があれば、その樂の音に導かれて思ひ出すことも出來ようと思はれる。

客人に更にほのかに 琵琶を薫に。先夜ほのかに聞いたのと同じ琵琶だとは全然考へられませぬ。

御あるじなど、をかしうしなし給ふ。暮れぬれば、大殿油近くて、さき〳〵見さし給へる書どもの深きなど、阿闍梨も請じおろして、義などいはせ給ふ。うちもまどろまず。河風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふおと、水の響きなど、あはれも過ぎて、物怖ろしく心細き、所のさまなり。明け方近くなりぬらむと思ふ程に、ありししののめ思ひ出でられて、ことのねのあれなる事のついで作りいでて、薫「さきの度霧にまどはされ侍りし曙に、いと珍らしき物のね一聲承りし殘りなむ、なか〳〵にいといぶかしう飽かず思ひ給へらるる」など聞え給ふ。八宮「色をも香をも思ひ捨てし後、昔聞きしことも皆忘れてなむ」と宣へど、人召して、きん取寄せて、八宮「いとつきなくなりにたりや。しるべする物のねにつけてなむ思ひ出でらるべかりける」とて、琵琶召して、客人にそそのかし給ふ。薫が琵琶を取りて調べ給ふ。薫「更にほのかに聞き侍りし同じ物とも思ひ給へられざりけり。

さがなや 口がわるい。

いづくよりか 姫君達は田舍者ですから、お耳にとまる程の奏法など習ひ知つてゐる筈はありませぬ。

心すごし すごいほどいい音色だ。

かたへは いと哀に心凄く感ぜられるのは、宮が上手だからであるが、又一つは峯の松風が相和して一段と音を引立てるからであらう。

おぼえなくて 「聞く」を修飾する。彈くのを聞いて意外におもふ時もありますが。

河波ばかりや 河波より外に調子を合はしてくれるものはないでせう。

物の用にすばかりの 物の役に立つ程の拍子など覺えては居ません。

思ひ寄らざりし 聞く人があらうとも思ひも寄らずに、二人で彈いて居つたのを薫がお聞きになつたのさへ恥かしうございますのに。

いとかたはならむ 恥の上塗りするやうで見苦しうございませう。

とかく聞えすまひて 何のかのと辭退して其れきりになつてしまふやうなので。

琵琶がよいからだと思ひましたがやはり彈手がよかつたのです御ことの響きがらにやとこそ思ひ給へしか」とて、薫は氣をゆるして心解けても琵琶を搔立て給はず。八宮「いで、あなさがなや。しか御耳にとまる程の奏法などはの手などは、いづくよりか此處までは傳はり來む。あるまじきこんな山里まで御事なり」とて、きん搔鳴らし給へる、いとあはれに心すごし。おぼめき給ひて、心ばへある手一つばかりにてやめ給ひつ。宮「こ氣のきいた曲を一曲だけで家でのわたりに、おぼえなくて折々ほのめく箏のことのねこそ、心奏法彈くともなく彈くを得たるにやと聞く折侍れど、心とどめてなどもあらで久しうなりにけりや。姫君達が勝手に氣にとめて敎へるといふこともなくて心にまかせておの〳〵琵琶や箏を搔鳴らすべかめるは、河波勿論ばかりや打合はすらむ。ろなう物の用にすばかりの拍子なども覺えず侍る」とて、宮「搔鳴らし給へ」とあなたに八宮が姫君達に聞え給へど、姫君達「思ひ寄らざりし獨りごとを聞き給ひけむだにあるものを、いとかたはならむ」と、尻込みして二人共引き入りつつ皆聞き給はず。度々そそのかし聞え給へど、とかく聞えすまひてやみ給ひぬめ

いと口惜しう覺ゆ　こゝに敬語を用ひなかつたのは、世を思ひすてた筈の薫としては宿着あるべきことなるべし。二一頁に心意味が移りぬべしと敬語なしにあひて移りぬべしの書きかたと同筆法であるなる。

斯く怪しう　姫君達がこんなに妙な世間並は居るがれの者のやうに思はれるとは思ひもよらなかつたような事やと見る。この一つ節の中と薫の心中と湖月抄の師説の一説があるそれで「かくあやしう思ひやりとはつかぬ思ひ外よりの思ひ世なれぬ琵琶琴などの姫君達の所作をは思ひのほかなつかしきは思ひの前にもはじめなる事と薫の恥思へると也にはなるさらにそに思ひうりをかしとは似ずあり」となつて、季吟も「此説文意すなほにて解しやすきに」といつてゐる。けれども、これ有れと様を薫どもの一心中といふやうなる「過ぐす敬語なしの筆法が解けなくなる。且つ薫の心中とすると、八宮の……ほだしなりけれ」とあるる詞が餘りに唐突である。其故「そのついでにも」から新しく筆を起して、さういふ恥かしい生活だから「人にだにいかで知らせじ」と話し出されたものと解くべきものと考へる。「ほだしなりけれ」を修飾する。世を思ひすてはねれば、薫はいと口惜しうおぼゆ。そのついでにも、斯く怪しう世づかぬ思ひやりにて過ぐす有様どもの、思ひの外なる事など、恥かしうおぼいたり。宮「薫にはともかくその他の人になりとも人にだにいかで知らせじとはぐくみ過ぐせど、私は今明日も知らぬ餘命の殘り少なさですが今日明日とも知らぬ身の殘りすくなさに、さすがに行末遠き人は、姫君達零落ちあふれて・流涙さすらへむ事、これのみこそげに世を臨終の折の心殘りの種です離れむきはのほだしなりけれ」と打相談かけられるので語らひ給へば、薫が八宮を心苦しう見奉り給ふ。薫「わざとの御後見だち、はかく〳〵しき筋に・侍らずとも、身内のやうに思つて頂きたいとうと〳〵しからず思召されむとなむ思ひ給ふる。暫しも私の存命中は後事を引受ける事をながらへ侍らむ命の程は、一言も斯くうちいで聞えさせてむさまを、たがへ侍るまじくなむ」など申し給へば、宮いと嬉しき事」と思し宣ふ。

さて曉がた・、宮の御行ひし給ふ程に、かの老人召しいでてあれたひ給へり。姫君の御後見にてさぶらはせ給ふ辨の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬ程なれど、物のいひぶりもどこやらみやびやかで風情があるみやびかに故あるけは

るもののさすがにそれだけは氣がかりだの意。子は三界の首枷といふが、いかにもその通りだの意。

わざとの御後見だち　姫君達の世話役らしいお世話役といふ格で（即ち夫として）頼りになる筋合ひではないにしても。

一言も　一言たりともかやうに申上げたお約束を決して違背は致しませぬ。

故あるけはひして　「物など聞ゆ」を修飾する。即ち口のきゝ方をいつてゐるのである。

げによその人の上と　辨が泣くのも尤もだ、他人の身の上の事として聞いてさへ切々だの情を禁じ得ないやうな昔物語ともの、まして年來氣がかりでその眞相が知りたく、事の由來はどうなんだらうかと。

しるしにや　下の「覺えぬついでに聞きつけつらむ」に續く句法。

斯くその世の　貴女のやうにあり方の當時の事情を知つてゐられる。私はあの一件を珍らしくも亦恥かしくも感じて居るのですが。

年頃かけても　私は今迄夢にもそんな事を聞いた事もなかつたのだのに。

一言にても　その上私は一言たりとも他人に話した事はございませぬ。

斯く物はかなく　私はこの通り賴りない取るにも足らぬ身分ではございますが。ひして、薫に物など聞ゆ。柏木衛門督故權大納言の君の、生涯煩悶し續けて世と共に物を思ひつつ、病ひづきはかなくなり給ひにし有様を聞えいでて、泣くこと薫の心と限りなし。げによその人の上と聞かむだにあはれなるべき古ふる事どもを、まして年頃おぼつかなくゆかしう、いかなりけむ、事件の眞相をはつきりと事を定かに知らせ給へ、と念じ祈念した事」と思し宣ふ。

その驗があつてかつるしるしにや、斯く夢のやうにあはれなる昔語りを、覺えぬない機會についでに聞きつけつらむ、と思すに、涙とどめがたかりけり。

薫「さてにしても、斯くその世の心知りたる人も殘り給へりけるを、珍らかにも恥かしうも覺ゆることの筋に、まだかいふやうにあの事をなほ斯くいひ傳ふるたぐひや又もあらむ、年頃かけても聞き及ばざりけるを」と宣へば、辨の從姉妹「小侍從と辨と放ちて、外に誰も又知る人侍らじ。一言にても、又他人にうちまねび侍らず。斯く物はかなく數ならぬ身の程に侍れど、夜晝かの御影につき奉りて侍りしかば、柏木のおそばはなれずお附き申して自然事情も分つて來ましたが おのづから物の氣色をも見奉りそめしに、御心よりあまりて思しける時々、只柏木が思案に餘つて煩悶してゐられた折々

物の氣色　女三宮と柏木との仲のそぶり。

只二人の中になむ　私共二人だけの手によつて稀の御文通もございました。

傍痛ければ　その邊の事情を委しく申上げるのは私達の働きを披露するやうで、きまりがわるいから。

斯かる身には　私如き者には過ぎた處置してよいか分らず、始終氣がかりに思つて居りまして。

いかにしてかは　どうしてお耳に入れたものかと。下の「思ひ給へつるを」に續く。

はか〳〵しからぬ　覺束ない念誦の折にも、その事を念じて居つたのは、はか〳〵しからぬ自分の様な者が念じた所で功驗もないの意。

今は何かは　今までは處置に困つて燒捨てようかとも迷つたのだが、今薫にお渡しする事が出來るから捨てる必要はない。

すこし頼もしく　お預りの品をお渡しする事が出來るものとすこし當が出來まして、かうした好機會もやと辛抱して居つた張合が出て參りました。これも全く前世からの因緣でございませう。

母　辨の母で柏木の乳母。

小侍從と辨と二人の中になむたまさかの御消息の通ひも侍りし。傍痛ければ、くはしく聞えさせず。柏木臨終の折今はのとぢめになり給ひて、聊か宣ひおく事の侍りしを、辨の事斯かる身にはおき所なくいぶせく思う給へわたりつつ、薫に聞いかにしてかは聞召しつたふべきと、はか〳〵しからぬ念誦のついでにも思ひ給へつるを、自分の願が達せられたのを見ると佛は世におはしましけりとなむ思う給へ知りぬる。お目にかけねばならぬ品（柏木の文の事）御覽ぜさすべき物も侍り。今は何かは燒きも捨て侍りなむ。かく朝夕の消えを知らぬ身の、辨の事御文をあ打捨て侍りなば、人目につく虞もあると落ち散るやうもこそと、いとうしろめたく思ひ給ふれど、薫がこの山莊へも時々お立寄りになるのをお見かけするやうになつたので この宮わたりにも、時々ほのめかせ給ふを待ち出で奉り・しかば、今の様な直接對面の折斯かる折もやと念じ侍りつる力出でまうで來てなむ。更にこれは前世からの因緣この世の事にも侍らじ」と、泣く〳〵こまかに、薫の生れ給ひける程の事・も・・、よく記憶して居つて聞ゆ。柏木の「空しうなり給ひし騒ぎに、母に侍りし人は、直にやがて病ひづきて、跡を追つて程も經ずかくれ侍りにしかば、私はいとど思ひ給へし

藤ごろもたちかさね　柏木の喪と母の喪と二重の喪に服して。

よからぬ人京のことさへ　性質のわるい男。薫母子のことはもとより京のことまでも。

あらぬ世の心地して　別世界に來るやうな氣持で。

父かたにつけて　系圖參照。

大臣（北方）＝左中辨（北方）＝柏木乳母＝侍從乳母＝小侍從
大臣（北方）＝八宮＝大君・中君

世にまじらふべきさまにも侍らぬを　「深山隱れの云々」につゞく。だから、山奥へ引込んだのだの意。

はしたなく　お二人の仲の御取持をしましたのでございますから、きまりわるくて。

深山隱れの朽木に　宇治の宮に御奉公に上つて。

さすがに　さすがに死ぬことも出來ませず。

例の明け果てぬ　前にも薫との物語の間に夜が明けたから斯くいふ。

さらば　「又人聞かぬ」に續く。

小侍從と辨と二人の中になむたまさかの御消息の通ひも侍りし。傍痛ければ、くはしく聞えさせず。柏木臨終の折今はのとぢめになり給ひて、聊か宣ひおく事の侍りしを、辨の事斯かる身にはおき所なくいぶせく思う給へわたりつつ、薫に聞いかにしてかは聞召しつたふべきと、はか〳〵しからぬ念誦のついでにも思ひ給へつるを、自分の願が達せられたのを見ると佛は世におはしましけりとなむ思う給へ知りぬる。お目にかけねばならぬ品（柏木の文の事）御覽ぜさすべき物も侍り。今は何かは燒きも捨て侍りなむ。かく朝夕の消えを知らぬ身の、辨の事御文をあ打捨て侍りなば、人目につく虞もあると落ち散るやうもこそと、いとうしろめたく思ひ給ふれど、薫がこの山莊へも時々お立寄りになるのをお見かけするやうになつたので この宮わたりにも、時々ほのめかせ給ふを待ち出で奉り・しかば、今の様な直接對面の折斯かる折もやと念じ侍りつる力出でまうで來てなむ。更にこれは前世からの因緣この世の事にも侍らじ」と、泣く〳〵こまかに、薫の生れ給ひける程の事・も・・、よく記憶して居つて聞ゆ。柏木の「空しうなり給ひし騒ぎに、母に侍りし人は、直にやがて病ひづきて、跡を追つて程も經ずかくれ侍りにしかば、私はいとど思ひ給へし

喪服づみ、藤ごろもたちかさね、悲しきことを思ひ給へし程に、年頃よからぬ人の辨に懸想して居つた男が心をつけたりけるが、人辨をだましてをはかりごちて、西の海のはてまで辨を取りもてまかりにしかば、京のことさへ九州辨の夫も九州でその人もかしこにて亡せ侍りにしのち、消息不通になつて十とせあまりにてなむ、上洛あらぬ世の心地してまかりのぼりたりしを、八宮この宮・は、辨の父方たにつけて、童より參りかよふ故侍りしかば、八宮方に車病の緣故で今は私など今はこの通り奉公などすべき年輩でもございませんものかう世にまじらふべきさまにも侍らぬを、冷泉院の女御殿の御方などこそ柏木の妹弘徽殿女御殿の方へ參り寄るべく侍りしかど、は、昔聞き馴れ奉り・しわたりにて、えう顏を出しませんで山奥へ引込んでしまひました えさし出で侍らで、深山隱れの朽木にはしたなく覺え侍りて、なりにて侍るなり。小侍從はいつか亡せ侍りにけむ。辨の晩年の今その當時のかみの若ざかりと見侍りし人は、數すくなくなり侍りにける末の世に、多くの人におくるる命を、悲しく思ひ給へてこそさすがに生きて居ります めぐらひ侍れ」など聞ゆる程に、例の明け果てぬ。薫「よし、さらば、此の昔物語は盡きすべうなむあらぬ。又人聞かぬ心やす

侍従　小侍従。

罪おもき身にて　實の父をも知らずに罪障深い身で終る所でした。

お前にて　あなたのお手でこの反故を燒捨てて下さい。孟津抄は「女三宮の御前にて燒捨給へ」と註してゐるが、それは誤。母の秘密を母の前に持出す筈はない。

やがて別れ侍り　其儘あはずに死別致しましたのも。

私ごとにはあらず　小侍從との死別は私情であるが、折角の預り物を傳へる事が出來なくなつたから、主人に對して申譯がなくて悲しく思ふのである。

かやうの古人は　辨のやうな老人は、女三宮と柏木との祕密を、不思議な事件の例として問はず語りにでも口外はしないだらうか。

さもや　それもさうだらう。

昨日はいとまの日　昨日は公務も休みでしたが。以下薫が八宮に申す語であるが、終りの方は詞と地との區別をぼかしてある。

き所にて聞えむ。侍從といひし人は、ほのかに覺ゆるは、五つ六つばかりなりし程にや、俄に胸をやみて亡せにきとなむ聞く。斯かる對面なくば、罪おもき身にて過ぎぬべかりけること・・」など宣ふ。ささやかに押卷き合せたる反故どもの黴臭きを袋に縫ひ入れたる、とりいでて奉る。「お前にて失はせ給へ。『われなほ生くべくもあらずなりにたり』と宣はせて、この御文を取集めて賜はせたりしかば、小侍從に又あひ見侍らむついでに、定かに女三宮にお渡し申さうと傳へ參らせむと思ひ給へしを、やがて別れ侍りにしも、私ごとにはあらず悲しうなむ思ひ給ふる」と聞ゆ。つれなくて、これは隱い給ひつ。かやうの古人は、問はず語りにや、怪しき事のためしにいひ・出づらむ、と苦しく思せど、返す〳〵も散らさぬ由を誓ひつる。さもや、と又思ひ亂れ給ふ。御粥、強飯など參り給ふ。「昨日はいとまの日なりしを、今日は內裡の御物忌もあきぬらむ。院の女一の宮惱み給ふ御とぶらひに必ず參る

此頃過ぐして　その取込みがすみましたら。

山の蔭　宇治の山莊の事。

唐の浮線綾　舶來の。文樣を浮かせて織つた綾。

組　組紐。

かの御名のふう　柏木の名を書いて封じてあつた。

御文の返事　柏木の文に對する女三宮の返事。

病はおもく　わが病は危篤で臨終になつたので。以下柏木の文の內容。

陸奥紙　昔奥州から產したからいふ。檀紙に同じい。

つぶ〳〵と　手が顫へて續けがきも出來ないのである。ぽつぽつと。

目の前に　悲しい世相を目の前に見ながら出家生活を送つてゐられるあなたよりも、あなたを置いて死にゆく私は悲しい。古今集哀傷「聲をだにきかでわかる魂よりも亡き床にねむ君ぞ悲しき」を打ちかへしてよんだものである。

べければ、かたがた〳〵いとまなく侍るを、又、此頃過ぐして、山の紅葉散らぬさきに參るべき由聞え給ふ。宮「斯くしば〳〵立ち寄らせ給ふ光に、山の蔭もすこし物あきらむる心地してなむ」など喜び聞え給ふ。

薫歸京後歸り給ひて、まづこの袋を見給へば、唐の浮線綾を縫ひて、「上」といふ文字をうへに書きたり。ほそき組して口の方をゆひたるに、かの御名のふうつきたり。あくるも怖ろしう覺え給ふ。いろ〳〵の紙にて、たまさかに通ひける御文の返事・・・・、五つ六つぞある。さてはかの御手にて、病はおもく限りになりにたるに、又ほのかにも聞えむこと難くなりぬるを、ゆかしう思ふことは添ひにたり、御かたちも變りておはしますらむがさまざま悲しき事を、陸奥紙五六枚に、つぶ〳〵と怪しき鳥の跡のやうに書きて、

柏木目の前にこの世を背く君よりもよそに別るるたまぞ悲しき

端に　その紙の端。**珍らしく聞き侍る**　珍らしくも兒が生れたさうですが、その兒の事は、源氏といふ後見があるから、何の心配もありませんが。**命あらば**　生きてさへ居れば、よそながらもそれが我が子だとその將來をも見てゐようものを。

げに落ち散り　四〇頁に辨が「落ち散るやうもこそ」といつた詞を受けていふ。

内へ參らむと　前に「今日は内裡の御物忌もあきぬらむ。院の女一の宮惱み給ふ御とぶらひに必ず參るべければ」とあつた。**恥ぢらひて**　紫式部日記に昔は女は經をよむのでさへ漢文をよむことを避けたものだと女房がいつたといふ事が見えてゐる。源氏物語は紫式部時代よりも前の時代の出來事として書かれてある。こゝも婦人の經讀むのを恥ぢたものと解すべきであらう。**何かは知りにけりとも**　柏木との祕密を自分が知つてゐるなどと何で母宮に知らせてよいものかと。

また端に、柏木「珍らしく聞き侍る薫の事二葉の程も、うしろめたう思ひ給ふる方はなけれど、

柏木　命あらばそれとも見まし人知れず岩根にとめし薫の事松の生末」

中止したやうに書きさしたるやうにいと亂雜に書いてりがはしくて、「侍從の君に」と上には書きつけたり。紙魚といふ虫のすみかになりて、古めきたる黴臭さながら、筆蹟跡は消えず、只今書きたらむにも違はぬ言の葉どもの、こまぐと定かなるを見給ふに、げに落ち散りたらまし（よ）かばと、氣がくりでもあり うしろめたういとほしき事どもなり。薫の心斯かること世に又あらむや、と心一つにいとど物思はしさ添ひて、内へ參らむと思しつるも、參内する氣になれない出で立たれず。女三宮宮のお前に參り給へれば、宮はいと何の物思もなく若々しい姿で何心もなく若やかなるさまし給ひて、經讀み給ふを、宮は恥ぢらひてもて隱し給へり。薫の心何かは知りにけりとも知られ奉らむ、なと心に胸一つにをさめてこめて、よろづに思ひ居給へり。

二月の二十日の程に、兵部卿の宮初瀬にまうで給ふ。古き・・

御願なりけれど、おぼしも立たで年頃になりにけるを、宇治の

わたりの御中宿りのゆかしさに、多くは催され給へるなるべし。

怨めしといふ人もありける里の名の、なべて睦まじう思さるる

故もはかなしや。上達部いとあまた仕うまつり給ふ。殿上人な

どは更にもいはず、世に殘る人すくなく仕うまつれり。六條の

院より傳はりて右の大殿知り給ふ所は、川よりをちにいと廣く

面白くてあるに、御まうけせさせ給へり。おとども、かへさの

御迎へに參り給ふべく思したるを、俄なる御物忌のおもく慎み

給ふべく申した・れば、え參らぬ由のかしこまり申し給へり。

宮なますさまじと思したるに、宰相の中將、今日の御迎へに參

りあひ給へるに、なか〳〵心やすくてかのわたりの氣色も傳

へよ・らむと、御心ゆきぬ。おとどをば、打解けて見えにくく、

事々しきものに思ひ聞え給へり。御子の君だち、右大辨、侍從

宮なますさまじと 句宮は夕霧の不參を何となく不興に思召したが。

なが〳〵 「御心ゆきぬ」を修飾する。

心やすくてかのわたりの氣色も 八宮の樣子も見て氣樂に接近しようと。「心やすくて」は「傳へよらむ」を修飾する。

おとどをば 句宮は夕霧を、氣樂に會ふことがしにくくて、けぶたく思召された。

二月の二十日の程に、兵部卿の宮初瀬にまうで給ふ。古き・・

御願なりけれど、おぼしも立たで年頃になりにけるを、宇治の

わたりの御中宿りのゆかしさに、多くは催され給へるなるべし。

怨めしといふ人もありける里の名の、なべて睦まじう思さるる

故もはかなしや。上達部いとあまた仕うまつり給ふ。殿上人な

どは更にもいはず、世に殘る人すくなく仕うまつれり。六條の

院より傳はりて右の大殿知り給ふ所は、川よりをちにいと廣く

面白くてあるに、御まうけせさせ給へり。おとども、かへさの

御迎へに參り給ふべく思したるを、俄なる御物忌のおもく慎み

給ふべく申した・れば、え參らぬ由のかしこまり申し給へり。

宮なますさまじと思したるに、宰相の中將、今日の御迎へに參

りあひ給へるに、なか〳〵心やすくてかのわたりの氣色も傳

へよ・らむと、御心ゆきぬ。おとどをば、打解けて見えにくく、

事々しきものに思ひ聞え給へり。御子の君だち、右大辨、侍從

御門后も 匂宮は父帝も母后も特別御寵愛の皇子故。

まいて六條院の まして源氏の一門は、母后が源氏の御女故、夕霧を始めそれ以下の人々も、一同匂宮を内輪の主君として心を傾けて奉仕してゐられる。

所につけたる 宇治に相應しい裝飾などおもしろくとりつくろつて。夕霧からの御馳走のさま。

彈棊 盤の兩端に碁石をおいて指ではじき、他端の石にあてて勝負を決する遊戯。

此處にやすらはむ 姫君達に心があるから。

惱ましくおぼされて 「打休みの宰相、權・中將、頭の少將、藏人の兵衞佐など、皆匂宮のお供にさぶらひ給ふ。御門后明石中宮も心殊に思ひ聞え給へる宮なれば、世間の信望も非常なもので大方の御覺えもいと限りなく、まいて六條の院の御方ざまは、次々の人も、皆私の君に心寄せ仕うまへり給ふ。所につけたる御しつらひなど、をかしうしなして、碁、雙六、彈棊の盤どもなど取出でて、思ひくに遊び暮された心々にすさび暮し給ひつ。匂宮はあるきつけてゐられないので宮はならひ給はぬ御ありきに、惱ましくおぼされて、八宮方に泊りたいとの下心もあるので休んで時間をおくらしたのである此處にやすらはむの御心も深ければ、晝の間は打休み絃樂器を給ひて、夕つかたぞ御こととなど召して遊び給ふ。例の宇治の如きかう世離れたる所は、水のおとももてはやして、音色も一段と澄むやうに思はれて樂の音を引立てて物のねすみまさる心地して。かの聖の宮にも、只さしわたる程なれば、追風に吹きくる響きを聞き給ふに、匂宮の樂の音を八宮が昔のこと思し出でられて、八宮の心に笛をいとをかしくも吹きとほしたるかな。誰ならむ。昔の六條源氏の院の御笛のね聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたるねにこそ吹き給ひしか。これは澄みのぼりて、事々しきけの添ひたるは、致仕の

かの聖の宮にも 八宮の御殿にも、此處からは只一棹で達する程の近さであるから。山莊は川の京都側匂宮はその對岸にゐられるのである。

吹きとほしたる 川のこちらまでもおもしろく聞えてくることよ。

これは 今吹いてゐる笛の音はどこまでも澄みきつて、ものものしいやうな音色がするのは。

致仕のおとど 昔の頭中將。薫は實は柏木の子で、柏木は致仕大臣の子である。

あはれに久しく 昔管絃を遊んだ當時から久しくなつたものだ。

さすがに 佗しい生活ながらも年數だけは多く積つたのが生き甲斐のない事だ。

空相の君の 薫は、同じ事ならば堺にしたい人だのに、生憎薫にはその氣がないらしい、その點をおもつて薫にも申出さないでゐるのに、まして當世風の輕薄者などは相手にされるものか。

つれ〳〵と眺め給ふ つくづくと物思ひに耽つてゐられる八宮の御所は。

春の夜も 短い春の夜も物思故に。

飽かず 「おぼす」を修飾する。

散る櫻あれば 伊行釋引「櫻咲く櫻の山の櫻花散る櫻あれば咲く櫻あり」

河ぞひ柳の 六帖六「いなむしろ河ぞひ柳水ゆけば起き臥しすれど其根絶えず」顯宗紀「いなむしろ河ぞひ柳水ゆけば靡き起き立ち其根は失せず」

おとどの御族の笛のねにこそ似たン「なれ」など獨りごちおはす。宮「あはれに久しくなりにけるや。かやうの音樂遊びなどもせで、あてゐるとも言へない樣な有樣でるにもあらで過ぐし來にける年月の、さすがに多く數へらるるこそかひなけれ」など宣ふついでにも、姫君達の御有樣惜しくあたらしく、斯かる山ぶと山陰に埋木にはしてしまひたくないところに引きこめてはやまずもがな、と思しつづけらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひ寄るまじかめり、まいて今やうの心淺からむ人をばいかでかは、など思し亂れて、つれ〳〵と眺め給ふ所は、春の夜もいとあかしがたきを、音樂などで有頂天になつてゐられる匂宮の心やり給へる旅寢の宿りは、醉ひのまぎれにいと疾う明けぬる心地して、匂宮は歸京をもの足りなく飽かず歸らむことを宮はおぼす。

はる〳〵と霞みわたれる空に、散る櫻あれば今開けそむるなど、いろ〳〵見わたさるるに、河ぞひ柳の起き臥し靡く水影など、水に映る影一と通りならずおろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ匂宮人は、いと珍らしく

宰相は　薫はかうした好機を逸せずに八宮の御所をお訪ねしたいと思召すが。

一人漕ぎいで　只一人でお訪ねするのはなから躊躇し輕率な振舞ではあるまいかと思はれる間に、あちらから御消息が來た。

山風に　山風につれて霞の間をもれて、笛の聲は聞えて來ます。邪魔をしてゐるやうだ。白波が隔てゝゐると見えて、お訪ね下さらないのが恨めしい。

草　萬葉假名と平假名との中間の字體で、漢字の草書に類した假名。

宮おぼすあたりと　匂宮はわが意中の八宮の方からの御消息と見て取られたので。

をちこちの　宇治の兩岸の川波は邪魔をして居つても、何卒親しくしたいと思召す。

酣醉樂　花鳥一月、藤宴舟樂奏ニ元年閏三月十一日、藤宴舟樂奏ニ酣醉樂一舞四人云々。今案酣醉樂は右樂也。船樂に其例よせあるにや」

造りおろしたる　寢殿は高い所にあつて川に臨んでゐる。廊は低い所にあつて川に橋を斜に造りおろしてあるのである。その寢殿から廊に造りおろしてある。

網代屏風　網代で張つた屏風。網代は檜や竹などを薄くして斜めに又は縱横に編んだもの。

いといたう　「御しつらひを」を受けてゐる。設備を十分にしてゐる。

見捨てて歸りにくく見捨てがたしと思さる。宰相は、斯かるたよりを過ぐさず、かの宮にまうでばやと思せど、あまたの人目をよぎて一人漕ぎいで給はむ船渡りの程もかろらかにや、と思ひやすらひ給ふ程に、八宮方から かれより御文あり。

八宮　山風に霞吹きとく聲はあれど隔てて見ゆるをちの白波

風流に　草にいとをかしう書き給へり。宮、おぼすあたり・と見給へば、いとをかしくおぼいて、匂「この御返りは我せむ」とて、

匂宮　をちこちの汀の波は隔つともなほ吹き通へ宇治の河風

薫は八宮方に中將はまうで給ふ。音樂に熱心な遊びに心入れたる君だちさそひて、棹をさしやり給ふ程「酣醉樂」遊びて、八宮の御殿のさま水にのぞきたる廊に、造りおろしたる橋の趣向の心ばへなど、それはそれでさる方にいとをかしう故ある宮なれば、注意して人々心して船よりおり給ふ。この山莊は夕霧の別莊とは趣が違つて居つて代屏風などの、殊更に簡素にして事そぎて、見どころある御設備しつらひを、薫等を迎へるつもりで掃除をしさる心してかき拂ひ、いといたうしなし給へり。古へのねなど、

古へのねなど　舊い樂器など。次の「いと二なき彈物ども」と同格同義語。

わざと設けたるやうにはあらで　こゝに「設け給へり」といふやうな省文がある。

壹越調の心に　櫻人は呂の歌で雙調であるのを壹越調に變調して彈いたのである。

櫻人　催馬樂の曲名。「櫻人、櫻人、その舟ちじめ、島つ田を、十町造れる、見て歸りこんや、そよや、あす歸りこんや、そよや」

あるじの宮の御琴を　八宮は和琴の名手であらせられた。

よそに思ひやりし程よりは　この一句は「さる方に古めきて云々」の句に續く。

なま孫王めく　細流「帝王の御孫より孫王を孫王といふ。おほきみといふも王孫の末々の人なるべし」

諸王四位のふるめき　湖月抄師說「王氏の四位なるべし」

斯くいと人目見るべき　御來客があつたらと、かねゝ人手のないのを氣の毒がつてか。

さる方に　古風は古風で、それ相當に風情のある態度であつた。

まいて　自由に振舞ひ得る若人達でさうだから、匂宮はまして。

斯かる折にだにと　偶々此處に來られたこの好機會になりとも姫君達に近づかうと。

無上の彈物ども　薫の供人等が彈き出で給ひて、壹越調の心に「櫻人」遊び給ふ。あるじの宮の御琴を、斯かるついでにと人々思ひ給へれど、好機會に聞きたい　來客等が　八宮は　箏のことをぞ、心にも入れず折々搔合せ給ふ。合奏なさる　耳馴れぬけにやあらむ、いと物深く面白しと若き人々思ひしみたり。聞き馴れぬせいか　薫の供人達　所につけたるあるじいとをかしうし給ひて、場所柄相應な御馳走を風流にして　よそに思ひやりし程よりは、なま孫王めく外で想像して居つたとは違つて賤しからぬ人あまた、諸王、四位の古めきたるなど、見るべき折とかねて・・いとほしがり聞えけるにや、限り參りあひて、瓶子取る人もきたなげならず、お酌をする人も めきてよし〳〵しうもてなし給へり。客人たちは、御むすめたちのすまひ給ふらむ御有樣思ひやりつつ、生活狀態を　氣を揉む心つくす・人もあるべし。匂宮　かの宮は、まいてかやすき程ならぬ御身をさへ　窮屈に　所せく思さるるを、斯かる折にだにと、忍びかね給ひて、面白き花の枝を折らせ給ひて、御供にさぶらふ上童の　美しい殿上童を使として　をかしきして奉り給ふ。

山櫻匂ふあたりに 山櫻の匂ふ宇治に尋ね來て、姫君達のと同じ櫻の枝を折つて插頭にしました。

野をむつまじみ 萬葉八・續古今春下赤人「春の野に菫摘みにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」を引いて書いたもので、あなたのなつかしさに一夜とまりましたのの意。

古人 老女房。當世は存じませぬが、私の若かつた比はの意。「し侍りし」と過去にいつてある點に注意。

かざしをる あなたは插頭の花を折る爲にこの山莊を素通りしかねて立ち寄られただけなのです。

野を分きてしも 伊行釋に「分きてしも何匂ふらむ秋の野に何れともなく蘢く尾花に」を引いてあるが、これは秋の歌だから、違つてゐるだらう。引歌不明。

げに河風も 四八頁の二首の歌を受けていふ。「さまに」は中止形で「さまにて」であつて、「……さまに吹きかよふ」と續けて見てはならぬ。

吹きかよふ 河風が分けへだてしないからその河風が樂の音を載せて河のあなたこなたと吹きかよふの意。

藤大納言唐のも大和のも 紅梅（柏木の弟）詩も和歌も。

しるべなくても 薫の手引なく直接にも。

わざと懸想だちても 別段懸想らしい素振のないやうにしよう。それは却つて氣を揉む種にならう。

斯かる人など 八宮方には姫君達があるなどと聞かれて、默つて居れなくてての慰みだらう。

いつとなく いつを限りとなく心細さが續くの意。

あらまほしく 理想的な美人であるにつけても却つていぢらしい。

かたほにも もし姫君達が不器量でもあつたら、こんな山里に埋木にしてしまふのが惜しいといふ心持は薄からうに。

世に心とどめ 憂世に執着を持ちにならないから、後生の準備ばかりをしてゐられるので、極樂住生も出來さうであるが。

「山櫻匂ふあたりに尋ね來て同じかざしを折りてけるかな
野をむつまじみ」とやありけむ。御返りは、いかでかはなど、
なし、程の經るも、なか〳〵憎きことになむし侍りし」など古
人ども聞ゆれば、中の君にぞ書かせ奉り給ふ。
「かざしをる花のたよりに山賤の垣根を過ぎぬ春の旅人
野を分きてしも」と、いとをかしげに、巧者にかいてあるらう〳〵じく書き給へ
り。げに河風も心わかぬさまに、吹きかよふ物のねども、面白
く遊び給ふ。御迎へに、藤大納言、仰せごとにて參り給へり。
人々あまた參りつどひ、物さわがしくてきほひ歸り給ふ。若き
人々、飽かずかへりみのみ・せられける。宮は又さるべきつ
いでしてと思す。花さかりにて、四方の霞も眺めやる程の見ど
ころあるに、唐のも大和のも、歌ども多かれど、うるさくて尋
ねも聞かぬなり。

物さわがしくて、思ふままにもえいひやらずなりにしを、飽か
ず宮はお・ぼして、しるべなくても御文は常にありけり。宮も、
「なほ聞え給へ。わざと懸想だちてもてなさじ。なか〳〵心と
きめきにもなりぬべし。いとすき給へる親王なれば、斯かる人
な・ど聞き給ふが、なほもあらぬすさびなめり」と、そそのか
し給ふ時々、中の君ぞ聞え給ふ。姫君は、かやうの事たはぶれ
にもて離れ給へる御心深さなり。いつとなく心細き御有樣に、
春のつれ〴〵は、いとど暮しがたく眺め給ふ。ねびまさり給ふ
御さまかたちども、いよ〳〵まさり、あらまほしくをかしきも、
なか〳〵心苦しう、かたほにもおはせましかば、あたらしく惜
しき方の思ひは薄くやあらまし、など明暮おぼし亂る。姉君二
十五、中の君二十三にぞなり給ひける。
宮はおもく愼み給ふべき年なりけり。物心細くおぼして、御行
ひ、常よりもたゆみなくし給ふ。世に心・とどめ給はねば、い

ただこの御事どもの　たゞ姫君達の事が可愛さうで。この句は「おぼすさまにはあらずとも云々」の句に續く句法。

おぼすさまには　十分とはゆかぬまでも、一通りそれ位なら世間體も濟まされさうでもあり、我慢も出來さうな身分の男で、眞心から世話しようなどと思ふ人があるならば、知らぬがほで許してしまはう。

一所世に任みつき給　二人の中の一人が緣づかれたら、その男に殘る一人が世話を任せて安心して死ぬ事も出來るのだが、それ程まで腹をすゑていひ寄つてくる男もない。

物詣での中宿り　初瀨詣などの歸りに泊つたり。

なほざりごと　冗談。思ひ付。

さすがに　「めざましう」を修飾する。如何に困つてゐるとはいひながらさすがに。

眺め給ふ　物思に沈んでゐられる。河内本は本の儘。

さるべきにや　これも前世の因緣であつたのだらう。「さるべきにや」を「中納言になりにけり」に掛けて見る細流や孟津の說は取らなけれど。句宮が遂に結婚するに至つたのは前世からの因緣だらうと草子地である。

で立ち急ぎをのみ思せば、涼しき道にもおもむき給ひぬべきを、（極樂の道）ただこの御事どものいとほしく、限りなき御心強さなれど、（現世離脫の上には非常に氣强いお方だが）必ず今はと見捨て給はむ御心は亂れなむ、（臨終の折に正念が亂れる事だらう）と見奉る人も推し量り聞ゆるを、おぼすさまにはあらずとも、（八宮の御心）なのめにさても人聞き口惜しかるまじう見許されぬべききはの人の、眞心に後見聞えむなど思ひ寄り聞ゆるあらば、知らず顏にて許してむ、（姫君達を）一所（ひとところ）（々）・・世に住みつき給ふよすがあらば、それを見讓る方に慰めおくべきを、さまで深き心に尋ね聞ゆる人もなし、まれ〳〵は、（一寸した機會に）はかなきたよりに、すきごと（姫君達に）聞えなどする人（は）・・、又若々しき人（人は）の心のすさびに、物詣での中宿り、往き來（た）の程のなほざりごと（氣まぐれから）に、氣色（姫君達に色目をつかつて）ばみかけて、さすがに斯く眺め・・給ふ有樣（姫君達の）など推し量り、（姫君達に對して）あなづらはしげにもてなすは、めざましう（八宮がけしからん事に思はれて）て、なげのいらへをだにせさせ給はず。三の宮（匂宮）ぞ、なほ見（姫君達を手に入れずは）ではやまじと思す御心深かりける。さるべきにやおはしけむ。

いかなる事と　辨君に一部始終を聞いてからは、どうした事ぞと不審に思ひ續けて居つた今迄よりも心苦しくて。

かの老人をば　かの辨君を不便な者と始終念頭におかれて、目立たぬやうにとやかくと人前を繕つて、目をかけておやりになる。

七月ばかり　「その秋中納言になり給ひぬ」とあるのも同じ時の事である。

槇の山べも　橋姫卷に槇の尾山とあつた。

宮はまいて　久々の對面であるから。

この度は心細げなる　薨去の豫感があるから。

物のたより　何かのついで。

おもむけつつ　姫君達を半分は指圖するやうにして依賴なさる。

一言にても　橋姫卷にも「一言もかく打出で聞えさせてむさまを逆へ侍るまじくなむ」と薫の言つたこともあるから、宮から薫に御依賴があつた事が知られる。

薫宰相の中將その秋中納言になり給ひぬ。いとど匂ひまさり給ふ。世事向の要事で忙しくなるにつけても世の營みに添へても、おぼす事多かり。いかなる・・事と、いぶせく思ひわたりし年頃よりも心苦しうて、死なれた柏木の事が思ひやられるにつけても過ぎ給ひにけむ古へざまの思ひやらるるに、柏木の罪障が輕減される程罪かろくなり給ふばかり行ひもせまほしくなむ、かの老人（おいびと）をばあはれなるものにおもひ（ほし）おきて、いちじるきさまならずとかく紛らはしつつ、心寄せとぶらひ給ふ。薫が宇治に宇治にまうでで久しうなりにけるを思ひ出でて參り給へり。七月（ふみづき）ばかりになりにけり。都にはまだ秋がやつて來ないのに都にはまだ入り立たぬ秋の氣色を、音羽の山近く、風の風の音もいと冷やかに、槇（まき）の山べも僅に色づきて、薫の心に秋の景色が深いのを（もつと山深く）なほ尋ね來たるに、をかしう珍らしう覺ゆるを、宮（御）はまいて例（れい）多く申し給ふ。八宮「亡（私の）からむのち・・・（の世に）、この君（姫君達）だちを、さるべき機會に音づれて）にも音づれて）き、物のたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬものに數まへ給へ」（見捨てずに世話してください）などおもむけつつ聞え給へば、薫「一言（ひとこと）にても承（先日も）りおきてしかば、

何事も頼もしげなき 萬事頼りにもならぬ、前途の望みも薄い私ではございますが。

山の端近き 八宮がわが御身に思ひよそへられたのである。

九重 湖月抄本は「くちう」と假名書である。細流の說は「九重」といふ儀あれども宮中可然也」とあるが、河内本は假名書の右に「九重」と傍書してある。當時「うち」といふ言葉はあつたが、「宮の中」或は「内裏」といふ言葉はなかつたやうに思ふ。これは當時の標準語を字書で「コノヘ」と「クヂユウ」とのいはれたもので、もはや交際社會から遠ざかつた人を寫す爲に、ことさら廢語を使はせたものであらう。

おのがじしは 内心では各自に競爭しあひながら、表面は仲好くしてゐる女御更衣の局々に於て。

女はもてあそびの 女といふものは慰み事の相手にはよいもので、つまらないものながらも、人に氣を揉ませる種であるやうだ。

さらに思う・給へ怠るまじくなむ。世のなかに心をとどめじと省き侍る身にて、何事も頼もしげなき生先の少なさになむ侍れど、さういふ頼りない有樣でも生きてゐる間はさる方にてもめぐらひ侍らむ限りは、變らぬ志を御覽じ知らせむとなむ思う・給ふる」など聞え給へば、いと嬉しとおぼいたり。

有明の月が夜深き月のあきらかさにさし出でて、山の端近き心地するに、念誦いとあはれにし給ひて、昔物語し給ふ。宮「此頃の世はいかがなりにたらむ。九重などにて、かやうなる秋の月に、お前の御遊びの折にさぶらひあひたるなかに、物の上手とおぼしき限りとり〴〵に打ち合せたる拍子など、事々しきよりも、よしあるこそ。ある女御更衣の御局々の、おのがじしは挑ましく思ひ、うはべの情をかはすべかめるを、夜深き程の、人のけしめりぬるに、心やましい調子でくしらべ、ほのかにほころび出でたる物のねなど、聞きどころあるが多かりしかな。何事にも、女はもてあそびのつまにしつべく、物はかなきものから、人の心を動か

子の道の闇を 親の苦勞を考へて見ても、男の子はさ程心配をかけないものである。後撰雜一兼輔人の親の心はあはれ闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」

女は限りありて 女の子は、心配するにも限度といふものがあるから、仕方のないものと諦めて見るにつけても、親としては矢張氣苦勞なものだ。

すべて誠に 私は先程申上げた通り、すつかり心から憂世を斷念して居るせいでせうか。

迦葉 摩訶迦葉波の略。釋迦十大弟子の一。河海一香山大樹緊那羅於三佛前、彈二瑠璃琴一奏二八萬四千音樂一、迦葉尊者忘二威儀一而起出（大樹緊那羅經法華文句第二引）乾闥婆王奏レ樂、直得須彌震動、大海騰レ波迦葉起舞（傳燈錄）」

いとど人のけはひも 人音も絶えてものあはれな空模樣、場所柄故に。「いとど」は一を修飾する。「いとど」は一をかしう覺ゆれど、用意もなし

わざとなき御遊び 琴のねが氣に入つて、彈かれる姫君の薫はおもしろくおもはれるが。

すくさはひになむあるべき。されば罪の深きにやあらむ、子の道の闇を思ひやるにも、をのこはいとしも親の心を亂さずやあらむ。女は、限りありていふかひなき方に思ひ捨つべきにも、なほいと心苦しかるべき」など、大方の事につけて宣へる、いかがさ思さざらむと、心苦しく思ひやらるる御心のうちなり。

薫「すべて誠にしか思ひ給へ捨てたるけにや侍らむ、みづからの事にては、いかにもいかにも深う思ひ知る方の侍らぬを、げにはかなき事なれど、聲にめづる心こそ、背きがたき事に侍りけれ。さかしう聖だつ迦葉も、されば立ちて舞ひ侍りけむ」など聞えて、飽かず一聲聞きし御ことのねを、せちにゆかしがり給へば、疎々しからぬ初めにもとや思すらむ、御みづからあなたに入り給ひて、せちにそそのかし聞え給ふ。箏の御ことをぞ、いとほのかに搔鳴らしてやみ給ひぬる。いとど、人のけはひも絶えて、哀なる空の氣色、所のさまに、わざとなき御遊びの心

おのづから 自然なじんでいくだらう。これだけお近づきにしてあげたから、あとは若いあなた方同志にお任せ致しませう。

我なくて 私が死んでこの草庵が荒れ果ててしまつても、姫君達を受引けて下さるとのお約束に間違はあるまいと信じて居ります。「かれじ」は草の縁語。

かたくなしき僻言 愚癡な繰言を長々と申上げました。

いかならむ 末長くお約束申したからには、永久に違變はございませぬ。「草の庵」は前の歌の詞を用ひたもので、「結べる」は草の縁語。

相撲 公事根源「これは諸國の供御人を召し集めて、七月に相撲の節といひて、天子の御覽ずる事なり」簾垂などに透いて見える人影。

世の常の 薫は世間並の色めかしい態度はなく。

さるべき御いらへ 姫君達も必要なだけの御返事はなさる。

に入りて、をかしう覺ゆれど、打解けて（大君も中君も）・もいかでかは彈きあはせ給はむ。宮おのづから。かばかり馴らしそめつる殘りは、世ごもれるどちに讓り聞えてむ」とて、宮は佛のお前に入り給ひぬ。

「我なくて草の庵は荒れぬともこの一ことはかれじとぞ思ふ（八宮）（言に琴を響かす）

斯かるたいめんも、この度や限りならむと物心細きに、忍びかねて、かたくなしき僻言多くもなりぬるかな」とて、打泣き給ふ。客人、

「いかならむ世にかかれせむ長き世の契結べる草の庵は（薫）

相撲など、公ごとども紛れ侍る頃過ぎてさぶらはむ」（公事が重なつてそれに取紛れる時期がすんでから伺ひませう）など聞え給ふ。こなたにて、かの問はず語りの古人召出でて、殘り多かる物語などせさせ給ふ。入り方の月は隈なくさし入りて透影なまめかしきに、君だちも奥まりておはす。（姫君達は透影を見られるのを恐れて）世の常の懸想びてはあらず、心深う・物語のどやかに聞えつつ物し給へば、さるべ（日の物語）（多く語り殘した先辨の君）（用心深く）

三の宮は 匂宮が姫君達に大層執心をつてゐられるのだが、と薫は内心に思ひ出しつつ。自分ながらも自分は矢張人と違つた人間だ、あれ程分の八宮が進んで姫君達を許されたのに、別段せく氣にもなれないよ、と言つて併し姫君達となのの結婚をけしからぬ事として遠いてゐる氣にもなれない。

わが心ながら

あはれをも情をも 感想やら情合やら、贈答するにもわるくはない姫君達であるから。

宿世異にて 自分とは緣がなくて姫君達が他人と結婚されたら殘念だらうと思はれて、既にわが物にしてしまつたやうな氣持でゐられた。

さるべきついで 適當な機會。宮樣故に手輕なありきも出來ないのである。

まめやかに 匂宮が眞劍に思ひこんでの事とも思召さぬので、文を贈られても、うるさがりもせず、簡單にあしらつて、時々文通される。

き御いらへなど聞え給ふ。三の宮はいとゆかしうおぼいたるものを、と心のうちには思ひ出でつつ、わが心ながら、なほ人にはは殊なりかし、さばかり御心もてゆるい給ふことの、さしも急がれぬよ、もて離れてはたあるまじき事とはさすがに覺えず、（これ位の關係で互に交際もしかやうにて物をも聞えかはし、折節の花紅葉につけて、あはれをも情をもかよはすに、憎からず物し給ふあたりなれば、宿世異にて、外ざまにもなり給はむは、さすがに口惜しかるべく、領じたる心地しけり。まだ夜深き程に歸り給ひぬ。心細く殘りなげにおぼいたりし御氣色を思ひ出で聞え給ひつつ、騷がしき程過ぐしてまうでむと思す。兵部卿の宮も、この秋の程に、紅葉見におはしまさむと、さるべきついでを思しめぐらす。御文は絶えず奉り給ふ。女は、まめやかに思すらむとも思ひ給はねば、煩はしくもあらで、はかなきさまにもてなしつつ、折々に聞えかはし給ふ。（花や紅葉や四季の景物につけて）（姫君達は）（明けるに間のある頃）（薫歸京）（姫君達に）（餘命いくばく）（相撲の節などと忙し）（匂宮から）

例の靜かなる所　阿闍梨の寺。

さるべき事　八宮亡き後の身の振方についての心得。

思ひ慰むかた　父母の内の一方が亡くなつても一人が生きて居れば、あきらめのつく點もあつて悲しさも薄らぐものだ。「悲しさ」は死んでゆく者の悲しさで、殘されたものの悲しさではない。

又見讓る人もなく　私が死んでは兩親共にない事故、あとの世話を依頼すべき人もなく。

長き世の闇にさへ　現世に於て煩悶した上に未來永劫成佛が出來ずにゐるのがつまらぬ事だ。

わが身一つに　私一人の爲だけでなく、亡き母上の名譽の爲にも、輕率な考を出してはいけませぬ。

只かう人に違ひたる　人とは運命を異にした身と覺悟して、此處で生涯を終らうと決心しなさい。

ひたぶるに　覺悟さへ堅固ならば、何の事もなく年月は過ごせるものです。

いちじるく　人目に立つやうな毒なやうな非難を受ける目も氣の方が得策です。

秋深くなりゆくままに、宮はいみじう物心細く覺え給ひければ、例の靜かなる所にて、念佛をも紛れなくせむと思して、君だちにもさるべき事・・・聞え・・・給ふ。宮「世の事として、つひの別れをのがれぬわざなめれど、思ひ慰むかたありてこそ悲しさをもさますものなめれ。又見讓る人もなく心細げなる御有様どもを、打捨ててむがいみじきこと。されども、さばかりの事に妨げられて、長き世の闇にさへ惑はむがやくなさ・。かつ見奉る程だに思ひ捨つる世・を、・・去りなむうしろの事知るべき事にはあらねど、わが身一つに・あらず、過ぎ給ひにし御面伏に、かるく〳〵しき心ども使ひ給ふな。おぼろげのよすがならで、人の言に打靡き、この山里をあくがれ給ふな。只かう人に違ひたる契り異なる身と思しなして、此處に世を盡してむと思ひ取り給へ。ひたぶるに思ひしなせば、事にもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女は、さる方に絶えこもりて、いちじるくいと

ともかくも　姫君達は自分達が末始終どうなる事だらうなどといふ事までは思案する餘裕もなく。

いかにしてか　父宮に先立たれては、どうして暫時も生きてゐられようぞ。

御あらましごとに　將來の心得を父宮から說き諭されて。

心のうちにこそ　八宮は心中にこそ姫君達の事も思ひ切つてゐられたであらうが、始終一つつの棟の下に起臥してゐて、今急に別れて山ごもりをなさるのは、宮がいが無情なお方だといふ譯ではなく、姫君達の心に怨めしく思召すのも當然であつた。

いと清げなり　六頁にも「かたちいと清げにおはします宮なり」とあつた。見ぎれいだ。

うしろやすく　私が不安のないやうに姫君達に仕へてくれ。

何事も　萬事につけ、もと〳〵身分が輕くて世間の噂にも上る筈のない人ならば、子孫の零落も普通の事で人目にはつかないだらう。

いと物はかなく　誠につまらぬ假初の宿りとして暮して來られた生活振りであるのに。

ほしげなるよそのもどきを負はざらむなむよかるべき」など宣ふ。ともかくも身のならむやうまでは思しも流されず、ただ、いかにしてか、おくれ奉りてば世に片時もながらふべき、と思すに、斯く心細きさまの御あらましごとに、いふ方なき御心惑ひどもになむ。心のうちにこそ思ひ捨て給ひつらめど、明暮御かたはらにならはい給ひて、俄に別れ給はむは、つらき心ならねど、げに怨めしかるべき御有様になむありける。明日入り給はむとての日は、例ならず此方彼方たたずみありき給ひて見給ふ。いと物はかなく假初の宿りにて過ぐい給ひける御すまひの有様を、亡からむのち、いかにしてかは若き人の絶えこもりて過ぐいい給はむ、と涙ぐみつつ念誦し給ふさま、いと清げなり。大人びたる人々召しいでて、宮「うしろやすく仕うまつれ。何事も、もとよりかやすく世に聞えあるまじき際の人は、末の衰へも常の事にて、紛れぬべかめり。斯かるきはになりぬれば、人

口惜しうて 運命ではあるが、遺憾な狀態に於てうろ〳〵してゐるのは、身分に對してすまない事見じめな事が多からう。

生れたる家の程 いくら零落しても、生れた家柄や家風の通りに振舞ふといふ事が、外聞からいつても、自分の氣持からいつても、無難に感じられる事だらう。

曉 夜あけ前の暗い時。

心ばかりは 心だけは朗かにして。

二所 お二人とも。

一人々々 一緒に死なれないで、二人のうち一人が居なくなつたら、どうして暮してゆかれよう。古今戀三「思ふどち一人一人が戀ひしなば誰によそへて藤衣きむ」の言葉を用ひたもの。

は何とも・思はざらめど、口惜しうてさすらへむ契り、かたじけなくいとほしき事なむ多かるべき。物淋しく心細き世を經るは、事だ例のことなり。生れたる家の程、おきてのままにもてなしたらむなむ、聞き耳にもわが心地にも、あやまちなくは覺ゆべき。富み榮え人並にならうと心懸けても賑はしく人かずめかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世場合に立至つたらとならば、ゆめ〳〵かろ〳〵しくよからぬ方にもてなし聞ゆな」姫君達をよくない方即ち利益について身分を顧みぬといふやうな取扱ひをしてはならないなど宣ふ。まだ曉に出で給ふとても、こなたに渡り給ひて、宮「私の留守中からむ程、心細くな思しわびそ。心ばかりはやりて遊音樂びなどはし給へ。何事も思ふに思ひ通りにならぬ生活について深案じなさるなえかなふまじき世をな思しい・れそ」など、後髮を引かれる氣持でかへりみがちにて出で給ひぬ。二所ふたところ八宮不在故いとど心細く物思ひつづけられて、起き臥し打語らひつつ、「一人々々なからましかば、今も行末も不定な世の事故いかでか・明かし暮さまし。今行末も定めなき世にて、もし別る生別死別でもあるならばるやうもあらば」など、泣きみ笑ひみ、たはぶれ事もまめ事も、生活に關した事同じ心に慰めかはして過ぐし給ふ。

三昧 念佛三昧。

とかくつくろふと いろ〳〵手當してゐる最中です。

さるは例よりも そんなわけで今日もえう歸らないのだが、でも、いつもよりも會ひたくて氣がもめるのに。

いかなるにかと 御容態は如何と。

そこはかとなく どことなく苦しいのです。

今念じて 我慢してすぐに歸りませう。

言葉にて 筆を執る事も出來ないので。

人は皆御宿世と 人といふものは皆それ〳〵の運命を持つてゐるもので運命のまゝにしかならないから、心配なさつたところで仕樣がない。從つて御心配あるべき性質のものでない。

大方の空の氣色も 秋深い折の事として、空一帶の樣子も一入物悲しげな時分。

八宮がかの行ひ給ふ三昧今日・果てぬらむと、早く御下山なさるやうにといつしかと待ち聞え給ふ夕暮に人參りて、八宮方から使「今朝より惱ましうてなむえ參らぬ。風邪かと思つて病氣で歸宅は出來ませぬとて、とかくつくろふと物する程になむ。さるは例よりも對面心もとなきを」と聞え給へり。姫君達はびつくりして胸つぶれて、いかなるにかと思し歎き、御ぞども、綿厚くて・急ぎ仕立てさせさせ給ひて奉れなどし給ふ。八宮の所へ姫君達から人奉り給へど、宮「ことに格別大した事ではおどろ〳〵しくはあらず。そこはかとなく苦しうなむ。すこしもよろしうなら・ば、今念じて・」など、言葉にて聞え給ふ。阿闍梨つとさぶらひて仕うまつりけり。阿闍梨「はかなき御惱みと見ゆれど、限りの度にもおはしますらむ。君姫君達だちの御事、何か思し歎くべき。人は皆御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはしまさず」と、いよ〳〵此世の執着を思し離るべきことを聞え知らせつつ、阿「今更に御下山遊な出で給ひそ」と諫め申すなりけり。八月二十日の程なりけり。大方の空の氣色もいとどしき頃、君

朝夕霧の晴るるまもなく 心の晴れる時なく。「霧の」は「晴るるまもなく」の枕詞。

そなたの 阿闍梨の寺に面する方の蔀戸をあげさせて。

いかにとは 御容態いかにと。

いとど斯かる事に かうした悲しさには涙も何處に行つたのか、泣くにも泣けず。「いとど」は「うつぶし臥し給へり」を修飾する。

いみじき事も 死別といつても死に目にあつて、心殘りのない別れをするのが世間の常なのに。

覺束なさ添ひて 姫君達は死に目にもあはずに別れた事として、心殘りの點も加はつて、お歎きなさるのも道理である。

暫しにても 父宮に先立たれては暫しでも生きてゐるべきものとは豫てから考へてゐられないのだから。

年頃契りおき 葬送や後の供養の事など八宮が豫て阿闍梨に依頼しておかれたのである。

だちは、朝夕霧の晴るるまもなく、思し歎きつつながめ給ふ。有明の月のいと花やかにさし出でて、宇治川の水のおもてもさやかに澄みたるを、そなたの蔀あげさせて見いだし給へるに、鐘の聲かすかに響きて、明けぬなりと聞ゆる程に人來て、「この夜中ばかりになむ亡せ給ひぬる」と泣く〳〵申す。心にかけて、いかに〔〕とは絶えず思ひ聞え給へれど、打聞き給ふには、あさましく物覺えぬ心地して、いとど、斯かる事に涙もいづちかいにけむ、只うつぶし臥し給へり。いみじき事も、見る目の前にて覺束なからぬこそ常の事なれ、覺束なさ添ひて、思し歎く事ことわりなり。暫しにても、おくれ奉りて世にあるべきものと思しならはぬ御心地どもにて、「いかでかは。おくれじ」と泣き沈み給へど、限りある道なりければ、何のかひなし。阿闍梨、年頃契りおき給ひけるままに、のちの御事もよろづに仕うまつる。姫君達「亡き人になり給へらむ御さまかたちをだに、今一度見奉

なでふさる事かは 御死骸に御目にかゝるといふやうな事はあるべきではない。

日頃も 二度と姫君達にはお逢ひなさるなと豫てから八宮に申し含めておいた事ですから。

おはしましける 御參籠中の父宮の御樣子をお聞きになるにつけても。

あまりさかしき聖心 あまり悟道に徹しすぎて人情味乏しい心。

かう見讓る人なき この通りあと君達を見捨てるに忍びない世話を託すべき人のない姫。

生ける限りは 御存命中は朝夕お側離さず一緒に居る事を誠に淋しい生活の慰めとも思つて、出家しかねて過ごして來られたのに。

大方世の有樣 一體に憂世の無常迅速といふ事が次々と念頭に浮んで。

又あひ見むこと 五六頁に「斯かる對面もこの度や限りならむ」などと仰せられた事。

朝夕の隔て知らぬ 朝あつても夕べは當にならない現世の無常を人一倍痛感してゐられるのだから。

らむ」と思し宣へど、阿「今更に、なでふさる事かは侍るべき。日頃も、又あひ見奉り給ふまじき事を聞え知らせつれば、今はまして、互に執心を殘さぬやうな御心の修養をなさらなければなりませぬかたみに御心とどめ給ふまじき御心づかひをならひ給ふべきなり」とのみ聞ゆ。おはしましける御有樣を聞き給ふにも、阿闍梨のあまりさかしき聖心を、憎くつらしとなむ思しける。八宮出家の希望入道の御本意は、昔より深くおはせしかど、かう見讓る人の・なき御事どもの見捨てがたきを、生ける限りは明暮えさらず見奉るを、強辭世に心細き世の慰めにも、思し離れがたくて過ぐい給へるを、死出の旅路限りある道には、先立ち給ふも慕ひ給ふ御心も、かなはぬわざなりけり。

中納言殿には八宮薨去の事を聞き給ひて、いとあへなく口惜しく、今一度心のどかにて聞ゆべかりける事多う殘りたる心地して、大方世の有樣思ひつづけられて、いみじう泣い給ふ。宮が御生前にくや」など宣ひしを、なほ常の御心にも、朝夕の隔て知らぬ世

耳馴れて　八宮の「又相見むと雖くやーなどいふお詞も耳馴れて別に氣にもとめず。

昨日今日とは　伊勢物語・古今哀傷「終にゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」

物覺えぬ　正氣を失つてゐる姫君達の御心にも、年來の薫の御親切の程が今更身にしみて感ぜられる。

世の常の程の　尋常一樣の死別でも。

慰む方なげなる　身寄りのない孤兒となられたのだから。

とぶらひ給ふ　布施などを送つて八宮の追善供養を依頼されるのである。

此處にも　山莊の方へも、老女達に贈る風にして、僧への布施などの事も、不自由を察して贈り屆けられた。

明けぬ夜の　常闇にゐる氣持の中に。

ともすれば　「一つ物のやうに惑ひて」

かうては　にかかる。とんな有樣では、姫君達の定命も、一寸の間も續くまいと。

のはかなさを、人よりけに思ひ給へりしかば、耳馴れて、昨日今日と・思はざりけるを、返す〳〵飽かず悲しくおぼさる。阿闍梨のもとにも、君だちの御とぶらひも、こまやかに聞え給ふ。斯かる御とぶらひなど、又おとづれ聞ゆる人だになき御有樣なれば、物覺えぬ御心地どもにも、年頃の御心ばへのあはれなめりしなどをも、思ひ知り給ふ。世の常の程の・別れだに、さし當りては、又たぐひなきやうにのみ皆人の思ひ惑ふものなめるを、慰む方なげなる御身どもにて、いかやうなる心地どもし給ふらむ、と思しやりつつ、のちの御わざなど、あるべき事ども推し重りて、阿闍梨にもとぶらひ給ふ。此處にも老人どもにことよせて、御誦經などの事も、思ひやり聞え給ふ。

明けぬ夜の心地ながら九月にもなりぬ。野山の氣色、まして袖の時雨を催しがちに、ともすれば、爭ひ落つる木の葉の音も、水の響きも、涙の瀧も、一つ物のやうにくれ惑ひて、かうては

いみじく　「思ひ惑ふ」を修飾する。

此處にも　山寺でも追善供養が行はれた上に姫君達の方にも念佛の僧が來て。

佛を形見に　佛像を八宮の形見と拜して。

御忌　服忌令によれば父母の忌は五十日。

さやうの御返り　姫君達はさうした弔問の御文に對しても返事などする氣になれないで。

我をばなほ　自分に返事のない所から見ると、矢張自分を度外視して出で立ち給ひしを。宇治へ行かれる積りであつたが。

斯くこのわたりの　宇治の遊覽も都合のわるい時なので。

御忌も果てぬ　河内本によるべきである。

限りあれば　物には程のある事故。

を鹿なく　かうした物悲しい夕暮時、鹿の鳴く宇治の山里はどうであらう。姫君達は嘸かし涙がちに暮してゐられる事であらう。「小萩が露の」は「かゝる」の枕詞。

いかでか、限りあらむ御命も、暫しめぐらひ給はむと、侍女達はさぶらふ人々は心細く、いみじく慰め聞えつつ思ひ惑ふ。此處にも念佛の僧さぶらひて、八宮のお居間おはしましし方は、佛を形見に見奉りつつ、時々參り仕うまつりし人々の御忌にこもりたる限りは、皆の人は專心に念佛あはれに行ひて過ぐす。

兵部卿の宮よりも、度々とぶらひ聞え給ふ。弔問されるさやうの御返りなど・、聞えむ心地もし給はず、返事がないのでおぼつかなければ、中納言には薫には返事をされるのかうもあらざなるを、我をばなほ思ひ放ち給へるなめり、と怨めしく思す。紅葉のさかりに、詩など作らせ給はむとて出で立ち給ひしを、斯くこのわたりの御逍遙びんなき頃なれば、八宮薨去故都合のわるい時おぼしとまりて口惜しくなむ。御忌も果てぬ・・。限りあれば、姫君達のもひまもやと思しやりて、いと多く書き續け給へり。時雨がち

なる夕つかた、

「を鹿なく秋の山里いかならむ小萩が露のかかる夕暮

分きて眺めらるる　世の無常が思ひ知られるので。

げにいとあまり　匂宮が「思し知らぬがほならむも」など言はれた詞を受けて「げに」といふ。

心憂くも　父上の後を逐ふ事も出來ないでこんなに日數が立つたかと思ふとなさけない。

やう〳〵かう起きゐられ　悲しみも多少薄らいで。

げに限りありける　「限りあれば涙もひまもや云々」とあるを受けていふ。

いと心苦し　中君のさまを見ての大君の心。

御使　匂宮からの使者。

いかでか　もう夜更け故とても歸京は出來ませぬ。

われさかしう思ひしづめ　自分一人だけが分別顔に心を靜めていらつしやる譯ではないが。

この哀な空模樣がお分りにならないやうな風をなさるのも只今の空の氣色を思し知らぬがほならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野べも分きて眺めらるる頃になむ」などあり。大君「げにいとあまり思ひ知らぬやうにて度々になりぬるを、なほ聞え給へ」など中の君を例のそそのかして、書かせ奉り給ふ。中君心今日までながらへて、硯など近く引寄せて見るべきものとやは思ひし、心憂くも過ぎにける日數かな、と思すに、涙に又かき曇り物見えぬ心地し給へば、硯をおしやりて、中君「なほえこそ書き侍るまじけれ。日數が立つにつれてだん〳〵やう〳〵かう起きゐられなどし侍るが、げに限りありけるにこそと覺ゆるも、うとましう心憂くて」と、歎きにも限りのある事と思ひ給へるさまに泣きしをれておはするも、いと心苦し。夕暮の程より來け京を出發したる御使、宵すこし過ぎてぞ來たる。姫君達「いかでかこそ參りなめ」と急げば、此處にとまつて直樣引返しませういとほしうて、われさかしう思ひしづめ給ふにはあらねど、大君は氣の毒がつて見煩ひ給ひて、返事のおくれるのを見かねて

涙のみ　悲しみにとざされてゐるこの山里は籬に鹿が私共姉妹と聲を合せて泣いて居ります。

黒き紙に　忌服者の料紙故。

夜の墨つぎも　暗い時でどうせ墨繼もよく分らないのだから、別に上手に書かうと氣張りもせず。

雨もよ　夜雨。

笹の隈　古今神遊歌「笹の隈檜の隈川に駒とめて暫し水かへ影をだに見む」この歌の語を借りて書いたもの。

お前に召しても　御前に召して下されるのは功勞に報いる特別の待遇である。いたく濡れて參りたれば、お前に召しても一云と置きかへて見るべき處である。

さき〳〵御覽ぜしには　今迄の大君の筆であるから。

待つとて　今迄は皆中君が書いたのに、これは返事を待つといつて今起きてゐられ、今又御覽になる時間の長いのは、どれ程お氣に召す事なのだらう。

朝霧に　父宮に先立たれて悲歎にくれてゐられるあなた方に、私は一通りならず同情して居ります。後撰秋下「聲立てて鳴きぞしぬべき秋霧に友惑はせる鹿にはあらねど」

涙のみきりふたがれる山里はまがきに鹿ぞ諸聲になく大君

鈍色の黒き紙に、夜の墨つぎもたど〳〵しければ、引きつくろふ所もなく、筆にまかせて、無造作に包んでおし包みていだし給ひつ。御使は、木幡こはたじきを・えり出で給ひけむ、薄氣味わるさうな笹のかげをむつかしげなる笹の隈を、駒引きとどむる程もなく打早めて、片時に參りつきぬ。京に參りつきぬ。お前に召して侍女達も、いたく濡れて參りたれば祿賜ふ。さき〳〵御覽ぜしにはあらぬ手の、いますこし大人びまさりて、風致のある書きぶり故よしづきたる書きざまなどを、何れか何れならむと、どれが誰の手か手紙をうちもおか・ず御覽じつつ、とみにも大殿籠らねば、女房「待つとて起きおはしまし、又御覽ずる程の久しきは、いかばかり御心にしむ事ならむ」と、お前なる人々ささめき聞えて、憎み聞ゆ。ねぶたければなめり。まだ朝霧深きあしたに、急ぎ起きて奉り給ふ。又宇治に文を

匂宮「朝霧に友まどはせる鹿のねを大方にやはあはれとも聞く友を見失つた

諸聲は あなたは「諸聲になく」と仰しやるが、私もそれに劣らず泣いて居ります。

思はずなる 思ひがけない間違などが少しでもあつては。男との關係をいふ。

うしろめたげにのみ 亡き父宮はその事ばかりを心配してゐられたやうだが、その父宮の靈にまでも疵をつける事にならうかと。

なべて 獨り匂宮のみならず一體に男といふものに氣おくれして怖ろしくて。

聞え給はず 匂宮に御返事をあげない。

なげの走り書い給へる 匂宮が假初に走りがきされた筆蹟も文句も、おもしろくもありあでやかにもある御文のさまを。

その故々しく その奥ゆきもあり風情もあるお言葉に御相手申上げるのも喪に服してゐる自分としては似つかはしからぬ故。

何か なあに、何とおもはれてもかまはないの意。

諸聲は劣るまじくこそ」とあれど、あまりなさけだたむもうるさし、一所の御蔭に隱ろへたるを頼みどころにてこそ何事も心やすくて過ぐしつれ、心よりほかにながらへて、思はずなる事の紛れつゆにてもあらば、うしろめたげにのみ思しおくめりし亡き御たまにさへ疵やつけ奉らむと、なべて・・いとつつましう怖ろしうて、聞え給はず。この宮などをば、かろらかにおしなべてのさまにも思ひ聞え給はず、なげの走り書い給へる御・筆づかひ言の葉も、をかしきさまになまめき給へる御けはひを、あまたは見知り給はねど、これこそはめでたきなめれと見給ひながら、その故々しくなさけある方に言をまぜ聞えむもつきなき身の有様どもなれば、何か、ただ斯かる山伏だちて過ぐしてむと思す。

薫への御返事だけは中納言殿の御返り・ばかりは、かれよりもまめやかなるさまに聞え給へば、これよりもいとけうとげにはあらず聞え通ひ給ふ。

今迄は父宮お一人の庇護の下にあるのを力にして安心して暮して來たのだ　大君心　風流らしく浪事するのもうるさい　本意ならずも生きてゐて　大君は匂宮などをは並々の人と一樣に輕蔑してもゐられないで　男の文といふものを　匂宮の文こそ　姫君達は　匂宮の　姫君達の　先方からも眞面目な態度で音信されるので　こちらからも疎々しからず

御忌果てても 五十日の忌があいてから薫自身宇治に參られた。「御忌果てて」とある河内本に從ふべきである。

くだりたる方 一段低くなつてゐる處。禮記十三喪大禮「父母喪居ニ倚廬ニ不レ塗寢レ占枕レ凶」姫君達の服喪のさまである。

傍痛うて 姫君達は自分達の服裝が喪に服してゐる爲貧しいのできまりわるくて。

かやうにはもてない こんな不あらひはなさらずに、亡き父宮の御仕向けのやうに親しくして下さつたなら、お話しあふにも、お話しあひがひのあるといふものです。

なよび氣色ばみたる 私はまだ經驗がない色めかしい振舞などの、取次を以てのお話は言葉がつづきません。

思ひさまさむ 諦められない悲しみにどうしていゝものやらわけが分りません。

心よりほかに 今まで生きてゐようとは思ひませぬでしたのに意外にもながらへてゐますものの月日の光を見るのも氣がひけて端近に出る事も出來ません。

事といへば 何かといふと、底知れない遠慮深さがあなたの常です。

月日の影は 「空の光」と仰しやいますが、それは自分から進んで晴れ〳〵しくなさるのならば非難もありませうが、お客の應對の爲に、端近に出られたところで何の子細がありませう。

御忌果てても、みづからまうで給へり。ひんがしの廂のくだりたる方にやつれておはするに、薫が近う立寄り給ひて、古人召し出でたり。悲嘆にくれてゐられる姫君達の闇に惑ひ給へる御あたりに、薫がいとまばゆく匂ひ滿ちて入りおはしたれば、傍痛うて、御對面は勿論御いらへなどをだにえし給はねば、薫「かやうにはもてない給はで、昔の御心むけに從ひ聞え給はむさまならむこそ、聞え承るかひあるべけれ。なよび氣色ばみたる振舞をならひ侍らねば、人づてに聞え侍るは、言の葉も續き侍らず」とあれば、大君「あさましう今までながらへ侍るやうなれど、思ひさまさむ方なき夢にまどはれ侍りてなむ、心よりほかに空の光見侍らむもつつましうて、端近うもえみじろき侍らぬ」と聞え給へれば、薫「事といへば、限りなき御心の深さにこそ罪も侍らめ。月日の影は、御心もて晴れ〳〵しくもていでさせ給はばなむ。ゆく方もなくいぶせう覺え侍り。又思さるら端々をも、あきらめ聞えまほしくなむ」と申し給へば、女房「げ

姫君達が衣裳もやつれて　薫が　辨の君を　姫君達の　御對面は勿論　氣を紛らしてあげたい　御意中の一端なりとも　氣づまりで仕方がありませぬ　姫君達は生涯人間味はすてて通さう　姫君達は

たぐひなげなめる 類例もない程悲しんでゐられる姫君達を慰めて下さる薫の御親切の一通りでない事。

人々聞え知らす 女房達が姫君達に。

さこそいへ 疎々しい扱ひはしながらも、次第に心も落着いて、薫の親切が身にしみてゐるので。

昔ざまにても 自分達への同情ではなく、父宮との舊誼からするにしても。

思ひ知り給ふべし 「お分りになつたと見えて少しゐざりよられた」とつゞく句法である。

うたて雄々しき 薫はいやに氣強い樣子などのおありにならぬ人柄故。

けうとく 應對するのも氣味わるくて、じつとしてゐられないといふやうなことはないが。

さすがに 「けうとくすずろはしくなどはらねど」を受ける。

よろづ思ひほれ 悲歎の爲に萬事氣ぬけしたやうになつてゐられる樣であるから。

黑き几帳の 鈍色の几帳の帷子から透いて見える姫君達のお姿が。

色變る 寒さの爲に紅葉してゐる淺茅を見ても、あなた方の喪服の袖もそのやうに血の涙に紅く染まつてゐることだらうと同情に堪へませぬ。

にこそいと類なげなめる御有樣を、慰め聞え給ふ御心ばへの淺からぬ程」などと、人々聞え知らす。御心地にも、さこそいへ、やう〳〵心しづまりて、よろづ思ひ知られ給へば、昔ざまにても、かうまで遙けき野べを分け入り給へる志なども、思ひ知り給ふべし。すこしゐざり寄り給へり。思すらむさま、又宣ひ契りし事など、いとこまやかになつかしう言ひて、うたて雄雄しきけはひなどは見え給はぬ人なれば、けうとくすずろはしくなどはあらねど、知らぬ人に斯く聲を聞かせ奉り、すずろに頼みがほなる事などもありつる日頃を思ひつづくるも、さすがに苦しうてつつましけれど、ほのかに一言などいらへ聞え給ふさまの、げによろづ思ひほれ給へるけはひなれば、いとあはれと聞き奉り給ふ。黑き几帳の透影の、いと心苦しげなるに、まして、おはすらむさま、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、色變る淺茅を見ても墨染にやつるる袖を思ひこそやれ

色變る袖をば 涙は喪服の袖といふ宿り場所を持つて居りますが、私共は全く身のおき所がありませぬ。

はつるる糸は 古今哀傷・拾遺哀傷・六帖四「藤衣はつる〻糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける」

こよなき御かはり 大君と辨とでは雲泥の相違故斯くいふ。

ありがたくあさましき事 世にも稀な驚くべき事實。

故院 六條院卽ち源氏。

人となりゆく 齡をかさね次第に成人するにつれて、世を厭ふ心も深くなる。

心にかなひ給へりし 當時身分あるものが下司に對して話す時に已の爲に敬語をつけたもので、さうした用例が、この外に帚木夕顏若菜柏木橋姫等に見えてゐる。八宮の事ならば「御心にかなひ」といはなければなるまい。

斯くはかなく 八宮が蹇去されたので、愈深く世の無常を觀ずる心も刺戟されましたが。

心苦しうて お氣の毒な孤兒として生き殘つてゐられる姫君達を、私の足手纏ひなどと申しては、あなた方の爲に出家もえうしないでゐるといふやうに聞えますが。

と獨りごとのやうに宣へば

「色變る袖をば露の宿りにてわが身ぞ更におき所なき

はつるる糸は」と末は言ひ消ちて、いといみじく忍びがたきけはひにて入り給ひぬなり。引きとどめなどすべき程にもあらねば、飽かずあはれに覺ゆ。老人ぞ、こよなき御かはりに出で來て、昔今をかき集め、悲しき御物語ども聞ゆる。ありがたくあさましき事どもを見たる人なりければ、かう怪しう衰へたる人ともおぼし捨てられず、いとなつかしう語らひ給ふ。「いはけなかりし程に、故院におくれ奉りて、いみじう悲しきものは世なりけりと思ひ知りにしかば、人となりゆく齡に添へて、つかさ位、世の中の匂ひも、何とも覺えずなむ。只かう靜やかなる御すまひなどの、心にかなひ給へりしを、斯くはかなく見なし奉り・つるに、いよ〳〵いみじく假初の世・思ひ知らるる心も催されにたれど、心苦しうてとまり給へる御事ども・、ほ

さるは覺えなき　だが、思ひもよらぬ昔話を聞いてから、一人憂世に執心はなくなつてしまひました。

御古物語　柏木の事。

御けはひなどの　薫の御樣子などが、まるで柏木かと思はれ程似てゐられるにつけても、今迄忘れて居つた柏木の御事までも八宮の悲しみに取り重ねて思ひ出して。

この人は　辨は。

大臣＝北方＝左中辨
八宮＝北方＝中君＝大君
柏木乳母＝辨君

遠き國にあくがれ　二六頁。

人もやんごとなからず　辨は人柄もさう上品ではなく奉公ずれもしてゐるが、物の分らぬ女でもないと八宮も見拔かれて。

だしなど聞えむはかけ〳〵しきやうなれど、（在俗の口實にするやうだが）ながらへても、（とにかく生きて居つても）かの御ことあやまたず、（故宮の御遺言通りにお世話申したく思ひます）聞え承らまほしきになむ。（ひま）さるは覺えなき御古物語聞きしより、いとど世の中に跡とめむとも覺えずなりにたりや」と、打泣きつつ宣へば、（ふる）この人は（辨）ましていみじく泣きて、えも聞えやらず。御けはひなどの、ただそれかと覺え給ふに、年頃打忘れたりつる古への御事をさへ取りかさねて、聞えやらむかたもなく、（涙に）おぼほれゐたり。この人は、（故宮）かの大納言の御乳母子にて、（柏木）父はこの姫君達の母北の方の母方の叔父、左中辨にて亡せにけるが子なりけり。年頃遠き國に（筑紫に）あくがれ、（放浪して）姫君達の母君も亡せ給ひてのち、（柏木父致仕大臣）かの殿には疎くなり、この宮には（八宮が辨を）尋ね取りてあらせ給ふなりけり。人もいとやんごとなからず、（奉公ずれ）宮仕へ馴れにたれど、（はしてゐるがわけのわかつた女と）心地なからぬものに宮も思して、姫君達の御後見だつ人になし給へるなりけり。（姫君達）昔の御事は、（柏木の一件は）年頃斯く朝夕に見奉り馴れ、心隔つる隈なく思ひ聞ゆる君だちにも、一言打

古人おしなべてあは〳〵しう　辨は輕々しく世間にいひふらさないにしても。（ふるびと）

ねたくもいとほしくも　ねたましくもあり又柏木に氣の毒にも感ずるので。

又もて離れてはやまじ　この一件を祕密にしておく爲には姫君達をぜひ我物にせずにはおかぬと思ひつく動機にもなりさうである。

これや限りの　五、六頁六行。

などかさしもやは　そんな事があるものかと、先を當にして、なぜ自分は二度とお目にかからずじまひになつた事だらう。

秋やは變れる　同年同秋だ。今も八宮薨去のその秋だ。

殊に例の人めいたる　格別世間一般の人のやうな裝飾もせず、ごく簡素にしてゐられるやうであつたが。

大德たち此方彼方　以下今の山莊の樣。部屋の内をそれ〴〵仕切つて。

かかるさまの　かうした姿の人達などまでも來なくなつた時分此處に居殘つて物思をしてゐられる姫君達の心中を推察するにつけても。

出で聞ゆるついでなく、忍びこめたりけれど、（胸一つに秘しておいたのだが）中納言の君は、（薫）古人の問はずがたり、皆例のことなれば、おしなべてあは〳〵しうなどは言ひひろげずとも、いと恥かしげなめる御心どもには（氣のおける）は、聞きおき給へらむかし、と推し量らるるに、（姫君達の）ねたくもいとほしくも覺ゆるにぞ、又もて離れてはやまじ、（二度と別れないやうに）と思ひ寄らるるつまにもなりぬべき。（八宮亡き今は宇治に泊るのもおちつかないやうで）今は旅寢もすずろなる心地して、歸り給ふにも、これや限りの、など宣ひしを、（八宮が）などか、さしもやはと、うちたのみて、（ゆ）又見奉らずなりにけむ、秋やは變れる、あまたさう長い日かずも立たないうちに宮の行方も分らなくなつた）の日數も隔てぬ程に、おはしにけむ方も知らず、あへなきわざ（あつけない事だ）なりや。殊に例の人めいたる（以下八宮生前の山莊のさま）御しつらひなく、いと事そぎ給ふめりしかど、（邸内を）いと物清げにかき拂ひ、（邸の内外をおもしろくしておかれたこの山莊も）あたりをかしくもてない給へりし御すまひも、大德たち出で入り、此方彼方引き隔てつつ、御念誦の具どもなどぞ變らぬさまなれど、（八宮の御生前と）佛は皆かの寺に（阿闍梨の山寺に）移し奉りてむとすと聞ゆるを、聞き給ふにも、（薫が）かかるさまの人（大德達の事）

秋霧の　秋霧が薄陶しく立つてゐる大空で雁がかり〳〵と鳴きながら飛んで行くが、あれはこの世は假の世だと一層知らせようとしてゐるのだらう。

女方は世にいといたう　姫君達は。

句宮は大變な好色者だと評判が世間廣く通つてゐて、かうした文判が流なつてゐる風流がおけいでなかなかお心持でなさつてゐることと思はれるにつけても、私共のやうな世間知らずの日蔭者からさしあげる御舊式に返事も、どんなに物馴れず氣を遣はれるこの事だらう、などと思はれた。

くさらえしてゐられた。

さてもあさましうてもあつけなく立つて行くのは月日だつた。

それにしても、昨日今日とは伊勢物語「終に昨日今日とはゆく道とは思はざりしかど」

おくれ先だつ　日ごとに聞きしかど、生き殘る悲しさなどは考へても見なかつたのだ。新古今哀傷の中の「先立つ世の露本の雫や世の中を思ひ遍昭の詞によつて書たのだ。

めしてあるる。　「一人が死んで次の人が死んだ。或一月目のお末の露本の人がいつまでもあるまい」

ぬ。　月日の經つのは早いものだ。

自分達の意。　即ち父宮が亡くなられたらもう直に死ぬものと思つてゐた分達の意。

影などさへ絶え果てむ程、とまりて思ひ給はむ心地どもを汲みきこえ給ふも、いと胸痛うおぼし續けらる。供人「いたく暮れ侍りぬ」薫は

と申せば、薫が眺めさして立ち給ふに、雁鳴きて渡る。

秋霧の晴れぬ雲居にいとどしく此世をかりと言ひ知らすらむ

句宮に薫が兵部卿の宮に對面し給ふ時は、まづ宇治の姫君達の事を話題にひぐさにし給ふ。八宮亡き今はいかに何でもいひよるにも氣樂なものだ今はさりとも心やすきを、と思して、句宮は懇に聞え給ひけり。何でもないはかなき御返りも、聞えにくくつつましき氣のおける方物に女方はおぼいたり。以下姫君達の心世にいといたうすき給へる御名の廣ごりて、好ましく艶におぼさるべかめるも、かういと埋もれたる葎のしたよりさし出でたらむ手つきも、いかにうひ〳〵しく古めきたらむ、などと思ひくつし給へり。姫君達「さてもあさましうて明け暮さるるは月日なりけり。かく頼みがたかりける御世を、父宮の御壽命であつたのに昨日今日とは思はで、世の中は無常なものだと一般世間の出來事としてばかり始終父宮から聞いたり又直接見たりして居つたので只大方定めなきはかなさばかりを明暮のことに聞き見しかば、我も人もおくれ先立つ程しもやは經む、など

風のおとも　二人だけになつて見ると急に風のおとも耳だつの意。

例見ぬ人影も　今まで見た事のない人が連れ立つて案内を乞ふので。

年も暮れ　年末になつた。

今初めて思ひ入り　淋しいから。

心細く悲しき　心細さ悲しさの立ち直る春が來てほしい。

ありがたき事かな　それはとてもむつかしい事だと。ここを「心を消たずいふもあり。難き事かなと聞き給ふ」と句切つて讀む説もあるが取らない。

人も參り通ひしかと　阿闍梨の寺と八宮方との間に人々の往來もあつた。

いとど　父宮薨去後は一層。

打思ひけるよ。八宮御在世の時をきし方を思ひ續くるも、何の頼もしげなる世にもあらざりけれど、希望ある世でもなかつたが死別の時をいつとも知らず只いつとなくのどかに眺め過ぐし、物怖ろしくつつましき事もなくて經つるものを、今では風のおとも荒らかに、例見ぬ人影も打ちつれこわづくれば、まづ胸つぶれて、物怖ろしくわびしう覺ゆることさへ添ひにたるがいみじう堪へがたき淋しさの上に怖ろしさまで「二姉妹所うち語らひつつ、涙をほす世もなくて過ぐし給ふに、年も暮れにけり。

雪霰降りしく頃は、何處も斯くこそはある風の音なれど、今初めて思ひ入りたらむ山住みの心地し給ふ。女ばらなど、「あはれ年は變りなむとす。心細く悲しき事を改まるべき春待ち出でてしがな」と心を消たずいふも、氣を落さずにいふけれども ありがたき事かなと聞き給ふ。姫君達は阿闍梨の寺向ひの山にも、時々の御念佛にこもり給ひし故こそ人も參り通ひしか。阿闍梨も、「いかが」と大方に稀に音づれ聞ゆれど、今御機嫌如何稀には一通りの見舞狀もあげるが八宮が は何しにかはほのめき參らむ。姫君達の方に顏出しはしないいとど人目の絶え果つるも、さ常然

何とも見ざりし 今迄は氣にもとめなかつた山賤も。

年頃に 毎年差上げるのが例になつて居つた物を、八宮が亡くなられたからといつてやめるのが心細くて。

必ず 下の「遣しし」に係る。

やり給ふ 姫君達から阿闍梨に。

登りゆく 阿闍梨の寺に。

御髪など 父宮がたとひ出家なさつても生きて居つてさへ下さつたら。

いかにあはれに 出家すれば家には歸られないから心細いのである。

君なくて 父宮が亡くなられて山寺への往復も絶えた今、あの緣の無くなつた松の雪をあなたは何と御覽になりますか。

るべき事と思ひながら、いと悲しくなむ。(八宮薨後の今の事とは) 姫君達が何とも見ざりし山賤も、おはしまさでのち、たまさかに山莊にさしのぞき參るは、姫君達の心に珍らしくお・ぼえ給ふ。(今がその時節だとて) 此頃のこととて、薪木の實拾ひて參る山人どもあり。阿闍梨の庵室むろより、炭などやうの物奉るとて、阿「年頃にならひ侍りにける宮仕の、今はとて絶え侍らむが心細きにな(イニナシ)む」と聞(使を以て)えたり。必ず、冬ごもる山風防ぎつべき綿絹など遣はし(阿闍梨に)しを、思し出でてやり給ふ。(使に來た人々である) 法師ばら童べなどの登りゆく・(道)も、見えみ見えずみ、いと雪深きを、姫君達が泣く〳〵、立出でて見送り給ふ。(姫君達)「御髪(みぐし)などおろい給うても・(け)、(出家の姿で)さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ參る人も、おのづから繁からまし。いかにあはれに心細くとも、(如何に御歸宅はないからとても)あひ見奉る事絶えてやまましやは」

(大君)君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をも何とかは見る

中の君、(宮)

奥山の 奥山の松葉に積る雪は消えても又降り積むものですが、父宮をせめてその雪と同じに考へる事が出來たらどんなにいい事でせう。父宮の又と歸り給はぬを歎いたのである。雪は又も降り添ふのに、父宮は二度と歸り給はぬ。羨しい事だ。記者の詞。

羨しくぞ

よろしき人だに 一通りの身分の人でさへ訪ねては來なくなつたのに、薫が重い身であり乍らその親切が淺いものとは來られたそのねて來ないと痛感されたので。

例よりは見入れて いつもよりは薫を丁寧に取扱つて。今姫君達の用ひて墨染ならぬ調度類は皆墨染である。

思ひぐまなきやうに 折角訪ねて來られたのに、對面しないのは餘りに過ぎる仕打と薫が思はれるので、仕方がない。

いとめやすく 大君の態度は氣持がよくて、こちらが氣恥かしく思ふ程である。

かやうにてのみは こんな淺い關係だけでは通しきれさうもないといふ氣になられるにつけても。

いとうちつけなる 心といふものは實に現金なものだ。薫は無妻主義の人であつたのに急に氣の變は移り氣なものだ、矢張人つたことをいふ。

奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば

羨ましくぞ又も降り添ふや。

中納言の君は、新しき年はふとしもえとぶらひ聞えざらむと思(禁中に公事が繁くて思ひつきの訪問も出來まい)して(年内に宇治に)おはしたり。雪もいと所せきに(路一ぱいに積つてゐるので)、よろしき人だに見えずなりにたるを、なのめならぬけはひして、かろらかに物し給へる心ばへの、淺うはあらず思ひ知られ給へれば、(姫君達に)例よりは見入れて、(念を入れて)おましなど引繕はせ給ふ。墨染ならぬ御火桶、物の奥なる(御座所)取出でて、塵掻拂ひなどするにつけても、(八宮が薫の來訪を)宮の待ち喜び給ひし御氣色などを、(女房達)人々も聞え出づ。たいめし給ふことをば、(大君が薫に)つつましくのみおぼいたれど、思ひぐまなきやうに人の思ひ給へれば、いかがはせむとて聞え給ふ。(大君が薫に)打解くとはなけれど、(氣をゆるすといふのではないが)さきざきよりはすこし言の葉續けて、物など宣へるさま、(大君の)いとめやすく心恥かしげなり。かやうにてのみは(手に入れずにはやまない)え過ぐし果つまじと思ひなり給ふも、いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なり

あはれなりし　私が八宮の切なる御遺言を承つておいた事などを、何かの機會にでも私から宮に漏らした事でもあるのでせうか、それとも、宮が例の抜目のない御性質から當て推量なさるのでせうか。

ここになむ　匂宮の詞を薫がまねるのである。

思ひ給へれど　河内本に從ふべきである。

里のしるべ　宇治へ手引すべき立場にある私故、強く斷る譯にはゆきませんが。古今戀四「蜑の住む里のしるべにあらねども うらみむとのみ人のいふらむ」

何かはいとさしも　あなたはなぜそのやうなつれないお仕打をなさるのですか。

なほざりごとなど　宮が冗談などをいひかけなさる女で、無考へで靡き易いのなどを、宮は興味の持てないものとして輕蔑されるのではないからうかと宮の氣語からの察せられる事もあります。

何事にも　萬事成行にまかせて我を張る事もなく、大やうな女こそ一圖に世間の仕向けになつて、どんな事でも大目に見あつてもらうのがし、多少氣に入らぬ事があつても、仕方がないと諦めてもこれも運命だ、といふやうに、さういふ女が却つてねようから、長く添ひとげる例になる事もあります。

けり、と思ひ居給へり。薫「宮のいとあやしく恨み給ふことの侍るかな。あはれなりし御一言を承りおきしさまなど、事のついでにもや漏らし聞えたりけむ、又いと隈なき御心のさがにて、推し量り給ふにや侍らむ、『ここになむともかくも聞えさせなすべきと頼むを、つれなき御氣色なるは、もてそこなひ聞ゆるぞ』と、度々ゑんじ給へば、心より外なる事と思ひ給へれど、里のしるべいとこよなうもえあらがひ聞えぬを、何かは、いとさしもてなし聞え給ふらむ。すい給へるやうに人は聞えなすべかめれど、心の底あやしう深うおはする宮なり。なほざりごとなど宣ふわたりの、心がろうて靡きやすなるなどを、珍らしからぬものに思ひおとし給ふにやとなむ聞く事も侍り。何事にも、あるに從ひて心を立つる方もなく、おどけたる人こそ、只世のもてなしに從ひて、とあるもかかるもなのめに見なし、すこし心にたがふ節あるにも、いかがはせむ、さるべきぞ、なども

くづれそめては　拾遺物名「神南備の三室の岸やくづるらむ龍田の川の水の濁れる」の詞を用ひたもの。「龍田の川の濁る」は枕詞に用ひられたもので、そのやうに名をけがすとつゞくのである。

心の深くしみ　物事に深い執着を持つた別違る匂宮の御性質に應じて、格背する所が多くなつたやうな方をば、匂宮はいつたやうに決して輕率に終始一貫せぬやうにはお打なさりさうにはお見なりませぬ。

人の見奉り知らぬ　私は匂宮の事に就ては他人の知らぬ事まで承知して居りますが、もし匂宮を似つかはしい方と思つて夫にでもといふ御希望があるなら、そのお取持などは精々忠勤を勵みませう。もしさうなつたら、宇治と京との間を奔走して、定めし脚の痛い目をする事でせう。

わが御みづからの　薫の詞は大君自身の事とは氣もつかず、親らしい態度で中君の爲に返答しようと思案されるけれども。あれらにかからみ、こちらにからんで仰しやるこの、やゝこしくて却つて何と申上げてよいやら。

かけ〳〵しげに　今のお話は必ずしもあなた御自身が責任をお持ち下さるべき話とも思つては居りませぬ。中の君の事をいつてゐるのです。

必ず御みづから　匂宮が私を不思議にも冷淡なのはあなたが二人の間をこはすのです

思ひなすべかめれば、なか〳〵心長きためしになるやうもあり。一度いきさつが出來ると不名譽な事が次々と起りくづれそめては、龍田の川の濁る名をもけがし、すつかり跡形なく縁の切れてしまふ事なども往々あるやうです名殘なきやうなる事なども、皆うちまじるめれ。心の深くしみ給ふべかめる匂宮の御心ざまにかなひ、殊に背くこと多くなど物し給はざらむをば、匂宮は更にかろ〳〵しく、初め終りたがふやうなる事など、見せ給ふまじき氣色になむ。人の見奉り知らぬ事を、いとよう見聞えたるを、もし似つかはしく・・、さもやと思し寄らば、そのもてなしなどは、心の限り盡して仕うまつりてむかし。御中道の程、亂り脚こそ痛からめ」と、いとまめやかにて言ひ續け給へば、大君はわが御みづからの事とは思しもかけず、人の親めきていらへむかし、と思しめぐらし給へど、なほいふべき言の葉もなき心地して、大君「何と仰しやるのでございませうかいかにとかは。かけ〳〵しげに宣ひ續くるに、なか〳〵聞えむこと・・・も覺え侍らで」と、大君のさま打笑ひ給へるも、おいらかなるものから、その物のいひぶりがおもしろく聞かれるけはひをかしう聞ゆ。薫「必ず御

いざや。「分き聞えがたき」を修飾する。**それも人の分き聞え**姉妹の中の何れを目ざしてのお文かは他人の分りかねる事です。**何となけれど**何とはなしに自分が返事をあげたとすれば、格別何といふ事はないが、それでも薫かに恥かしう仰しやいられたへと、どんなに胸私にはこたへた事だらう。**雪深き**雪深き山の道を踏みわけて訪ねて來たあなたの方は雪を踏みわけて訪ねて來たあなたに以外には文意を通ふ事はごいませぬの意を桟道を踏み通ふ句宮を託した歌。**つらら閉ぢ**「つらら」で、私が先にあなたに逢ふものです。の意。「つらら」は氷のことの。**影さへ見ゆる**萬葉十六「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわがおもはなくに」玉の小櫛「しるしはしるべを寫誤れるなるべし。しるにては開え難し。さて影さへ見ゆるとは山の井の意、常には淺きは山の淺香山の歌の下句のことにて、淺かぬ意にいへり。意にては、淺かぬ意にいへり。さて、淺かぬ意にいへり。淺かぬ意にいへり。淺から影さへ見ゆるしるべとは、淺かずも思ひ給ふ句の爲にし給ふ薫のしるべも。淺うは侍らじとはこれもかの歌の詞にいへるにて、我も淺からず心の限盡しるべをし奉らむと也」私云「影さへ見ゆるは私がこゝへ顔を出すの意。卽ち「私が常にお伺ひするかひが大にあらうといふものです」の意。「淺う」は「山の井」の縁語。玉の小櫛の說には贊成しかねる。

みづから聞召し負ふべき事とも思ひ給へず。それは雪を踏みわけて參り來たる志ばかりを、御覽じわかむ御このかみ心にても過ぐさせ給ひてよかし。かの御心寄せは、又異にぞはべ・かめる。ほのかに宣ふさまもはべめりしを、いざや、それも人の分き聞えがたき事なり。御返り・などは、いづ方にかは聞え給ふ」と問ひ申し給ふに、ようぞたはぶれにも聞えざりける、何となければ、かう宣ふにも、いかに恥かしう胸つぶれまし、と思ふに、えこたへやり給はず。

雪深き山のかけはし君ならで又ふみ通ふ跡を見ぬかな

と書きてさしいで給へれば、薫「御物あらがひこそ、なか〳〵心おかれ侍りぬべけれ」とて、

「つらら閉ぢ駒ふみしだく山河をしるべしがてらまづや渡らむ

さらばしも、影さへ見ゆるしるしも淺うは侍らじ」と聞え給へば、思はずに物しうなりて、殊にいらへ給はず。けざやかに、

えんげ　艷氣。

心苦しう御氣の毒にもこの御住まひは日がな一日物思ひをさそはれるやうに出來てゐる。**ただ山里のやうに**私の住居はまるで山里のやうなどく閑靜な場所で人もあまり來ない所でございますもの。**人もゆきまじらぬ所に**河内本は本の儘。**さも思しかけば**其處へ引越さうと思召すならばどんなに嬉しい事でせう。

近づき難く取澄ましてゐる風にはお見えにならないがいと物遠くすくみたるさまには見え給はねど、今時の若い女たちと違つてつやつやそはあらまほしけれと、思ふにたがはぬ心地し給ふ。事に觸れて氣色ばみ寄るも、知らずがほなるさまにのみもてなし給へば、心恥かしうて、昔物語などをぞ、物まめやかに聞え給ふ。供人「暮れ果てなば、雪いとど空も閉ぢぬべう侍り」と、御供の人々こわづくれば、歸り給ひなむとて、薫「心苦しうながめくらさるる御すまひのさまなりや。ただ山里のやうにいと靜かなる所の、人もゆきまじらぬ所に侍らむ」など宣ふも、いとめでたかるべき事かなと、片耳に聞きて、うちゑむ女ばらのあるを、中の君は、いと見苦しう、いかにさやうにはあるべきぞ、と見聞き居給へり。御菓子よしあるさまにて參り、御供の人々にも、肴などめやすき程にて、か

かの御移香　三二頁。

鬘鬚　河海「かづらをかけたるやうにおひたるなり」

心づきなくて　氣にくはぬつらがまへをしてゐる。

はかなの　これが姫君達の力にしてゐられる男とは頼りない事だ。

一所の御蔭に　八宮の御庇護のもとに。

今はまして　八宮亡き今は、野山の奥に引込まうにも、身の置き場がございませぬ。古今秋下「わび人のわきて立寄る木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり」

いとど人わろげ　一層泣きぬれて見ともない。

行ひ給ひけり　八宮が生前に坐つて勤行された御床等を取片付けて掃除してある。

立寄らむ　自分が出家したら師と仰がうと當にしてゐた八宮は薨去してしまはれた。宇津保藏開下の「優婆塞が行ふ山の椎がもとあなそばばしたる歌。」

御庄など仕うまつる　薫を世話する人々の所へ秫草の莊園を取りにやつたのだが、その事は此處薫も御存じがないのに。今夜に泊る準備の爲の秫草である。

はらけさしいだ(で)させ給ひけり。(へ・)かの(又・)御移香もてさわがれし宿直人ぞ、鬘鬚(かづらひげ)とかいふつらつき、心づきなくてある。はかなの御頼もし人やと見給ひて(つ・)、宿直人を召出(めしい)でたり。薫「いかにぞ。八宮のおはしまさでのち、心細からむな(な)」と問ひ給ふ。宿直人はべそをかいてうちひそみつつ、心弱げに泣く。宿直人「世の中に頼むよるべ(身寄)も侍らぬ身にて、一所の御蔭に隠れて三十餘年(ねん)を過ぐし侍りにければ、今はまして、野山にまじり侍らむも、いかなる木のもとをかは頼むべく侍らむ」と申して、いとど人わろげなり。故宮のおはしましし方(部屋)あけさせ給へれば、塵いたう積りて、佛像のみぞ、花の飾り衰へず、行ひ給ひけりと見ゆる御床(ゆか)など取りやりて、搔拂ひたり。薫「本意をも遂げば」と契り聞えしことおもひ出(ほし)でて、八宮と

立寄らむ蔭と頼みし椎がもと空しきとこになりにけるかな薫

とて、柱に寄りゐ給へるを(薫を)も、若き人々(女房達)はのぞきてめで奉る。日暮れぬれば、近き所々に、御庄(みさう)など仕うまつる人々に、御秫(みまくさ)

怪しうはしたなき　薫は彼等が何の爲に來たか知らないから不思議に思ひ、且微行で來られたのを見られてきまりわるがるのである。

仰せおきて　御庄の司人等に。

年かはり　薫廿四、大君廿六、中君廿四、匂宮廿五。

かうまでながらへ　姫君達は父宮に「暫しにても奉りて世にあるべきものと思しならはぬ御心地ども」であるのに、いつか春にもなつた事を、今更に驚き且一入の悲しさを覺えたのである。

君がをる　これがもし父宮の折つて送つて下さつた蕨といふのならば、春になつたしるしもこれによつて知れるでせうに。

雪深き　私共のやうなさし上げる親もない身では、この雪深い汀の小芹を誰の爲に摘み取つて稀美しませうぞ。

供人の指圖で取りにやりける、薫も君も知り給はぬに、御庄の司人の事田舍びたる人々(は・)、大野おどろ〳〵しく引きつれ參りたるを、怪しうはしたなきわざかなと御覽ずれど、辨の所へ用があつて來たやうに取繕はれたる老人にまぎらはし給ひつ。平素もこんな姫君達を世話するやうに命じて大方かやうに仕うまつるべく仰せおきて出で(歸京)給ひぬ。

年かはりぬれば、空の氣色(のどやかで)うららかなるに、汀(みぎは)の氷解けわたるにつけても、かうまでながらへけるもありがたく(珍らしいことだ)も、と眺め給ふ。聖の坊(阿闍梨もと)・より、「雪消えに摘みて侍るなり」とて、澤の芹、峯の蕨など奉りたり。(姫君達に)御佛前の精進の御膳にみいもひの御臺(だい)に參れ・る。女房「所につけては、芹や蕨などによつて春のめぐり來た事の知られるのが面白い斯かる草木の氣色に從ひて、ゆきかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など人々のいふを、姫君達の心に何のをかしきならむと聞き給ふ。

君がをる峯の蕨と見ましかば知られやせまし春のしるしも（大君）

雪深き汀の小芹たがため（中君）に摘みかはやさむ親なしにして

など、はかなき事・・・(ど・も)を打語らひつつ明け暮し給ふ。中納言殿(薫)

うるさく何となき　薫や匂宮からの消息についても記述すべきであるが、何でもない事がごてごてと書いてあるやうなので例によつて此處には省筆したのだらうと地の文。

かざし　五〇頁「同じかざしを折りてけるかな」と詠んで送つた去年の春の事。

故ありし　「御すまひ」を修飾する。

つてに見し　去年の春は物の序に宇治の櫻を眺めたのですが、今年はその櫻を直接折つてかざしませう。中君をわがものにしたいの意。

心をやりて　もう既に自分のものにしおほせたつもりでいゝ氣になつて。「のたまへり」河内本には本の儘。

うはべばかりを　表面だけの面目は立てやらうと思つて。返事しなければ、匂宮に恥をかかせる事になるのである故、單に返事だけはするのである。

いづくとか　喪にこもつてゐる私でございますもの、どうして君その歌でありませう。中君が出來ませう。

御心に餘り　匂宮は中君を手に入れたさに思案に餘つては、取成しわやるといつて、あれこれと一圖に一圖にあ恨んだりなさるのに薫を責めたりなさるので。

うけばりたる後見がほに　姫君達の身の上なら自分が一切の世話を引受けてゐるといつた態度で。

御心づかひし給ふべし　形は終止してゐるが意味の上で「心にかなふあたりを云々」を修飾する語勢である。

心にかなふあたりを　私の浮氣も、氣に入つた女をまだ見つけさない間だけの事ですよ。

六の君　夕霧の第六女で、夕霧は匂宮に心ざしてゐるのであるが、宮は一向取合はないのである。

ゆかしげなき中らひ　六君とは同志で珍らしみのない間柄だが、わけて夕霧は仰々しくうるさい人だから、一寸した浮氣でも矢釜しくいはれるのが厄介だ。

介癸上
源氏
明石上
夕霧
六君
明石中宮
匂宮
今上

すまひ給ふ　抗辯する。六君との結婚を承諾なさらぬ。

おのが物とは　大君は自分の物だと薫は信じ居りながらも、當人の打解けない間は、ふざけた眞似をし、心ない仕打はすまいと控へて。

河面　宇治川の川岸。

よりも宮（匂宮）よりも、折過ぐさずとぶらひ聞え給ふ。（機を逸せずに姫君達を見舞はれる）うるさく何となき事多かるやうなれば、例の書き漏らしたるなめり。

花ざかりの頃、宮（匂宮）かざしを思し出でて、その折見聞き給ひし君（匂宮）

にお供した貴公子達）達なども、君達「いと故ありし親王（八宮）の御すまひを、又も見ずなりに（趣のあつた）し事」など、大方の（世間の無常）あはれを口々聞ゆるに、宮は姫君達をいとゆかしう思さ

れたり。

（匂宮）つてに見し宿の櫻をこの春は霞隔てず折りてかざさむ

と心をやりてのたまへりけり。（それはとんでもない事だと）あるまじき事かなと（中君は）見給ひながら、（退屈な際であるので見ごたへのある御文の）いとつれ〴〵なる程に、見どころある（匂宮の）御文の、うはべばかりをもて消たじとて、

いづくとか尋ねて折らむ墨染に霞こめたる宿の櫻を

なほ斯くさし放ち（相手にならず）てつれなき御氣色の（中君の）見ゆれば、誠に（匂宮は）心憂しと思し渡る。御心に餘り給ひては、只中納言を、とざまかうざまに責め恨み聞え給へば、（薫は）をかしと思ひながら、いとうけばり

たる後見がほにうちいらへ聞えて、あだめいたる御心ざまをも見（薫が）あらはす時々は、（薫「いかでか斯からむには」など申し給へば、宮も御心づかひし給ふべし。（氣をつかはれるやうな辯解をなさるのやうな）匂「心にかなふあたりを、まだ見つけぬ程ぞや」と宣ふ。大殿（おほいどの）の六の君を思し入れぬこと、なま恨めしげにおとども思したりけり。されど、匂「ゆかしげなき中らひなるうちにも、（六の君も夕霧も）おとどの（夕霧）事々しく煩はしくて、何事の紛れをも見咎められむがむつかしき」と、（薩では）したには宣ひてすまひ（ぐし）給ふ。

その年三條の宮（女三宮邸）焼けて、入道の宮（女三宮）も六條の院に移ろひ給ひ、何くれと物さわがしきに紛れて、宇治のわたりを（に）久しう音づれ聞え給はず。（薫は）まめやかなる人の御心は、又いと殊なりければ、（人とは違つて居つたから）いとのどかに（氣が長くて）、おのが物とは打頼みながら、女の（大君）心ゆるび（い）給はざらむ限りは、あざればみ情（なさけ）なきさまに見えじと思ひつつ、（自分が故）昔の御心忘れぬかたを深く見知り給へと（宮の）（薫は）おぼす。（宮の）（情を忘れない點を大君が十分認めて下さるやうにと）

その年常よりも暑さを人々わぶるに、河面（かはづら）涼しからむはやとお

出て給ひければ 宇治に着かれた比は意地わるく日影がさして来て暑くもありまぶしくもあるので。

西の廂 朝日を避ける爲に。

けぢかからじとて 薫の御座所にあまり接近して居たくないと思つて。

おのづから 「聞えければ」を修飾する。そつとなさる動作も近いから自然聞えるのである。

なほあらじに 薫はじつとして居られないで。

此方に通ふ 姫君達の方から薫の方へ通ずる襖。

懸金 襖の開かぬやうにその一端に裝置した金具。

外に 襖のこちら側即ち薫の居る方に立てある屏風。

ここもとに 襖の向ふ側でその穴の所に几帳が添へてあるので姫君達の方は見えないのである。

あらはにもこそあれ 簾垂を吹上げられては外から丸見えで困る。

をこがましきものの 几帳を端の方に押出せば穴からよく見えるから、薫は女房のさかしらを聞いて馬鹿らしい事と思ひながらも嬉しくて。

二間 佛間である。

(ほし)も出でて、俄に(薫が宇治に)まうで給へり。朝涼みの程に出(京を)で給ひければ、あやにくにさしくる日影もまばゆくて、宮(八宮)のおはせし西の廂に、例のかたくなしき侍である宿直人召し出でて(薫が)おはす。そなたの母屋の佛(佛間に姫君達がゐられたが)のお前に君だち物し給ひけるを、けぢかからじとて、姫君達御自身の居間にわが御方に渡り給ふ御けはひ、忍びたれど、おのづから、(身動きなさる音が)うちみじろき給ふ程近く聞えければ、なほあらじに、此方に通ふ障子(さうじ)の端の方に、懸金(かけがね)したる所に、穴のすこしあきたるを見(以前に薫が)おき給へりければ、外(と)に立てたる屏風を引きやりて見給ふ。ここもとに几帳を添へ(て)・立てた(り)・る、あな口惜しと思ひて、引歸る折しも、風の簾垂をいたう吹きあぐべかめれば、(女房)「あらはにもこそあれ。その御几帳押出(端の方に)でてこそ」といふ人あなり。をこがましきものの嬉しうて、見給へば、(四尺の几帳も三尺のも)高きも短きも、几帳を二(ふた)間の簾に・・・(添へて)・おし寄(やり)せて、(薫の居る所の襖に相對する襖から)この障子に向ひてあきたる障子より、(姫君達が)あなたに通らむとなりけり。まづ一人立ち出でて、(中君が)几帳よりさしのぞきて、(薫の)この御供の

濃き鈍色の 喪中故。

くわざう 萱草。萱草色の略で柑子色の事。

もてはやしたる 袴の萱草色が單衣の鈍色を引立たせてゐる。

なか〳〵 「花やかなり」を修飾する。

はかなげに 形式だけに。暑いからである。

すこしたえぬ 河内本の「たらぬ」とあるに從ふべきである。

塵のまよひなく 髪に少しの亂れくねつた癖もなく。

女一の宮 今上の第一皇女で明石中宮の御腹。湖月抄師說「今上の女一宮の御事也、寄生の卷にも薫の見給し事あるに、わらはにおはしける時見奉りしまゝの由あり。然れば女一宮のわらはにおはしましける時をほの見奉りしが、今は此中君のやうにと思ひ比べ給ふとはすべきぞおはしけるを見るべくやー」

かの障子 今薫が覗いてゐる襖である。几帳は端の方に押しやつて何も添へてないから、外から覗かれる事を氣づかふのである。

かんざし 髪の樣子。

あなた 薫のゐられる方。屏風も立てそへてあるし、また來る匂ミのぞきもなさるまい。

いみじうも 薫に覗かれたら大變です。

人々の、とかう行きちがひ、涼みあへるを見給ふなりけり。濃き鈍(にび)色の單衣(ひとへ)に、くわ(ん)・ざうの袴のもてはやしたる、なか〳〵、さま變りて花やかなりと見ゆるは、著なし(着こなしてゐられる)給へる人(中君の)がらなめり。帶はかなげにしなして、數珠(ず)引き隱(袖に)して持給(も)へり。いとそびや(せい高く)かに容體(やうだい)をかしげなる人(格好のよい人)の、髪袿(うちぎ)にすこしたえ(ら)ぬ程ならむと見えて、末まで塵のまよひなく、つや〳〵とこちたううつくしげなり。かたはら目など、あならうたげと見えて、(横顔)匂ひやかに柔かにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、(薫が管て)ほの見奉りしも思ひくらべられて、打歎かる。又ゐざり出でて、(大君)「かの障子はあらはにもこそあれ」と見おこせ給へる用意、(氣をゆるさない態度で話しあつたら風情もあらうと)打解けたらぬさまして、よしあらむと覺ゆ・・・(し)。かし(う)らつき、かんざしの程、(中君よりも)いますこしあてになまめかしきさまなり。(女房)「あなたに屏風も添へて立てて・侍りつ。急ぎてしもの(薫は)ぞき給はじ」と、若き人々何心(考もなしに)なくいふ(め)あり。(大君)「いみじうもあるべきわ

ざかな」とて、氣がゝりらしくうしろめたげにねざり入り給ふ程、けだかう心にくきけはひ添ひて見ゆ。黒き袷一かさね、中君と同じやうなる色あひを著給へれど、大君はこれはなつかしうなまめきて、あはれげに心苦しう覺ゆ。髪さはらかなる程に落ちたるなるべし、髪の末すこしほそりて、色なりとかいふめる、翡翠すだちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手にも・ち給へる手つき、中君よりもかれよりも細さまさりて、痩せ〳〵なるべし。立ちたりつる君も、障子口にゐて、何事にかあらむ、大君の方をこなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

黒きをいふ。鈍色の。以下大君の服裝

髪さはらかなる程に　ひどく拔け毛したのではないが、さつぱりした程度即ちこちたからぬ程度に髪がうすくなつてゐる。これは悲しみの爲に拔け毛したのである。中君よりは大君の悲しみの甚しいことを示したものである。後の「痩せ〳〵なるべし」と共に心勞の甚しさを見せた筆法で、大君の神經質をおもはせるものである。

色なりとか　髪の毛色の美しい事をいふ。卷四、三九八頁參照。

翡翠だちて　これも髪の毛色の美しきをいふ。

見おこせて笑ひたる　こゝにも中君の樂天的な性格が示されてある。

あまた年　姫君達が多年聞き馴れて來られた宇治の河風も。**はしたなく**　居ても立つてもゐられない程物悲しい。**法服**　僧への布施の料。**經の飾り**　經机の覆ひなど。**こまかなる**　侍女達の申上げる詞。**いと物はかなく**　適當な指導者がないから。**今は**　今日を限りと吉服に着換へられる折のお見舞を心から申される。

河海「名香糸、行香机四角結垂糸也」「花鳥「さま〳〵の香を紙に包て五色の糸にて結かけて佛に奉る也」古今戀五「身を憂しと思ふに消えぬものなれば斯くても經ぬる世にこそありけれ」

名香の糸　方形の臺に三本の柱を立てた糸くり臺。**斯くてもへぬる**　伊勢集・六帖四「よりあはせて泣くなる聲を糸にしてわが泪をば玉にぬかなむ」

わが泪をば　伊勢守藤原繼蔭女で伊勢の御仕へて皇子を生み奉る。**たたり**　本歌に兩人の聲を一本の糸によりあはせてと詠んであるので、それを了解したやうな返事するのは、薫と夫婦であるべきことになるから、斟酌したのである。「糸」古今羇旅貫之「**聞き知りがほに**　**物とはなしに**　古今羇旅貫之「糸による物ならなくに別路の心細くも思ほゆるかな」

あまた年耳馴れ給ひにし河風も、八宮幾去の翌年の秋薫二十四歳この秋はいとはしたなく物悲しくて、御はての事いそがせ給ふ。八宮の一周忌の御法事を準備される大方のあるべかしき事ども法事に必要な一般の準備は薫は、中納言殿、阿闍梨などぞ仕うまつり給ひける。姫君達ここには法服のこと、經の飾り、こまかなる御あつかひを、人の聞ゆるに頼りなく心細くて人の從ひて營み給ふも、いと物はかなくあはれに、斯かるよその御薫や阿闍梨の世話後見なからましかば、と見えたり。薫も宇治にみづからもまうで給ひて、今はと脱ぎ捨て給ふ程の御とぶらひ、淺からず聞え給ふ。阿闍梨も此處に參れり。名香の糸引き亂りて、「斯くてもへぬる」など、打語らひ給ふ程なりけり。結びあげたるたたりの、簾垂の糸の縁つまより、几帳の綻に・透きて見えければ、名香の糸を造るのだなと その事と心得て、「わが泪をば玉にぬかなむ」とうち誦じ給へる、伊勢の御もかうこそはありけめと、をかしう聞ゆるも、簾内に居る姫君達内の人は、聞き知りがほにさしいらへ給はむもつつましくて、「物とはなしに」とか、死別のみならず生別をさへ貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋に引きかけけむを糸の縁

御願文　追善の爲の。

客人薫。　湖月抄師説「同じ所にと**あげまきに**は、總角は幾たびも結びめぐるもの也」一名香の長き契をこめて、その君と結ばれし所へ大君の心に入るまじき事を、かやうの方にすこしも同じ所なれば、例のとうるさければ、

ぬきもあへず　大君の命でぬて、どうしぬか分らぬ私の約束などが結ばれまして末長き事も出來ない脆い涙せう。買くもあつたもので、

あはずば何を　古今戀一「片糸の玉の緒の緒といひかけてあはずば方彼方によりかけて命があつたものを」命の緒にせむ」の意。

さしも御心に　この一句は「聞えそめ給ひけむ」に續く。

聞えそめ給ひ　一度いひ出されても何にならぬ意。

ぬきもあへず　悲しさにいつ死ぬかの命でぬて、どうしぬか分らぬ私の約束などが結ばれまして末長き事も出來ない脆い涙せう。買くもあつたもので、

あはずば何を　古今戀一「片糸の玉の緒の緒といひかけてあはずば方彼方によりかけて命があつたものを」命の緒にせむ」の意。

さしも御心に　この一句は「聞えそめ給ひけむ」に續く。

聞えそめ給ひ　一度いひ出されて地十分に宮の御腹を探つて盡ましてした。

世の有樣など　世相などお分りに見受け申さないのに、いやに疎々しい態度をなさるの。

など、げに古歌ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出で給ふ。御願文作り、經佛供養ぜらるべき心ばへなど書き出で給へる硯のついでに、客人、

薫「あげまきに長き契を結びこめ同じ所によりもあはなむと書きて見せ奉り給へ・ば、例のとうるさければ、

大君「ぬきもあへず脆き涙の玉の緒の緣語に長き契をいかが結ばむとあれば、

薫「あはずば何を」と、怨めしげにながめ給ふ。

大君は自分の事はみづからの御うへは、斯くそこはかとなくもて消ちて恥かしげなるに、すが〳〵とも打明けきれずにともえ宣ひ寄らで、宮の御事をぞまめやかに聞え給ふ。

薫「さし句宮は左程お氣に召さぬ事でもも御心に入るまじき事を、何分好色の方にはちとすはやい御性質かやうの方にすこし進み給へる御本性にて、聞えそめ給ひけむ負けじ・の御・魂にやと、とざまかうざまに、いとよくなむ御氣色見奉る。中君を許しても決して誠にうしろめたうはあるまじげなるを、なさらないのでせうなどかうあながちにしもて離れ給ふらむ。句宮を相手に世の有樣など思し分くまじくは見奉らぬを、うたて遠々しくのみもてなさせ給へば、かばかりうらなく頼み聞ゆる心にたがひて、怨めしくなむ。ともかくも思し分くらむさまなどを、さわやかに・・・・承りにしがな」と、いとまめだちて聞え給へば、大君「たがへ聞・えじの心にてこそは、かうまで怪しき世のためしなる有樣にて、隔てなくもてなし侍れ。それを思し分かざりけることこそは、淺き事もまじりたる心地すれ。げに斯かるすまひなどに、何事にも如才はございますまいが心あらむ人は、思ひ殘すことあるまじきを、私は何事にもおくれそめにけるうちに、この宣ふめる筋は、古へも、更にかけて、『とあらばかからば』など、行末のあらましごとに取りまぜて、宣ひおく事もなかりしかば、なほ斯かるさまにて、夫を持つ事は斷念せよとの父宮の御意向と察せられますので世づきたる方を思ひ絶ゆべく思しおきてけるとなむ思ひ合せ侍れば、ともかくも聞えむ方なくて。さるはすこし世ごもりたる程にて、み山がくれには心苦しう見え給ふ人の御うへを、いと斯く朽木にはなし果てずもがなと、人知れずあつかはしう覺え

かばかり　これ程心からあなたを信じてゐる私の心持とは飜飜としてゐるでゐる私の心持とは飜飜として思はれまして怨めしく思はれます。私は隱し立てして心底をおし打明け下さらないのが怨めしい。

思し分くらむ　御分別の程をこの意。

たがへ聞えじの　飜飜しまいと思へば、こそ、これ程迄、不思議な例として引かれさうな私の身の上でゐて、隔意なくおつきあひしてゐるのでございます。

それを思し分かざり　それがお分りになならなかつたといふのは、御志の淺い所もあるやらな氣が致します。

げに斯かるすまひ　宇治の山莊の閑靜な住居では。「げ」は下の「思ひ殘すこと云々」に續く。

この宣ふめる筋　今仰しやつたやうなお話。即ち男女の交渉。

更にかけて　「宣ひおく事もなかりしかば」を修飾する。

とあらばかからば　あゝいふ場合にはかうせよ、かゝいふ場合にはあゝせよ。

すこし世ごもりたる　私よりも年若で、こんな山の中に埋もれさせておくのは氣の毒にはしてある中君を、此儘朽木にはしたくないと、内心處置に苦まるひしてゐるのでございますから。「何とかして」とは思つて居りますが」などの意の省文がある。

けざやかに 若い女の事ゆゑ、大君が大人らしくはきはきとどうして答へる事が出來ようぞと、薫は尤もに思つて。

年頃は 今迄は只一圖に後生願ひが目的でこちらに推參し始めたのですが。

この御事どもを 姫君達を、私の思ひ通りにお世話申すやうに御依頼になつたのだのに。

思しおきて奉りし 故宮の御意向とは違つて、姫君達が生憎父薫去後は一入强情らしいのは、どうふのだらう。別にお考へのあつての事か。

いと怪しき 私は隨分不思議な男で、憂世に執着は持たなかつたのに。

さるべきにてや これ程お近づきになつたのも前世の因縁でせうか。

同じうは 同じ事なら故宮の御意向通り、私も大君も世間並に夫婦の語らひもしたい打解けて思つきましたのは、よしこれと不似合な事であつても、さうした例は他にないではありませぬ。

侍れば。併し縁といふものはどうなるものでせうか いかなるべき世にかあらむ」と打歎きて、物思ひ亂れ給ひける程のけはひ、大君の いとあはれげなり。

けざやかに、大人びてもいかでかはさかしがり給はむ、と道理にて、例の古人召出でてぞ語らひ給ふ。辨君 薫年頃は、ただ後の世ざまの心ばへにて進み參りそめしを、八宮が物心細げに思しなるめりし御末の頃ほひ、八宮の晩年の頃 この御事どもを、心にまかせてもてなし聞ゆべくなむ宣ひ契りてしを、八宮が私に思しおきて奉り給ひし御有樣どもにはたがひて、姫君達の御心ばへどもの、いとど〳〵あやにくに物强げなるは、いかに、他に意中の男でもあるのか思しおきつる方の異なるにやと、疑はしき事さへ添ひてなむ。私といふものについては自然お耳にはひつてゐるでせうおのづから聞き傳へ給ふやうもあらむ、いと怪しき性にて、世の中に心をしむる方なかりつるを、さるべきにてや、かうまでも聞え馴れにけむ。世間でも私と大君とは夫婦だなどと噂してゐるやうですが世人もやう〳〵いひなすやうあるべかめるに、同じう は昔の御事もたがへ聞えず、我も人も世の常に心とけて聞え通はばやと思ひ寄るは、つきなかるべき

宮の御事をも 匂宮を中君にと申上げるのに、氣遣ひはあるまいと打解けられる御樣子のないのは内々かう〳〵と考へてゐられる事情があるのでせう。

あらまほしかるべき 大君を薫へ、中君を匂宮へ、それは何れも結構な御緣だとは思ふが。

いかにも〳〵 「思ひ寄り給へる」を修飾する。全く世間並に夫を持たうなどとは何にも考へてゐられる御樣子でもございませぬ。

年頃だに 八宮の御在世中でも何も力と頼む身の寄せ所もございませんでした。古今秋下「わびぬる人の分きて立寄る木の下は頼むかひなく紅葉散りけり」

まして今は 父宮亡き今はまして。

おはしましし 以下は侍女等が常に姫君達を諫めていふ詞をまねたもの。

限りありて いくら落ちぶれたからとて、身分が身分だから、見苦しい御結婚は困るなどと、故宮が古風な潔癖から躊躇もされたのですが。

事にても、さやうなるためしなくやはある」など宣ひ續けて、薫「宮の御事をもかう聞ゆるに、うしろめたうはあらじと、打解け給ふさまならぬは、うち〳〵にさりとも思ほし向けたる事のさまあらむ。なほいかに〳〵」と、歎きながらうちながめつつ宣へば、例のわろびたる女房 などは、斯かる事には、憎きさかしらも言ひまぜて、ことよがりなどもすめるを、辨はいとさはあらず、心のうちには、あらまほしかるべき御事どもを、と思へど、辨「もとより斯く人にたがひ給へる御癖どもに侍ればにや、いかにもいかにも、世の常に何やかやなど思ひ寄り給へる御氣色になむ侍らぬ。斯くてさぶらふこれかれも、侍女達も年頃だに、何の頼もしげある木の下の隱ろへも侍らざりき。身を捨てがたく思ふ限りは、程々につけてまかで散り、昔の古き筋なる人も、多く見捨て見奉り捨てたるあたりに、まして今は暫しも立ちとまりがたげにわび侍りつつ、『おはしましし世にこそ、限りありて、かたほならむ御

松の葉を葉爲レ食、汝門隱士行也」 河海「芰荷爲レ衣、松

いかで人めかしうもぜひとも人並の生活がさせたいものだ。相當の結婚をするやうに世話してあげようの意。**かく山深う**こんなにあなたが山奥まで訪ねて下さいますのも長い年月のやうに思ひますが、その長い間の御親切な御世話ぶり、大君もあなた様の御世話なりに、今では何のかと立心ゆるして、御相談申げられるのやうに入つて、中君をそのやうなさいましたならば差上げるやうで、望みとさいまして、つてお思ひでいらつしやるのかもしれません。ざいます。大君は問題のやうに、薫に直接でなくて、大君申出でたのであつたかそれを知らなかつたのは、辨君のやうにいつてゐるのである。

有様はいとほしくもなど、古代なる御うるはしさに・・思しも滯りつれ、今はかう又頼みなき御身どもにて、いかにも〳〵世に靡き給へらむを、あながちに譏り聞えむ人は、却りて物の心を辨へないでをも知らず、いふかひなき事にてこそはあらめ。いかなる人か、いとかうて世をば過ぐし果て給ふべき。松の葉をすきて勤むる山伏だに、生ける身の捨てがたさによりてこそは、佛の御教へをも、道々別れては行ひなすなれ』などやうのよからぬ事を聞え知らせ、若き御心ども亂れ給ひぬべき事多く侍るめれど、たわむべくも物し給はず、中の君をなむ、いかで人めかしうも・・扱ひなし奉らむと、思ひ聞え給ふべかめる。かく山深う尋ね聞えさせ給ふめる御志の年經て見奉り馴れ給へる、けはひも疎からず思ひ聞えさせ給ひ、今はとざまかうざまに、こまかなる筋に・聞え通ひ給ふめるに、かの御方をさやうにおもむけて聞え給はば、となむ思すべかめる。宮の御文など侍るめるは、更

いづ方にも姉妹の姫君のどなたと結婚しても同じ譯なのに。**さまではたのは**大君がさうまで思ひかけたのは大層嬉しい事ですが併し。**心の引く方なむ**これ程憂世は思ひ捨てて居りますが、好惡の念といふものはまだ殘りとどまつてゐるのですから。**只かやうに**こんなに物越で、言ひたい事もいはれないといふやうな風でなく。**とにかくに**「隔てなく聞えて」に續く。**つつみ給ふ御心の隈云々**この一句はずつと句を隔てて「うと」に續くかまじうの頼みの開ゆるし文脈。御心中に何のひ下さるのがないやうにお振舞ひ下さるのが親しく力頼みに思はれます。**いとさうゞしくなむ**句を隔てて「過ぐる身なれば」に續く。世間の物思のうち、哀に思はれる事も面白い事も悲しい事も、その時々に起る事柄を、いつも胸一つに收めたきりで、大層淋しく暮してゐる身ですから。**后の宮**明石中宮。

明石上＝＝句宮
源氏＝＝明石中宮
女三宮＝＝薫

にまめ〳〵しき御事ならじと侍るめる」と聞ゆれば、薫「あはれなる御一言も聞きおき奉りにしかば、露の世にかかづらはむ限りは、聞え通はむの心あれば、いづ方にも見え奉らむ、同じ事なるべきを、さまではた思し寄るなる、いと嬉しき事なれど、心の引く方なむ、かばかり思ひ捨つる世に、なほとまりぬべきものなりければ、改めてさはえ思ひなほすまじくなむ。世の常になよびかなる筋にもあらずや。只かやうに物隔て・言殘いたるさまならず、さし向ひて、とにかくに、定めなき世の物語を、隔てなく聞えて、つつみ給ふ御心の隈殘らずもてなし給はむなむ、兄弟などのさやうに睦まじき程なるもなくて、いとさうざうしくなむ、世の中の思ふ事の、あはれにもをかしうも、うれはしうも、時につけたる有様を、心にこめてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづきなく覺ゆるに、うとかるまじう頼み聞ゆる。后の宮はた、狎れ〳〵しうさやうにそこはかとなき思ひのまま

故宮の御遺言を　仰しやつていらつしやるやうです　中君を薫にと　中君に思ひかへる事は出來ませぬ　お訪ねもする積り故　中君を薫が望まれるなら　句宮から中君にお手紙を下さるやうですが　本氣　姫君達を　姫君達の　姫君達を緣づ　大君が思ひもし仰しやりもするやうでございます　姫君達を　姫君達を　姫君　大君　誰でも今の姫君達のやうに　薫の態度に危險なしと　大君に對する　薫の　姫君達の　姫君達を　姫君達の　姫君達を　他にたよりない　父宮なき今　姫君達を　どのやうになりと成りゆきにまかせて身の振方をつけられても　道理　侍　食べて　相談相手もなく　無常な世の物語を　面と向つて　私には姉妹などで左程睦じいのもないので　無躾にそんなとりとめもない勝手氣儘なくだ〳〵しい事をお耳に入れるべきではありませぬ　明石中宮は異母兄弟であるとはいふものの、　この世の緣につ　いつ死ぬともわからぬ世ではあるが、　中君に　中君を　中君を　中君を

限りあれば 親子の分があるから氣輕になれ〳〵しくする事は出來ませぬ。

なほざりの 私は假初の冗談にしろ、好色めいた事は非常にてれくさいやうで芝居してるやうできまりがわるいといつたぎごちなさで。

宮の御事をも 中君と匂宮との事も、いくら何でもわるく取計らふ筈はないと信じて。

あらまほしげなる 薫が理想的なお方であるので、ぜひ御夫婦であらせたいと望んでゐるけれども。

思ひのままには 辨は自分の考へを率直には申上げかねてゐる。

なるくだ〳〵しさを、聞え觸るべきにもあらず。三條の宮は、親と思ひ聞ゆべきにもあらぬ御若々しさなれど、限りあれば、た・やすく馴れ聞えさせずかし。そのほかの女は、すべていと疎くつつましう怖ろしう覺えて、心からよるべなく心細きなり。なほざりのすさびにても、懸想だちたる事は、いとまばゆくありつかず、はしたなきこち〳〵しさにて、まいて心にしめたる方の事は、うちいづる事も難くて、恨めしうもいぶせくも思ひ聞ゆる氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限りなくかたくなしきわざなれ。宮の御事をも、さりともあしざまには聞えじと、まかせてやは見給はぬ」などいひ居給へり。老人はた、かばかり心細きに、あらまほしげなる御有様を、いとせちにさもあらせ奉らばやと思へど、いづ方も恥かしげなる御有様どもなれば、思ひのままにはえ聞えず。

今宵は泊り給ひて、物語などのどやかに聞えまほしうて、やすらひ暮し給ひつ。あざやかならず物恨みがちなる御氣色、やうやうわりなくなりゆけば、煩はしうて、打解けて聞え給はむ事もいよ〳〵苦しけれど、大方にては、ありがたうあはれなる、人の御心なれば、こよなうもてなしがたうて、たいめんし給ふ。佛のおはする中の戸をあけて、みあかしの火けざやかにかかげさせて、簾垂に屏風を添へてぞおはする。外にも大殿油參らすれど、薫「惱ましうて無禮なるを、あらはに」など諫めて、かたはら臥し給へり。御菓子など、わざとはなくしなして參ら せ給へり。御供の人々にも、故々しき肴などして、いださせ給へり。廊めいたる方に集まりて、このお前は人げ遠くもてなしぬものから、なつかしげに愛敬づきて物宣へるさま・・・・・の、なのめならず心に入りて、思ひいらるるもはかなし。斯く程もなき物の隔てばかりを障りどころにて、覺束なく思ひつつ過ぐす

あざやかならず はつきり口に出しては言はずに大君を怨んでゐる薫の樣子が段々昂じてゆくので。

大方にては 薫といふ人は懸想を別にして一般的に見れば、珍らしい殊勝な心の人だから、大君もあまりつれなく扱ふ事も出來なくて對面された。

佛のおはする 中の戸を開けたのも灯をあかくするのも皆大君の用心である。

外にも 佛間の外卽ち薫のゐる所。

惱ましうて 氣分がわるくて失禮な行儀をして居るのに、そんなにあかるくては困る。

人げ遠くもてなして 人を近づけないやうにして。お二人の話の邪魔にならぬ樣に注意したといふ意味の語が省略してある。

思ひいらるるも いら〳〵した氣持になられるのも、わけもないものだ。世をおもひすてた筈の薫の心が簡單に動かされるのを批評した詞である。

斯く程もなき こんな何でもない(簾垂や屏風だけの)隔てだけを障碍物として、思ひも遂げずに氣が氣でなく思つてゐる自分の心の鈍さは、あまりにも馬鹿らしい事だ。

大方の世の事ども 世間話を、哀にも又面白くも、色々と聞いて聞きばえのあるやうに話される。

人々近う 皆さん私の側に居つて下さい。大君が女房達にいうた詞。

物むつかしうて 侍女達が大君の指圖どほりにしないから不愉快で。

おどろかず わざと眠つたふりをしてゐるのである。

山路分け侍り 此處迄難儀してやつて來た私は。

いとむくつけうて 突然の闖入に大君は氣味わるがつて。

隔てなきとは 九五頁に薫が「只かやうに物隔て言殘いたるさまならず……定めなき世の物語を隔てなく聞えて」といはれた詞を受けける。隔てなきといふのはこんなのをいふものか知らぬ。

心おそさの、あまりをこがましうもあるかな、と思ひ續けられど、何ひない顔して つれなくて、大方の世の中の事ども、あはれにもをかしうも、さま〳〵聞きどころ多く語らひ聞え給ふ。簾内には、「人々近う」など宣ひおきつれど、大君が命じておかれたのだが ふべかめれば、あまり見張りもせず いとしもまもり聞えず、女房達は大君がさまで薫を疎隔なさらぬやうにと望んでゐる樣子故 さしもて離れ給はざらなむと思その場を引下つて さししぞきつつ、皆寄り臥して、佛前の佛の御燈火も、搔上げる かかぐる人もなし。大君は 物むつかしうて、侍女達を 忍びて人召せどおどろかず。大君「心地のかき亂り惱ましう侍るを、一休みして ためらひて、曉がたにも又奥に 聞えむ」とて、入り給ひなむとする氣色なり。薫「京から宇治迄 山路分け侍りつる人は、ましていと苦しけれど、かうしてお話するので慰められてゐます かう聞え承るに、私をおきざりにして 慰めてこそ侍れ。打捨てて入らせ給ひなば、いと心細からむ」とて、屏風をやをら押しあけて 御簾の内に 入り給ひぬ。いとむくつけうて、半身程 なからばかり入り給へるに、薫に 引きとどめられて、いみじうねたう心憂ければ、大君「隔てなきとは、斯かるを 殘念でもありつらくもあるから やいふらむ。めづらかなるわざかな」と、大君の あばめ給へるさまの

珍らかなりとも 私の仕打を珍らかなるわざと仰しやるのは、私がどうする積りと御解釋になつての事なのです。

世にたがへる 人並外れの馬鹿者で通してゐるのですよ、手も出さずに。

心にくき程 前に「佛の御燈火もかかぐる人もなし」とあつた。

御髮のかをりをかしげなり 大君の。いふにいはれぬ美感が動いてゐて人の心をひきつける。

すいたらむ人は 浮氣者が勝手な眞似をしても邪魔物は一つもなささうだもの、自分以外の男が尋ねて來たら、其儘にしておく筈はなからう。

心のやすらひ 今後は申すに及ばず、今まで優柔不斷にして大君を手に入れずにおいた過去までが。

斯くはあらで 大君がこんなに强情を張らないで我の折れる折も自然あらう。

わりなき 大君は自分の態度があんまりなのが心苦しくて、體よく薫の機嫌を取られる。

いよ〳〵興味をひくかをかしければ、薫「隔てぬ心を更におぼし分かねば、聞分けてあけようといふのです え知らせむとぞかし。珍らかなりとも、いかなる方に思し寄るにかはあらむ。佛のお前にて誓言も立て侍らむ。見苦しいこはがり方をなさるうたてなおぢさせ給ひそ。御心破らじと思ひそめて侍れば、初から御考を蹂躙すまいと思つてゐますから 人は斯くしも推し量り思ふまじかめれど、世にたがへる癡者にて過ぐし侍るぞや」とて、心の暗くて奥深かさうに見える ほの 心にくき程なる火影に、御髮のこぼれかかりたるを、薫が かきやりつつ見給へば、大君の風情は 人の御けはひ、思ふやうに、かをりを 薫の理想通りで かしげなり。以下薫の心 かう心細う淋しい餘りにも無用心な山莊に あさましき御すみかに、すいたらむ人は障り所あるまじげなるを、我ならで尋ねくる人もあらましかば、さてややみなまし、さうしたらばどんなに殘念な事だらう いかに口惜しきわざならまし、と來し方の心のやすらひさへ危く覺え給へど、いふかひなく憂しと思ひて泣き給ふ御氣色の、いといとほしければ、斯くはあらで、おのづから心ゆるびし給ふ折もありなむ、と思ひわたる。薫は わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへ聞え給ふ。

斯かる御心の程を　こんな御料簡を氣づかずに自分でも不思議な程お馴染み申して居りましたのにくい喪服を着てやつれてゐる見いやうにかくれてゐる喪服姿を見ようとなさるやうな心淺い事をなさるので、私のなさけない心淺さ―それと氣づかなかつた私のあさはかさもよく〳〵分りまして。

さま〴〵　あなたの心淺さ私の心淺さ、それ〴〵にあきらめられませぬ。

いとかうしも　それ程まで思召す譯があるのかと思ふと恥かしくて、何とも申上げやうがありませぬ。

袖の色を引きかけ　喪服をいひたのは、それも御尤もですが、今迄多年私の志を見馴れて下さつたしるしには、それ位の事を忌みゆ憚るやうな今思ひついた事のやうな考へ方をなさるべきものでは無からうと思ひまする。

かの物のね聞きし　二〇頁にあつた事―今始めたる事―でない所以を說明するのである。

斯かる心ばへ　薫がこんな下心を持ちながらうはべは何げなく眞面目を裝つてゐられた事であるよ。

佛の御方に　持佛と自分との間に几帳を立てて隔てて。

名香　佛前の香。

〈君〉「斯かる御心の程を思ひ寄らで、怪しきまで聞え馴れにたるを、ゆゆしき袖の色など見あらはし給ふ心淺さに、みづからのいふかひなさも思ひ知らるるに、さま〴〵慰む方なく」と怨みて、何心もなくやつれ給へる墨染の火影を、いとはしたなくわびしと思ひ惑ひ給へり。薫「いとかうしも思さるるやうこそはと恥かしきに、聞えさせむ方なし。袖の色を引きかけさせ給ふはしもことわりなれど、ここら御覽じ馴れぬる志のしるしには、さばかりのいみおくべく、今始めたる事めきてやは思さるべき。なか〳〵なる御わきまへ心になむ」とて、かの物のね聞きし有明の月影より始めて、折々の思ふ心の忍びがたくなりゆくさまを、いと多く聞え給ふに、恥かしうもありけるかな、と疎ましう、斯かる心ばへながら、つれなくまめだち給ひけるかな、と聞き給ふ事多かり。御かたはらなる短き几帳を、佛の御方にさし隔てて、假初に添ひ臥し給へり。名香のいとかうばしく匂ひて、櫛のいと花やかにかをれるけはひも、人よりはけに佛をも思ひ聞え給へる御心にて、煩はしく、黑染の今更に、折節、心いられしたる・やうに・・・あは〳〵しう、思ひそめし・・・に違ふべければ、斯かる忌なからむ程に、この御心にも、さりともすこしたわみ給ひなむなど、せめてのどかに思ひなし給ふ。秋の夜のけはひは、斯からぬ所だに、おのづからあはれ多かるを、まして峯の嵐も籬の蟲も、心細げにのみ聞き渡さる。常なき世の御物語に、時々さしいらへ給へるさま、いと見どころ多くめやすし。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと氣色ど りて皆入りぬ。宮の宣ひしさまなど思しいづるに、げにながらへば心のほかに斯くあるまじき事も見るべきわざにこそは、と物のみ悲しうて、水のおとに流れ添ふ心地のみし給ふ。大君は はかなく明けがたになりにけり。御供の人々起きてこわづくり、馬どものいばゆるをも、旅の宿りのあるやうなど人の語るを思

人よりはけに　薫は人一倍佛を信じてゐられる御性分故その香が邪魔になつて。

墨染の今更に　大君が喪に服してゐられる今、無理わざなどするのは、あせつたやうで、時節がらの考へのない仕打で、最初の考に反する譯であるから。

斯かる忌　かうした憚りがなくなつた（父宮の一周忌があいて）折には、大君の御心も、いくら何でも少しは折れられる事だらう。

思ひなし給ふ　「すこしたわみ給ひなむなど思ひなし給ふ」と續くのである。

いぎたなかりつる　今迄ぐつすり寢込んでゐた女房達は。前に「忍びて人召せどおどろかず」とあつた人々をさす。

かうなりけりと　薫と大君との間に事が成立したのだと、樣子を見て取つて皆奥へ引込んだ。

心のほかに　思ひがけなくとんでもない目にもあふものだ。

旅の宿りの　旅宿の有樣などを嘗て人の話すのを聞いた事があるが、薫は今それが思ひやられて興味深く思はれた。

程もなき　軒までは近くていくら距離がないから。家が小さいからである。

かたみに　一夜泣きみ笑ひみ一つ帳に明かしての朝のことと、お互に見る目はなまめかしい姿態なまめかしい顔貌であるのに―話の内容はお互に淋しいものであつたの意で下の文章につゞく。

かういとはしたなからで　こんなに面と向つてきまりわるい思ひをせずに、物越などでお話致しましたら。

羽風近う　家が小さいからである。

今だに　もう曉になつてしまひましたが、せめて今なりとも、早くお歸り下さい。

事ありがほに　後朝めかしく朝露の中を踏分けて歸る事も出來ますまい。

又人は　實事なしと推量する人は誰もありますまい。

只世にたがひたる…**只かやうに**　「只」が重複してゐる。何れかが衍文であらう。

しやられて、をかしう思さる。曉の光見えつる方の障子を薫がおしあけ給ひて、空の風情あるあはれなるを薫と大君と諸共に見給ふ。女大君もすこしねざり出で給へるに、程もなき軒の近さなれば、しのぶ草の露も、直に目の前だやうやうも光見えもてゆく。かたみにいと艶なるさまかたちどもを、薫「何の無常屈託もなしにとはなくて、只かやうに月をも花をも二人同じ心で賞翫し同じ心にもてあそび、は薫がやさなき世の有様を・・聞え合せてなむ過ぐさまほしき」と、いとしい態度でなつかしきさまして語らひ聞え給へば、大君は次第にやう〳〵怖ろしさも慰みて、大君「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞えば、誠に心の隔ては更にあるまじくなむ」といらへ給ふ。あかくなりゆき、群鳥の立ちさまよふ羽風近う聞ゆ。夜深きあしたの鐘のおとかすかに響く。大君「今だに。人前が不憫裁なのにいと見苦しきを」と、大君は非常にいとわりなう恥かしげに思したり。薫「事ありがほに朝露もえ分け侍るまじ。例のやうになだらかにも逸つた潔白な關係で今後もたゞこんな風にやつていつて下さいてなさせ給ひて、只世にたがひたる事にて、今よりのちも只か

よにうしろめたき　決して御心配になるやうな不料簡はないものとお信じ下さい。

かばかりあながちなる　これ程切なる私の心持を、不便とお察し下さらないのはかひのない事です。

さればこそ　お心持を酌めばこそ以後はお考へ通りに致します。前の一あながちなる心の程もあはれと思し知らぬこそ云々」に應じた詞。

曉の別れや　花鳥引「まだ知らぬ曉おきの別には道さへ惑ふものにぞありける」

山里の　曉方になつて、峯の嵐、籬の虫の音、群鳥の聲、鐘の音、鶏の聲などさま〳〵の聲々を聞くにつけても、哀れの總てが味はれる曉ではある。

鳥のねも　此處は鳥のねも聞えぬ閑靜な奥山だと思つて居りましたのに、憂世の憂さだけは尋ねて來て私を惱ます。

名殘戀しうて　花鳥引「夜もすがら戀しく思ほゆるかな一花の妹が袖名殘

いと斯く思はましかば　從來とても、こんなに戀しく思つたなら、今迄暢氣に（潔白に）過しらば、今日の戀ひしさは未だ經驗しないものであつたの意。

やうにしなさせ給ひて給ひてよ。よにうしろめたき心はあらじと思せ。かばかりあながちなる心の程も、あはれと思し知らぬこそかひなけれ」とて、歸らうとなさる樣子出で給はむの氣色もなし。大君「あさましうかたはならむ」と・・思して、大君「今よりのちは、さればこそもてなしりにも見苦しいでせう給はむままにあらむ。今朝は又聞ゆるに從ひ給へかし」とて、今朝だけは私の申上げる通りにして下さい實にやりきれないいとすべなしと思したれば、薫「あな苦しや。曉の別れや。まだ知らぬ事にて、げに惑ひぬべきを」と歎きがちなり。鶏も、いづ方にかあらむ、ほのかに音なふに、京思ひいでらる。古歌にある通りに

女君、

鳥のねも聞えぬ山と思ひしを世に憂き事は尋ね來にけり

薫が大君を障子口まで送り奉り給ひて、昨夜よべ入りし戸口より出でて、以前の御臥座所に給へれどまどろまれず。昨夜の名殘が名殘戀しうて、いと斯く思はましかば、月頃も今まで心のどかならましやなど、歸らむことも物憂く覺

頼もしき人なくて 力になる人(父母)もなくて頼りなく暮して居る我身もつらいのに。

心よりほかの事 望みもせぬ男と結婚せねばならぬといふやうな事件。

さやうなる心ばへ 薫が望んで來るなら大君を許しても宜しい。

みづからはなほ 自分は矢張此儘獨身で過さう。

人なみ〳〵に 然るべき緣につけて人並に暮させたならば嬉しい事だらう。

人の上になしてば 薫を中君の夫にしたならば、氣のつくだけはお世話しよう、自分の身の上の事は、誰が世話してくれる人があらうぞ。

斯く見馴れぬる かうして長年親しくして來たのに免じて薫に靡く氣にもならうが。

え給ふ。

姫君(宮)は、女房達の手前きまりがわるいので人の思ふらむことのつつましきに、とみにも打臥され給はで(ず)、以下大君の心頼もしき人なくて世を過ぐす身の心憂きを、侍女達もある人どもも、懸想文の取次などをしてよからぬ事何やかやと、次々に(それからそれへと)隨ひつつ言ひいづめるに、心よりほかの事(思ひがけない事の起りさうな世の中のやうに思はれる)ありぬべき世なめり、と思しめぐらすには、この人(薫)の御けはひ有様の、うとましくはあるまじく(う)、故宮(八宮)も、「さやうなる心ばへあらば」と折々宣ひ思すめりしかど(した)、みづから(大君の心)あ(埋木)

たらしげなる中の君(宮)を、人なみ〳〵に見なしたらむこそ嬉しからめ、人の上になしてば(中君)、心の至らむ限り思ひ後見てむ(扱)、みづから(大君自身)の上のもてなしは、又誰かは見あつかはむ、この人(薫の人品が平凡な目立たない)の御さまの(いのであるならば)、なのめに打紛れたる程ならば、斯く見馴れぬる年頃のしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥かしげに見えにくき(薫には氣がひけて夫婦の語らひもしにくいやうに見えるにつけても)氣色も、なか〳〵いみじうつつましきに、(それだけに却て)わが世は斯くて過ぐ

例ならず いつになく大君の方で人の話聲の聞えたのも變だと中君は考へながら寢てゐられた所へ大君が來られたので。「けし」は河内本に「けき」とある。

宿直人がもてあつかひ 橋姫卷三二頁。

まことなるべし 侍女達が薫と大君との仲をささやいて居つたのは事實であらうと。

客人 薫。

御せうそこ 大君への眞面目な口上を辨にいひ殘して薫は歸京された。

總角をたはぶれに 以下大君の心。薫が「總角に長き契りを云々」とよまれた歌を戯言と考へて「ぬきもあへず云々」の返歌をしたことを、こちらから進んで一尋ほどの隔てはあつたにしても思召さうかと大君は大層恥かしいので。「尋ばかり」は催馬樂總角の句。九〇頁。

はか〳〵しう 一周忌の用意をも大君以外にはは(な)き〳〵と世話する人もないのに生憎な御病氣だ。

はかなき事 わけもなくたつた一年の意。

組 名香の組糸。

し果ててむ、と思ひつづけて、(癪立てて泣きがちであつた程に悲しみぬいて明かされたので)ね泣きがちにて明かし給へ(ひこ)る。

に、名殘(も)・いと惱ましけれども、中の君(宮)の臥し給へる奥の方に添(脇息)ひ臥し給ふ。(にうつむきかゝつてゐられる)例ならず人のささめきしけし・きも怪し、と此の君(宮)は思しつつ寢給へるに、斯くて・おはしたれば嬉(中君は)しくて、御ぞ(大君に)引き著せ奉り給ふに、所せき御移香(薫の)の、紛るべくもあらず(添寢の事實歴然として)くゆりかかる心地すれば、宿直人がもてあつかひけむ・おもひ合せられて、まことなるべしといとほしうて、寢ぬるやうにて(中君は)物も宣はず。客人(まらうど)は、辨のおもと呼び出で給ひて、こまかに語らひおき、御せうそこすく〳〵しう聞えおきて出で給ひぬ。總角(あけまき)をたはぶれに取りなししも、(く)るとやこの君もおぼすらむと、いみじう恥かしければ、「心地あし」とて惱み暮し給ひつ。人々、「日は殘りなくなり侍りぬ。(故宮の命日まで餘日もなくなりました)(侍女達)はか〳〵しう(なき事)はかなき事をだに、又仕うまつる人もなきに、折あしき御惱み・・・・・・・・・・かな」と聞ゆ。中の君(宮)、組(くみ)などし果

心葉 飾花で菅麻は金屬製であるが、これは糸を結んで作つたのである。

人づてにぞ 侍女の代筆で御返事なさる。

さも さうまでなさるべきものでないのに。以下は大君が直接返事しない事を侍女達が責める詞。

御服など 周忌がすんで。

片時も 父宮に先立たれては暫くも生きてゐられようとは思つてゐなかつたのに。

月頃黒う 今迄は重服を着馴れてゐられたのを薄鈍色の輕服に着換へられて。

げにいとさかりにて 大君の詞に「我よりはさまかたちもさかりに」（一〇四頁）とあつたのを受ける。

人知れず思ふさまに 自分が内々考へてゐる通りになつて、中君が薫に緣付かれた折、いくら何でも見劣りしたと薫も感じないだらう。

て給ひて、中君「心葉などは、どうしてよいか考へつきませぬえこそ思ひ寄り侍らね」と、大君にたつてせめて依頼されるので聞え給へば、大君は暗くなつて顔の見えなくなつてから暗うなりぬる紛れに起き給ひて、中君と諸共に結びなどし給ふ。薫中納言殿より御文あれど、大君「今朝よりいと惱ましうなむ」とて、人づてにぞ聞え給ふ。女房「さも、見苦し、若々しうおはす」と人々つぶやき聞ゆ。

御服など果てて脱ぎ捨て給へるにつけても、姫君達の心片時もおくれ奉らむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日の程をおぼすに、いみじう思ひのほかなる身の憂さと、泣きしづみ給へる御姉妹のさまども、いと心苦しげなり。月頃黒うならはし給へる御すがた、薄鈍にて、いとなまめかしうて、中の君はげにいとさかりにて、うつくしげなる匂ひまさり給へり。御髪などすましつくろはせて見たてまつり給ふに、世の物思ひ忘るる心地してめでたければ、人知れず思ふさまにかなひて、人に見え給はむに、さりとも近劣りしては思はずやあらむ、と頼もしう嬉しうて、

今は又見讓る人 今では自分以外に中君の世話をまかせる人もないので。

つつみ聞え給ひし 一〇〇頁に大君が「ゆゆしき袖の色など見あらはし給ふ心淺さに」と喪服を口實に薫を拒んだのを受ける。大君が斟酌してゐられた喪服も九月には常服に著換へられる筈だが、それ迄待ちきれなくて八月のうちに來られた。

今は とて脱ぎ捨て 今日を限りと喪服を脱ぎ捨てた折の悲しさに、今迄よりも却つて一層沈みこんで居りまして、お話する事も出來ませぬ。

世に知らぬ心細い生活 他に例もない今の慰めとしては。

思ひかなひ 自分達の希望通りに姫君が薫に緣付かれて、人並に京の住處に引越しなどなさる事を大層結構な事だと相談しあつて。

ただ さつさと。前後を顧みずに。

かう取り分きて 薫がこんなに侍女達を特に人がましく扱ひ手なづけてゐられるのだから、侍女等も薫に氣をゆるして、油斷のならぬ料簡でも持つてゐるかも知れない。

心もてやは 女が男に靡くといふやうな事も、女の一存からする事はないやうだ。皆侍女等の媒によるのだの意。

今は又見讓る人もなく、親心にかしづきたてて見聞え給ふ。中君を

かの人は、つつみ聞え給ひし藤の衣も改め給へらむ長月も靜心なくて、又おはしたり。宇治に例のやうに聞えむと、又御せうそこある前の時のやうにしてお目に懸らうと大君に

に、大君「心あやまりして、煩はしう覺ゆれば」と、とかう聞え氣分がわるくて大儀だから給はずもいかに思ひ侍らむ」と、御文にて聞え給へり。大君「今はとて脱ぎ捨て侍りし程の心惑ひに、なか〳〵沈み侍りてなむ聞えぬ」とあり。薫は不足の持つていき場所もないので辨

恨みわびて、例の人召して、よろづに宣ふ。世に知らぬ心細さの慰めには、この君をのみ頼み聞えたる人々なれば、薫女房達

思ひかなひ給ひて、世の常のすみかに移ろひなどし給はむを、いとめでたかるべき事に言ひ合せて、ただ入れ奉らむ大君の部屋に薫を

と皆語らひ合せけり。姫君、その氣色をば深う見知り給はねど、侍女等が以下大君の警戒侍女等の計畫を

から取り分きて人めかしなつけ給ふめるに打解けて、うしろめたき心もやあらむ、昔物語にも、心もてやは、とある事かも

まして まして私よりも美しい中君の事故。

慰みなむ 怨めしく思ふ心もまぎれるだらう。

言にいでては 假令さうは思つてゐても、口に出してはどうしてそんな事を、待ち構へてゐたやうにひよいと言ふ者があらうぞ。

かたへは それは勿論自分に對する戀の爲だらうが、又一つには、さう言はないと、輕薄なやうに人が思はうかと、それをつまらなく憚つてゐられるのだらう。

思し構ふるを 自分の代りに中君を薫に振向けようと計畫してゐる事を。

世の中を斯く かうした心細い生活で一生を終らうとも、なまなか輕率な考を起して物笑ひになつてはいけない。

おはせし世の 私共は父宮御在世中の御修行にひかれて、手纏なつて御お邪魔をし奉つた罪さへ容易ならぬものだと思ふのに。

一言をだに 父宮の御遺言通り獨身で通さうと思つてゐるのだから、今の有樣でも別に心細くは感じませぬが。

心細くなども 此生活を格別心細いとも思つてはゐませぬものの。

かる事もあめる、打解くまじきは人の心にこそあめれ、と思ひ寄り給ひて、せめて恨み深くば、この君を押し出でむ、劣りざまならむにてだに、さまじき心なめるを、まして、ほのかにも見そめてば、慰みなむ、言にいでては、いかでかはふとさる事を待ち取る人のあらむ、本意になむあらぬと、承け引く氣色のなかンなるは、かたへは人の思はむ事を、あいなう淺き方にやなどつつみ給ふならむ、と思し構ふるを、氣色だに知らせ給はずば、罪もや得む、と身をつみていとほしければ、よろづに打語らひて、「昔の御おもむけも、『世の中を斯く心細うて過ぐし果つとも、なか〳〵人笑へにかる〳〵しきし心つかふな』など宣ひおきしを、おはせし世の御ほだしにて、行ひの御心を亂りし罪だにいみじかりけむを、今はとて、さばかり宣ひし一言をだにたがへじと思ひ侍れば、心細くなども殊に思はぬを、この人々の、怪しう心ごはきも

げにさのみ 女房達のいふ通りあなた迄が私と同樣に獨身で通されるのも如何なものでせう。

君だに せめて貴女だけでも人並に結婚されて。

斯かる身の有樣も 私のやうな者までも面目を施して氣の晴れる程貴女を仕立てあげたいものです。

一所をのみやは 父宮は姉君お一人だけ左樣に獨身で通せと御遺言遊ばしたのでせうか。

かう朝夕に かうして朝夕姉君と御一緒に暮すより外の事は何むいてもいませぬ。

御慰めには 大君の詞に「慰むばかり見奉りなさばや」とあるのを受けて、姉上の御慰めには

なほこれかれ といつたのである。それでも矢張侍女達が私をいやなねくれ者のやうに嘆したり思つたりしてゐるらしいので、考へがまちがつていくのです。

客人 薫。

姫君 大君。

御せうそこども 薫の口上を取次いで、薫のお恨みも御尤もだといふ事を詞を盡して申上げるので。

惑のに憎むめるこそ、いとわりなけれ。げにさのみ、やうのものと過ぐし給はむも。明け暮るる月日に添へても、御事をのみこそあたらしう心苦しうかなしきものに思ひ聞ゆるを、君だに世の常にもてなし給ひて、斯かる身の有樣もおもだたしく、慰むばかり見奉りなさばや」と・・聞え給へば、いかに思すにかと心憂くて、「一所をのみやは、さて世に果て給へとは聞え給ひけむ。はか〳〵しくもあらぬ身のうしろめたさは、數添ひたるやうにこそ思されためりしか。心細き御慰めには、かう朝夕に見奉るより、いかなる方にか」と・、なま怨めしく思ひ給へれば、「げにといとほしうて、「なほこれかれ、うたてひが〳〵しきものに言ひ思ふべかめるにつけて、思ひ亂れ侍るぞや」と、いひさし給ひつ。

暮れゆくに、客人は歸り給はず。姫君いとむつかしと思す。辨參りて、御せうそこども聞え傳へて、恨み給ふをことわりなる

いかにもてなす どう處置すべき我身なのだらう。

宿世といふなる 運命といふものにまかせてわが思ふまゝになるらぬこの世だから、物笑ひも、世間あるやうな間違ひがあつても、世間にもならないですむ。後攫戀五二にいなせともいひ放たれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり

似つかはしげなる 薫との仲は似合ひの緣だなどといひ聞かしてくれるけれども、それが果して信頼するに足る事だらうか。

ただ一方に 只一面だけを見ていふに過ぎない。

今すこし 大君よりも一層不案内で初心で、一向話の相手にならうとなさらないから。

怪しうも 妙な運命に生れた我身だと。

ただ奥ざまに 人と口をきかないやうに。

例の色の御ぞ 喪服を脱いで常服に着換へ遊ばせ。

げに何のさはり所かは 大君を保護してくれる筈の辨などまで薫が薫方になつたのだから、大君に逢はうと思へば何の邪魔物があらうぞ。

由を、つぶ〳〵と聞ゆれば、いらへもし給はず、打歎きて、いかにもてなすべき身にかは・・、一所おはせましかば、ともかくけて・・、身を心ともせぬ世なれば、皆例のことにてこそは人笑へなる咎をも隠すなれ、ある限りの人は年積もり、さかしげにおのがじしは思ひつつ、心をやりて、似つかはしげなる事を聞き知らすれど、こはいかゞ〳〵しき事かは、人めかしからぬ心どもにて、ただ一方に・・いふにこそは、と見給へば、引き動かしつばかり聞えあへるも、いと心憂く疎ましうて、動ぜられ給はず。同じ心に何事も語らひ聞え給ふ中の君は、斯かる筋には、今すこし心も得ずおほどかにて、何・とも聞き入れ給はねば、怪しうも・ありける身かなと、ただ奥ざまに向きておはす。女房・・

例の色の御ぞども奉りかへよ」など、そそのかし聞えつつ、皆薫にあはせる工面をしてゐるらしい樣子を見てさる心すべかめる氣色を、あさましく、げに何のさはり所かは・

程もなくて 狹くてこんな住居ではかくしてもどうにもならず。六帖六・萬葉十四一世の中を憂しといひてもいづくにか身をばかくさむ山梨の花」

客人は 薫は、最初は、大君との仲を表立つて誰彼にこんなに口入れさせないで、こつそりと、いつにしたいと思つてゐたのだから。

さはいへど 辨などは然るべき人故姫君達も後見として信頼してゐたのだが、それでも矢張侍女は侍女だけに考が淺いのか。

いとほしくぞ することなすことが間違つてゐて、氣の毒なやうに見える。

人に似ぬ 薫の親切は普通の若い人の親切とは違ふのだ。

世に人めきて 人並の生活をして(夫を持つて)居りたい自分であるなら。

されど昔より けれども私は最初からさういふ事は斷念してゐるので大層心苦しいのに。

あらむ、程もなくて、斯かる御すまひのかひなき・・・、山梨の花ぞのがれむ方なかりける。客人は、斯く顯證に、これかれにも口入れさせず、忍びやかに、いつありそめけむ事ともなくもてなしてこそ、と思ひそめ給ひける事なれば、薫御心許し給はずば、いつまでも此儘でゐようく斯くて過ぐさむ」と思し宣ふを、この老人の、おのがじし語らひて、顯證にささめきなどす。さはいへど、深からぬけにや、老いひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫君からぬいとほしくぞ見ゆる。姫君

おぼし煩ひて、辨が參れるに宣ふ。大君年頃も、人に似ぬ御心寄せとのみ宣ひわたりしを聞きおき、今となりては、よろづに殘りなく頼み聞えて、怪しきまで打解けにたるを、思ひしにたがふさまなる御心ばへのまじりて、恨み給ふめるこそわりなけれ。世に人めきて・あらまほしき身ならば、斯かる御事をも、何かはもて離れても思はまし。されど昔より思ひ離れそめたる心にて、いと苦しきを、この君のさかり過ぎ給はむも口惜しげに、

斯かるすまひも　かうした山莊生活も只中君お一人故に自由な事も出來るやうに思はれるものを、薫が眞に父宮との舊情をお思ひ下さる御親切ならば、中君を私と同じに考へて結婚して戴きたいものです。

なほかやうに　猶以上のやうに然るべく薫にお傳へ下さい。

あるべきさまを　大君が自分の希望する所を具さに語るので。

さのみこそは　句を隔てて「いとよく聞えさすれど」に續く。私も以前からそのお心持を心得て居りますので、その通り頻りに薫に申上げてゐるのでございますが。

兵部卿の宮の　私が中君と結婚するから、中君は一層深く恨まれる句宮から句宮に媒して私が十分に申さう。お世話申さう。

二所ながら　御兩親樣が御存命で格別に深く御心配遊ばしてお世話なさいますのであつたら。

えしも斯く　とても斯うした世にも稀な結構な二組の御緣が同時に成りたつといふ事はございますまい。

のちの御心は　薫が將來どう御變心になるか知りません。今の所では結構なお二人とも仕合せな御運命だと私は存じます。

斯かるすまひも、只この御ゆかり・・に所せくのみ覺ゆるを、誠に昔を思ひ聞え給ふ・志ならば、同じことに・思ひなし給へかし。身を分けたる心のうちは皆讓りて、見奉らむ心地なむすべき。なほかやうによろしげに・聞えなされよ」と、恥ぢらひたるものから、あるべ・・きさまを宣ひ續くれば、いとあはれと見奉る。「さのみこそは、さきく〳〵も御氣色を見給ふれば、いとよく聞えさすれど、『さはえ思ひ改むまじき・。兵部卿の宮の御恨み・深さまさるめれば、又そなたざまに、いとよく後見聞えむ』となむ聞え給ふ。それも思ふやうなる御事ども・なり。二所ながらおはしまして、殊更にいみじき御心・盡して、かしづき聞えさせ給はむには、えしも斯く世にありがたき御事ども、さしつどひ給はざらまし。かしこけれど、かくいとたづきなげなる御有樣を見奉るに、いかになり果てさせ給はむと、うしろめたう悲しうのみ見奉るを、のちの御心は知りがたけれど、うつくしくめでたき御宿世どもにこそおはしましけれとなむかつがつ思ひ聞ゆる。故宮の御遺言たがへじと思召すかたはことわりなれど、それはさるべき人のおはせず、品程ならぬ事やおはしまさむと思して、誠め聞えさせ給ふめりしにこそ・・・・。『こなの殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば、一所をうしろやすく見おき奉りて、いかに嬉しからまし』と、折々宣はせしものを、程々につけて、思ふ人におくれ給ひぬる人は、高きもくだれるも、心のほかに、あるまじきさまにさすらふ・たぐひだに・こそ多く侍るめれ。それ皆例のことなめれば、もどきいふ人も侍らず。まして斯くばかり殊更にも作り出でまほしげなる人の御有樣に、志深うありがたげに聞え給ふを、あながちにもて離れさせ給ひて、おぼしおきつるやうに、行ひの本意を遂げ給ふとも、さりとて雲霞をやは」など、すべて言・・・・多く申し續くれば、いと憎く心づきなく・思して、ひれ臥し給へり。中

故宮の御遺言　椎本卷に「おぼろげのよすがならで人のことに打靡き、この山里をおくがれ給ふな」とあつた。五八頁。

品程ならぬ事や　身分の釣合はぬ緣組でもなさりはせぬかと父宮が御懸念あつて。

程々につけて　身分に應じて。「あるまじきさまにさすらふ」を修飾する。

思ふ人　愛してくれる人。此處は親の事。

おぼしおきつる　御決心通りに出家の望みをお遂げになつたにしても、雲や霞を住居としてゐる譯にはいけません。在原業平「そむくとて雲にはのらぬものなれど世の憂き事ぞよそになるてふ」によつて書いてある。

うしろめたう 辨などがどんな事をしようか（薫を導き入れはせぬか）不安の事だとは思召すものの、わざ〳〵引籠り隱れる故。に都合よき物蔭もないお住居

なよよかにをかしき…**まろびのきて** 薫が來たら中君に讓つて遁れ出ようとの用意。

いかなれば どうして大君はこれ程まで世の中を見限つてゐられるのだらう、聖僧めいた八宮のお側で成長されて、この世を無常なものと悟られた爲だらうか。

いとどわが心に 薫もも〳〵と道心深い人であるからである。

さかしだち 薫は大君の態度をかしこぶつてゐるとも憎いとも感じない。

さらば物越などにも では大君は几帳などを隔てて逢ふ事さへは今では以ての外なる事と思つてゐられるのですね。

心して 事情を心得てゐる人々はその積りで他の女房達を早く寢かせたりなどしてその工面する。

の君（宮）も、餘りにもあいなくいとほしき御氣色かな、と見奉り給ひて、諸大君と中君と共に例のやうに大殿籠りぬ。大君の心うしろめたういかにもてなさむ、と覺え給へど、殊更めきてさしこもり、隱ろへ給ふべき物の隈だになき御すまひなれば、柔かな美しい御衣をなよよかにをかしき御ぞ上に引き著せ奉り給ひて、まだけはひ暑き程なれば、八月故どこやら暑さのある時すこしまろびのきて臥し給へり。

辨は、大君のお詞を薫に宣ひつるさまを客人に聞ゆ。以下薫の心いかなれば、いとかうしも世を思ひ離れ給ふらむ、聖だち給へりし八宮のあたりにて、常なきものに思ひ知り給へるにや、と思すに・も、薫のいとどわが心に・似通つてゐる通ひて・やうな氣がするので覺ゆれば、さかしだち憎くも覺えず。薫、さらば物越などにも、今はあるまじき事におぼしなるにこそはあなれ。今宵ばかり、大君の大殿籠るらむあたりに・も、忍びてたばかれ」と宣へば、心して人疾くしづめなど、辨など心知れるどちは思ひ構ふ。宵すこし過ぐる程に、風のおと・こと・荒らかに打吹くに、粗末なはかなきさまなる蔀

ひし〳〵と 蔀がざし〳〵鳴る音と薫の足音と紛れて聞き分けられないのである。

常のことなれば 姉妹の姫君はいつも同室に寢てゐられるのだから、今晩だけ別室にとはどうして申上げられようぞ。

御けはひをも 大君と中君との御樣子を混同しないやうにはつきり薫が知つてゐられるものと辨は思つてゐたのだが。

いかにするわざぞと どうしたものかとひや〳〵して。

さもえ立ちかへらで 中君を起しに引返す事もならず、ふるへ〳〵薫の樣子を見てゐられると。

袿姿 うちき姿。袿のみ著て上に直衣や狩衣などを著ぬ姿。

入りぬるを 一入り給ひぬるをといふべきところを敬語を省いて書いたのはその行爲を非難する記者の例の用意である。

いかに覺え給はむ 中君が目をさまして薫の來られた事を知つたら何と思はれる事だらうと心配はしながらも。

あらましごとにてだに 大君が中君を自分の代りに薫に緣づけたいと言はれただけでも中君は姉君を恨んでゐられたのに。

などは、ひし〳〵と紛るるおとに、薫の忍んで來られる足音を大君は聞きつけなさるまいと辨人の忍び給へる振舞は、えは思つて聞きつけ給はじと思ひて、やをら導（薫を）き入る。大君と中君とが同じ所に大殿籠れるを、うしろめたしと思（辨は）へど、常のことなれば、ほか〳〵にともいかが聞えむ。御けはひをもたど〳〵しからず見奉り給へつ・らむと思ひけるに、大君はうちもまどろみ給はねば、薫の足音をふと聞き・つけ・給ひて、やをら起き出で給ひぬ。大君はいと疾く這ひ隱れ給ひぬるに、中君が何も知らずに何心もなく寢入り給へるを、大君が中君を氣の毒がつていといとほしく、いかにするわざぞと胸つぶれて、・かねて思ひ渡る心も忘れておどろかしても・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・諸共に隱れなばやと思へど、さもえ立ちかへられで、わななくわななく見給へば、火のほのかなるに、袿（薫は）姿にて、いと馴れがほに、几帳の帷子（かたびら）を引きあげて入りぬるを、大君の心に中君が氣の毒でいみじういとほしく、いかに覺え給はむ（ふ・ら）と思ひながら、粗末なあやしき壁のつら（もと）に、屏風を立てたるうしろの、むさくろしい所にむつかしげなるに居給ひぬ。大君があらましごとにてだに、中君が大君を立てたるうしろの、むつかしげなるに居給ひぬ。あらましごとにてだに、つらし（こ）と思ひ給へ・る・を、今こんな事をしてまいていかに珍らしい仕打と珍らかに

一人臥し給へるを　薫は中君とは氣づかず、大君一人寝せてあるものと嬉しく思つて。人違ひであつたと氣づく。

あらざりけりと

今すこしうつくしく　大君よりもうすこし愛らしく可憐な點はまさつてゐるかとも薫には思はれた。

げに心も知らざりけり　成程中君は何も事情を知らなかつたのだと薫には思はれるので。前に「何心もなく寝入り給へるを」とあるのを受けて「あの寝ざまの示してゐるとほり」といつたのである。意味で「げに」といつたのである。事情を知つてゐれば起きてゐる筈だからである。

なほ本意のたがはむ　大君を思ひ込んだのに、それが出來ずに偶然中君に逢ふやうな事情になつた事を殘念がるのである。

邂逅に宿世のがれずば　結局免れぬ緣ならば、中君と結婚しても要するに大君と同じことだ。

に思し疎まむと、大君の心にいと心苦しきにも、すべてはかく〳〵しき後見なくて落ちとま・・・る身どもの悲しきを思ひ續け給ふに、今は八宮が阿闍梨の寺へとて山にのぼり給ひし夕べの御さまなど、只今の心地して、いみじく戀しく悲しく覺え給ふ。

薫中納言は、中君が一人臥し給へるを、・・・心しけるにやと嬉しくて、心ときめき・・し給ふに、次第にやう〳〵・・・・・・・・・・・・あらざりけりと見る。・・・・・・・・・・・・今すこしうつくしくらうたげなる氣色は、中君の方がまさりてやと覺ゆ。中君があまりあさましやはは、と思ひさまして、例のをかしくなつかしきさまに語ら

熱する心を

薫が中君

いといとほしくもあり、又押返して隱れ給へらむつらさの、まめやかに心憂くねたければ、中君をも他人のものにしてしまふ氣にはなれないがこれをもよそのものとはえ思ひ離れまじけれど、矢張最初の目的の齟齬するのが殘念でなほ本意のたがはむ口惜しくて、現金な淺い心であつたのだとうちつけに淺かりけりとも覺え奉らじ・・、今中君に逢ふ事はやめておいてこの一ふしはなほ過ぐして、遂に宿世・のがれずば、こなたざまにならむも、何かは他人のやうにやは、と思ひさまして、例のをかしくなつかしきさまに語ら

こちらの裏をかいて隱れてしまはれたつれなさが心からつらくもありいまく

ひて・明かし給ひつ。辨等老人どもは、しそ・じつと思ひて、辨等「中の君はいづこにかおはしますらむ。怪しきわざかな」とたどりあへり。辨等「さりとも、何か子細があるやうあらむ」などいふ。女房達はあゝだらうかうだらうかと想像しあつてゐる大方例の見奉る・・・・・・・・・・・・に、老いの薫の御かたち有様を、などていとも離れては聞え給ふらむ、何か、外でもないこれは世の人のいふめる、怖ろしき神・・・・・・・・・・・・ぞつき奉りつらむ」と、老婆故齒はうちすきて、愛敬なげに言ひなす女・あり。

以下薫の美しさをいふ

又、「あなまが〳〵し、緣起でもないなぞの物かつかせ給はむ。只、人に遠くて生ひ出でさせ給ふめれば、斯かる事にも、つき〳〵しげにもてなし聞え給ふ人もなくおはしますに、大君がはしたなく思さるるにこそ。今おのづから見奉り馴れ給ひなば、大君が薫に馴染まれたらお好きになられる事でせうなど語らひて、「疾く打解けて、思ふやうにておはしまさなむ」・といふ〳〵寝入りて、いびきなど、傍痛くするもあり。

大君が薫に

逢ふ人からにしもあらぬ秋の夜なれど、程もなく明けぬる心地、

薫には

明かし給ひつ　まだ實際は明けて居らないが、其夜は其儘何事もなくて明けたと、豫て結果を敍したのである。

しそじつ　「し損じつ」である。薫が寝物語の樣子もなく、例の調子で一夜語りつぢけてゐるのを聞いて、辨等はやりそこなつたと語つたのである。「併し話相手は大君と思つてゐるのでそれにしても中君はどこに行かれたのだらう不思議なことだ」と話しのあつたのである。

などていともて離れては　大君はなぜ薫を嫌つていらつしやるのだらう。

怖ろしき神ぞ　細流「世俗の諺に、嫁すべき時過ぬれば神のつくと也」

斯かる事にも　男女方面の事にも然るべく取りなしてあげる人がないので、きまりわるく思召すのです。

思ふやうにて　自分達の念願通り夫婦になつてほしい。

逢ふ人からにしも　逢ひたいと思ふ相手（大君）ではないから長くさうな秋の夜だが。古今戀三「長しとも思ひぞ果てぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば」

人やりならず 思ひ通りにしようと思へばなるのに自らさし控へて居つたのであるから、物足りないのも人のせいではないがと書いたのである。

後瀬 後の逢ふ瀬。

中の君はいづくにか 辨は其處にゐるのが中君であるとは氣づかずにいふのである。

いと恥かしく 「思ひ臥し給へり」を修飾する。

いかなりけむ では薫は大君を目ざして來られたのらしい。人違ひだつたのかしら。

昨日宣ひしことを 一〇八頁の大君の詞。

壁のなかの蟋蟀 壁際に隱れて居た大君。孟津抄、月令「蟋蟀居壁」

ゆかしげなう 中君の姿を薫に見られて、隱れた奥ゆかしさのなくなる事を歎くのである。みんな見られてしまつてつらい事だ、これから後も油斷のならぬ人生だ、と大君は思ひなやんでゐる。女房達の仕業に警戒されるのである。

あさましかりける 大君が强ひて逢はなかつたその呆れた强情を。

して、いづれと分くべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心地して、薫「あひ思せよ。いと心憂くつらき人の御さま、見ならひ給ふなよ」など、後瀬を契りて出で給ふ。我ながら怪しく夢のやうに覺ゆれど、なほつれなき人の御氣色、今一度見果てむの心に思ひのどめつつ、例の出でて臥し給へり。辨參りて、「いと怪しく。中の君はいづくにかおはしますらむ」といふを、中君は「いと恥かしく、思ひかけぬ御心地に、いかなりけむ事にかと思ひ臥し給へり。昨日宣ひし事を思し出でて、姫君を仕業と誤解してつらしと思ひ聞え給ふ。明けにける光につきてぞ壁のなかの蟋蟀・這ひ出で給へる。思すらむことのいといとほしければ、かたみに物もいはれ給はず。ゆかしげなう・・・心憂くもあるかな、今よりのち、心ゆるびすべくもあらぬ世にこそ、と思ひ亂れ給へり。

辨はあなたに參りて、あさましかりける御心强さを聞きあらはして、いとあまり深く人憎かりける事と、いとほしく思ひほれ・居たり。薫「きし方のつらさは、なほ殘りある心地して、よろづに思ひ慰めつるを、今宵なむ誠に恥かしく・、身も投げつべき心地する。捨てがたく落しおき奉り給へりけむ心苦しさを思ひ聞ゆる方こそ、又ひたぶるに身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけ〳〵しき筋は、いづかたにも思ひ聞えじ。憂きもつらきも、かたく〳〵に忘られ給ふまじくなむ。宮などの、恥かしげなく聞え給ふめるを、同じくは・高くと思ふ方ぞ殊に物し給ふらむと心得果てつれば、いとどことわりに恥かしくて、又參りて人々に見え奉らむこともねたくなむ。よし、斯くをこがましき身の上、又人にだに漏らし給ふな」とゐんじおきて、例よりも急ぎ出で給ふ・。女房等「たが御爲・もいとほしく」とささめきあへり。姫君も、「いかにしつる事ぞ・、もしおろかなる心も物し給はば、と胸つぶれて心苦しければ、すべてうちあはぬ人々のさかしら

きし方のつらさは 大君の今迄の餘地があるやうな氣がして、萬事につけて諦めて居つたのですが。

捨てがたく 八宮が姫君を捨てなければ難く思召して死なれたお氣の毒な御心情をお察し申すと、私も一圖に身を捨てる譯には參らぬやうだ。

かけ〳〵し 懸想と解いてよさそうな語である。但し椎本に慎み深い大君が薫にむかつて話される直話の中に言はせてあるのを見ると、懸想といつては露骨すぎるやうである、主として男女關係についていふ語のやうではあるが。

憂きもつらきも 大君に拒絶されたつらさといひ、どちらも忘れいる事は出來ますまい。「忘れ給ふ」は自敬の叙述。

恥かしげなく 匂宮は好色には馴れてゐるから、多分恥かしげもなく大君を口說かれた事と思ひますのに。

同じくは高くと 同じ事なら高く構へて別の考がありたいと合點しましたので、それも當然と一層恥かしくて。

たが御爲も 姫君達にも氣の毒。薫に恨まれる姫君達にも氣の毒。

いかにしつる事ぞ 一體どうしたのだらう。女房達の計劃を咎めた言葉。

もしおろかなる もし薫から冷淡にされたら何としよう。

例よりは嬉しと　薫が怒つても手紙もくれないかと心配してゐたのだから。

かつは怪しで　我とわが矛盾した心持を疑ふのである。

同じ枝を分だけ　同じ一本の枝を山姫は一部分だけ染めて紅葉せしたもの。わざ〳〵染めた紅が深い色か、染めない絲が深い色か山姫に聞いたい。その姫は己れと答へるだけ染めたい紅葉を見たい。色とれは深い意で、私は己れを深く思ふといふ意を表明したもの。これを薫に對する大君の意向を尋ねたものと解く説が宗祇以來多くあるが、季吟がいつてゐるやうに、返歌と合せ考へてもの無理のやうで云々と出來ない。

御返りといへば　「思ひ亂れ給ふ」と修飾する。御返事をあげなさいと中君に讓るのも變な氣がして。

さすがに　自分で書かうと決心はしたものの。

山姫の　一部分を紅に染め分けた山姫の意向は分りませんが、とにかく紅に色づいた方が即ちすると御志が深いのでせう。何事もない風を

ことなしびに　

いとほしく　大君がお氣の毒である。

とかく言ひ傳へなど　辨は取次をするらしいから自分が大君にはねられ通しであるし、自分も能く知つてゐるだらう、それにもかゝはらず言ひよる自分の態度を輕々しいと思ふだらう。

とにかくに　せめて大君に懸想しなかつたらとそれさへ何かと後悔の種になつて。

かばかりの世の中を　憂世を斷念しようと決心したのだ。

これ程　自分がらそれでありながら、自分なのだ。

同じあたりに　同じ女にいつまで出來なかつたのだ。

近くては　六條院には包宮の曹司もあつて、薫の曹司と程近いから、薫は始終包宮方を訪ふのである。

三條の宮　もと女三宮の御殿で薫もそこに居たのであるが女三宮と共に六條院に引越したのである。

紛ることなく　包宮の御住居のさまを見ての薫の感じ。

を、憎しとおぼす。（大君が）さま〳〵・思ひ・給ふに、（薫から）御文あり。例（大君）の心によりは嬉しと覺え給ふも、かつは怪し。秋の氣色も知らずが（文は時節の草木の枝に結びつけるのである）包み文にしてあるさては昨夜の事は有耶無耶に葬つて中君の事は思ひ切らうといふ薫の御料簡なのだらうと思ふにつけても（大君は）へるを、そこはかとなくもてなしてやみなむとなめりと見給ふも、心さわぎて、耳かしかましう、「御返り」・・・・・といへば、「聞え給へ」・と讓ら・むもうたて覺えて、さすがに書きにくく思ひ亂れ給ふ。

山姫の染むる心は分かねどもうつろふ方や深きなるらむ

ことなしびに書き給へるが、をかしく見えければ、なほえゑん

じ果つまじく覺ゆ。

身をわけてなど、讓り給ふ氣色は度々見えしかど、承け引かぬ

にわびて、構へ給へるなめり、そのかひなく、斯くつれな

からむもいとほしく、なさけなきものに思ひおかれて、いよい

よ初めの思ひかなひがたくやあらむ、とかく言ひ傳へなどすめ

る老人の思はむところもかろ〳〵しく、とにかくに心を染めけ

むだにくやしく、かばかりの世の中を思ひ捨てむの心に、みづ

からも、かなはざりけりと人わろく思ひ知らるるを、ましてお

しなべたるすき者のまねに、・・・・同じあたりに返す〳〵漕

ぎめぐらむ、いと人笑へなる棚無し小舟めきたるべし、など、

よもすがら思ひあかし給ひて、まだ有明の空もをかしき程に、

兵部卿の宮の御方にまゐり給ふ。三條の宮燒けにしのちは、六

條の院にぞ移ろひ・・・給へ・れば、近くては常に參り給ふを、

宮もおぼすやうなる御心地し給ひけり。紛ることなく、あら

ましき御すまひに、お前の前栽・、ほかのには似ず、同じき

花の姿も、木草の靡きざまも殊に見なされて、遣水に澄める月

の影さへ、繪にかきたるやうなるに、思ひつるもしるく、起き

吹きくる匂ひ　風に漂ってくる薫の匂ひ。

ふとそれと　直に薫の來訪と宮は氣づかれて。

階　匂宮の曹司の前の階段。

勾欄に　匂宮が簀子で月を見てゐられたので奥の間にも入らないでその儘話されたのである。

よろづに恨み給ふ　匂宮の目的の達せられないのは薫の媒に誠意が足りないのだと恨まれるが、それは薫に取つて迷惑な事だ。

みづからの心にだに　大君を手に入れかねてゐる事。

さもおはせなむ　匂宮と中君との間が纏まるやうにと思ふ子細があるので。

必ずおくらかし　私を置きざりにせずに屹度宇治につれて行つて下さい。

女郎花　姫君達のそばに人を寄せつけないやうにして、狭量にもあなたは獨占してゐられるのでせうか。

(て)・おはしましけり。風につきて吹きくる匂ひの、いとしるく打ち薫であることも明かにかをるに、ふとそれと・驚かれて、御直衣奉り、みだれぬさまに引き繕ひて出で給ふ・。階をのぼりも果てずついゐ給へれば、「なほうへに」なども宣はで、勾欄に寄り居給ひて、世の・中の御物語聞えかはし給ふ。かのわたりの事をも・、物のついでには・思しいでて、よろづに恨み給ふもわりなしや。みづからの心にだにかなひがたきを、と思ふ〳〵、さもおはせなむと思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかに、あるべきさまなど申し給ふ。明けぐれの程、あやにくに霧りわたりて、空のけはひ冷かなるに、月は霧に隔てられて、木の下も・暗くなまめきたり。山里のあはれなる有様・・・・思ひいで給ふ。宮、「此頃の程に、必ずおくらかし給ふな」と語らひ給ふを、なほ煩はしがれば、女郎花咲ける大野を防ぎつつ心せばくやしめを結ふらむとたはぶれ給ふ。

霧深き　宇治の姫君達は愛情の篤い人でなければ逢ふ事は出來ませぬ。「霧深きあしたの原」は容易に見ることの出來ないといふ意。

なべてやは　並一通りの愛情では逢はす事は出來ませぬ。

あなかしかまし　古今俳諧「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしかまし花も一とき」。

年頃斯く　匂宮が年來斯く取持を頼まれるけれども。

何事も口惜しくは　何事にも遺憾な點はなささうだと薫は思召すので。

いとほしく　お氣の毒にも大君が氣をもんで。

さはたえ思ひ改む　と言つて自分はその通り中君に思ひかへる事は出來ないやうに思はれるので。

いづ方の　姫君からも匂宮からも恨まれまいと。

心せばく　匂宮を宇治へ案内しないのは薫の狭量故と解釋してゐられるのも。

例のかろらかなる　あなたはいつも浮氣な性分ですから、中君に苦勞させるのが氣の毒です。

かの御心ども　姫君達のお考では、あなたの本心を知つて厭きさうな樣子は見えませぬ。

「霧深きあしたの原の女郎花心を寄せて見る人ぞ見る」

なべてやは」などねたまし聞ゆれば、「あなかしかまし」と、果て〳〵は腹立ち給ひぬ。年頃斯く宣へ・・・ど、人の御有様を、いかならむとうしろめたく思ひしに、かたちなども、見おとし給ふまじく推し量らるる心ばせの、近劣りするやうもや、などぞ危く思ひわたりしを、何事も口惜しくは物し給ふまじか・め・りと思へば、かのいとほしくうちく〳〵に思ひたばかり給ふ有様も、たがふやうならむも、なさけなきやうなるを、さりとて、さはたえ思ひ改むまじく覺ゆれば、まづ讓り聞えて、いづ方の恨みをも負はじ、など下に思ひ構ふる心をも知り給はで、心せばく・取りなし給ふもをかしけれど、「例のかろらかなる御心ざまに、物思はせむこそ心苦しかるべけれ」など、親がたになりて聞え給ふ。「よし見給へ。かばかり心にとまる事なむまだなかりつる」など、いとまめやかに宣へば、「かの心どもには、

彼岸のはて 行幸卷にも「十六日彼岸の初めにて、いとよき日なりけり」とあつて、彼岸の初日と最後の日とは何事をなすにも特によき日とされて居つた。

后の宮 匂宮の御母明石中宮。

さりげなく 人目につかぬやうにと工夫するのも一通りの事ではない。

船渡りなども 宇治川の對岸に渡るのもうるさいので。

御庄おはしぬ 薫の莊園。

宿直人 薫から衣裳を貰つた例の宿守。宿は家の外をうろうろしてゐる、その宿守にも。

經營し 山莊の人々が奔走してゐる。

移ろふかた異に 中君の方へ思ひかへて下さるやうに薫に仄めかしておいた事故安心だと大君は思召す。

思ふ方異なめり 薫の思召は姉君の方にあつたやうだから、いくら何でも自分は安心だと思ひながらも。

匂宮の言葉は本當かもしれないとさもやと打靡きぬべき氣色は見えずなむ侍る。仕うまつりにくき宮仕にこそ侍れ・や」とて、宇治へ行かれる上の注意などおはしますべきやうなど、こまかに匂宮に聞え知らせ給ふ。

二十六日・の、彼岸のはてにて、よき日なりければ、薫は人知れず心づかひして、いみじく忍びてゐて奉る。匂宮を宇治へ后の宮など聞召しいでては、斯かる御ありきいみじく制し聞え給へば、いと煩はしきを、匂宮が是非にと希望してゐられる事故せちに思したることとなれば、さりげなくともてあつかふもわりなくなむ。船渡りなども所せければ、大層だから事々しき御宿りなど川の此方の對岸には立派な宿りもあるがも借り給はず、その此方のわたりいと近き御庄の人の家に、いと忍びて宮をば車からおろし奉り給ひて、おはしぬ。匂宮を同行しても目をつけるやうな人も見咎め奉るべき人もなければ、宿直人は、わづかに出でてありくにも、宿守に樣子を知らせまいとの氣色知らせじと心遣ひであらうなるべし。例によつて薫の御人來の例の、「中納言殿おはします」とて、經營しあへり。姫君達はそれを聞いて多少迷惑に思はれたが君だちなま煩はしく聞き給へど、移ろふかた異に匂はしおきてしかば、と姫君はおぼす。中の君は、思ふ方異なめりしかば、

ありしやうに 中君は大君が薫を導き入れたものと勘違ひしてゐるのであるから。

御せうそこのみ 取次の口上だけで姉妹の姫君達が對面なさらぬので。

ここもとに 私に於て大君に只一言申上げねばならぬ事がありますが。

ひたやごりにて ひつこみきりにしてゐる事も出來ないのだもの。

ありしさまには これだけでは誰に逢はうとしてゐるか判然しないが後に「思ひ移りにけり」とあるにて中君にと申出たことが分る。

いづ方にも 大君に手引するのも中君に手引するのも同じ事だ。

かの入り給ふべき 中君の部屋への通路ではない廂の間の襖を固く錠をおろして大君が薫に對面された。

又人聞く 他人に聞える程の大きな聲で話すのもおもしろくないのに。襖などしめては自然大聲で話さなければならぬの意。

斯くても 襖を締めておいても話はよく聞えよう。

さりとも、と思ひながら、薫の忍びこんだ事のあつてからは心憂かりしのちは、以前のやうにありしやうに姉君をも思ひ聞え給はず、用心して心おかれて物し給ふ。何やかやと御せうそこのみ聞えかよひて、いかなるべき事にか・と、女房達人々も心苦しがる。匂宮宮をば、御馬にて、暗き紛れにおはしまさせ給うて、匂宮を山莊に薫「ここもとに只一言聞えさすべき事なむ侍るを、私を嫌つてゐられる事が分りましたのでおぼし放つさま見奉りてしに、いと恥かしけれど、ひたやごりにて・えやむまじきを、今暫し更かしてを、先達と同じやうに中君の所にありしさまには辨の心隔心なく頼まれるのでうらもなく語らひ給へば、いづ方にも辨が大君方へと思ひて參りぬ。薫の詞を大君にさなむと聞ゆれば、大君心されば自由にはひれるやうに構へたのであるり給ふべき道にはあらぬ・・廂の障子を、いとよくさして、對面・し給へり。薫「一言聞えさすべきが、又人聞くばかりののし。らむはあやなきを、聊かあけさせ給へ。いといぶせし」と聞え給へど、大君「斯くても・・・いとよく聞えぬべし」とてあけ給はず。今

今はと 薫がいよ〳〵中君に乗換へる事を氣がすまないやうに思つてその旨を斷るのだらうか、いやなあに、今始めての對面でもなし、無愛相な返事はしないで、快くあつて、早く中君の方へ行かしめよう。

障子のなかより 細流抄に障子のはざまとあるは、襖のすきまから襖の中の袖を引張り出したのである。

何に聞き入れ 何で對面を承知した事だらうと。

他人と 中君を自分と同樣に思つて下さるやうにとそれとなく話される大君のお心持などは、心を打つものがある。

宮は 匂宮は薫の敎へた通りに先夜薫が忍び入つた戸口に立寄つて。

導き聞ゆ 匂宮とは氣づかず薫と思つて。

さき〳〵も 今迄始終辨がかうしなれてゐるのだなと匂宮は薫を導き腹の中で笑ひながら入つてゆかれたのを大君はさうとは御存じもなく。

うち〳〵に 後日になつて匂宮は事情を敎はつてもゐなかつたといふ恨みを大君から受けるであらうが、その場合にも申開きのやうに思はれるに違ひなつかないから。

宮の 匂宮が私と一緒に來ようと仰しやつたので、いやともいへずに。

大君の心はと移ろひなむ・・・・を、ただならじとて言ふべきにや、何かは、例ならぬ對面にもあらず、人憎くいらへで、夜も更かさじ、など思ひて、かばかりも出で給へるに、障子のなかより御袖を、とらへて、引寄せて、いみじう恨むれば、・いとうたて・もあるわざかな、何に聞き入れつらむと、くやしうむつかしけれど、こしらへていだしてむと思して、他人と思ひ分き給ふまじきさまに、かすめつつ語らひ給へる・心ばへなど、いとあはれなり。宮は、敎へ聞え・・つるままに、一夜の戸口に寄りて、扇を鳴らし給へば、辨も參りて導き聞ゆ。さき〳〵も馴れにける・・・・道のしるべ・、をかしと思しつつ入り給ひぬるをも姫君は知り給はで、こしらへ入れてむと思したり。をかしうもいとほしくもおぼえて、うち〳〵に心も知らざりける恨みおかれむも、罪去りどころなき心地すべければ、薫「宮の慕ひ給ひつれば、ここにおはしつる・。音もせでこそ紛れ給ひえ聞えいなびで。

中空に 中君は匂宮に取られし、私は蛇蝎取らずで世の物笑ひになりさうですね。

今すこし 大君は自分の豫想よりも意外なので、驚きと共に今一層不愉快を覺えて。

いふかひなき 私の油斷から、お話にもならぬ幼稚な心を見ぬかれた爲に。

今はいふかひなし かうなつた以上は仕方がありませぬ。

やんごとなき あなたは身分の高い匂宮を慕つてゐられるやうですが、緣などといふものは薩張思ふ儘にならぬもののやうですから。

かの御志は あの方の目ざして卽ち中君であつたことをあなたの爲にお氣の毒に存じて居りますが。

まことに物淸く 本當に潔白な間柄だと推察する人もありますまい。

しるべと 案内者として私を誘ひ出された匂宮も、私がかうして悲しい思ひに一夜を明かさうとは思召す筈もありませぬ。

あの出しやばりの辨が宮にうまく丸めこまれたのでせうこのさかしだつめる人や語らはれ奉りぬらむ。中空に人笑へにもなり侍りぬべきかな」と宣ふに、今すこし、思ひ・寄らぬ事の目もあやに、心づきなうなりて、大君「かうよろづに珍らかなりける薫の御心の程を・知らで、いふかひなき私の心をさなさも見え奉りにける怠りに、薫が大君をおぼしあなづるにこそは」と、いはむ方なく思う・・給へり。薫「今はいふかひなし。ことわりは返す返す聞えさせても、あまりあらば、つみもひねらせ給へ。やんごとなき方に思し寄るめるを、宿世などいふめるもの、更に心にかなはぬものに侍るめれば、かの御志はことに侍りけるを、いとほしく思ひ給ふるに、かなはぬ身こそ、おき所なく心憂く侍りけれ。なほいかがはせむに思し弱りね。この御障子のかためばかり・いと强きも、まことに物淸く推し量り聞ゆる人も侍らじ。しるべといざなひ給へ・る人の御心にも、まさに斯く胸ふたがりて明かすらむとはおぼしなむや」とて、障子をも引きや

知らぬ涙　後撰離別「ゆく先を知らぬ涙の悲しきは只目の前に落つるなりけり」薫の愛情が今後も續くかどうか分らない心細さの涙が流れて目も見えないやうに思はれる。

後の世のためしに　後の世の人々が私達の身の上を數奇な運命の實例に擧げる事でもありますならば。

昔物語に　昔物語の中に、わざと滑稽人物として描き出したその標本になりさうな事のやうに思ふ。

斯くおぼし構ふる　かうしておたくらみなさいますあなたの腹の底をどういふおつもりと匂宮は御推察なさるでせう。

ゆるし給　この袖を放して下さい。河内本に從ふべきである。

御心に從ふ　私のやうなのは二人とはなからうと思はれるほどにあなたにすがりついてゐますのでこそ、かうまで執拗なのでございます。

ぶりつべき氣色なれば、いはむ方なく心づきなけれど、こしら（薫をだまさう）へむと思ひしづめて、「この宣ふ宿世といふらむ方は、目にも見えぬことにて、いかにも〳〵思ひたどられず。知らぬ涙のみ霧りふたがる心地してなむ。こはいかにもてなし給ふぞと夢のやうにあさましきに、後の世のためしに言ひいづる人もあらば、昔物語などに、殊更にをこめきて作りいでたる、物のたとひにこそはなりぬべかめれ。斯くおぼし構ふる心の程をも、いかなりけるとかは推し量り給はむ。なほいと斯くおどろ〳〵しう召すまいいと惱ましきを、ここに打休まむ。ゆるし給へ」いといみじくすこし思ひのどまりて聞えむ。心地も更にかきくらすやうにて心憂くな取り集めまどはし給ひそ。心よりほかになながらへば、いとどしき水のおとに目もさめて、夜半の嵐に、山鳥の心地しわび給へば、さすがにことわりをばいとよく宣ふが、心恥かしく覺えて、薫「あが君、御心に從ふ事のたぐひなければこそ、斯くまでかたくなしくなり侍れ。いひ知らず

跡とどむべくも致しませぬ。　生きて居たい氣

かばかりの　これ位のほのかな御對面をせめてもの氣休めにして今夜は明しませう。決して捨てて下さいますな。

山鳥の心地して　山鳥は夫婦でも別々の塒に寢る鳥であると。卷四、二七六頁參照。

いぎたなくて　匂宮は寢坊で起きて來られる樣子もないよ。

こわづくり　匂宮に聞えよがしに咳拂をするのである。

げに　後文の「かかるためし」云々を指して如何にもといつたもの。

あやしきわざなり　をかしな事だ。

しるべせし　案内役を勤めた私の方が却つて目的を達せずに滿たされない心で薄暗い曉の歸り路にまごつく事でせう。

かたがたに　自分の勝手でそんな欺きをなさるのならば、妹の事自分の事についても色々苦勞してゐる私の心をお察し下さい。

私を憎くうとましきものに思しなすめれば、聞えむかたなし。いとど世に跡とどむべくもあらずなむ覺えぬ」とて、薫「さらば（斯く）隔てながらも聞えさせむ。ひたぶるにな打捨てさせ給ひそ」とて、ゆるし奉り給へれば、這ひ入りて、薫「かばかりの御けはひを慰め給はぬを、いとあはれと思ひて、薫「しるべせし我や却りて惑ふべき心もゆかぬあけぐれの道にて明かし侍らむ。ゆめ〳〵」と聞えて、うちもまどろまず。いとどしき水のおとに目もさめて、夜半の嵐に、山鳥の心地してあかしかね給ふ。

例の明けゆくけはひに、鐘の聲など聞ゆ。いぎたなくて出で給ふべき氣色もなきよ、と心やましく、こわづくり給ふも、げにあやしきわざなり。

「しるべせし我や却りて惑ふべき心もゆかぬあけぐれの道かかるためし世にありけむや」と宣へば、

かたがたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道に惑はば

いかに 何とまあ。これ以上の隔たり方はなからうと思ひますから、たまらない心持で。

艶なる 花やかな折とおもふ薫の心づもりに於て。

ねび人どもは 老女房達はこの襖を隔てた逢ひかたについて不審がつて心配するのではあるけれども。

さりとも いくら何でも薫に惡意がある筈はないと氣休めしてゐる。

暗き程にと 暗いうちに京へ歸り着かうと。

歸るさは 往く時は宇治への道はさ程遠くも感じなかつたが。

夜をや隔てむ 萬葉十一・六帖五一若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎くあらなくに

異樣なる女車の 女の乘る網代車のやうな風變りな車に乘つて。

皆笑ひ給ひて 匂宮も薫もこの姿がをかしくなつて、噴き出して。

しるべの 自分は本望も遂げずに馬鹿らしい案内役に終つた事をあまりいまいましくて、愚痴もこぼされない。

とほのかに宣ふを、薫はこれで別れるのは物足りない氣がするので いと飽かぬ心地すれば、薫「いかに・・・。こよなう隔たりて侍るめれば、いとわりなうこそ」など、薫がよろづに恨みつゝ、ほのぼのと明けゆく程に、昨夜の戸口からよべの方より出で給ふなり。薫のさまいと柔かに振舞ひなし給へる匂ひなど、艶なる御心げさうには、いひ知らずし香をたきしめて給へり。ねび人どもは、いと怪しく心得がたく思ひまどはれけれど、さりともあしざまなる御心あらむやは、と慰めたり。

暗き程にと匂宮が急ぎ歸り給ふ道の程も、中君に心引かれて歸るさはいと遙けくおぼされて、心やすくもえゆき出來ないのが通はざらむことの、今から中君に對してかねていと苦しきを、夜をや隔てむ、と思ひなやみ給ふなめり。まだ人さわがし起きないでからぬあしたの程に京におはしつきぬ。六條院の廊に御車寄せており給ふ。異樣なる女車のさまして人目を忍んで隱ろへいり給ふに、皆笑ひ給ひて、薫おろかならぬ中君への御精勤と存じ上げますのをこがまりさをば、いとねたくて、薫が匂宮にうれへも聞え給はず。

さまざまに いろいろのかたくりをしておきながら姉君はそれを顏色にも出されなかつたのだ。中君は昨夜の事も姉君の仕業と勘違してゐられるのである。

知らざりし 大君は自分の知つた事ではなかつた由をもさつぱりと言譯する事も出來なくて、中君の恨むのも尤もと心苦しく思つてゐられた。

いかに侍りし 一體どうなさつたといふのでせう。

おぼしほれたる 頼りにする大君がぼけたやうにしてゐられるので。

御文も あれこれと世話されるばかりでなく、後朝の文をも開いて中君にお見せするけれども。

いと久しく 御返事が隨分ひまどつて困ります。

世の常に 露深い山路の笹原を踏み分けて來た私の志を、世間並の事とあなたは思召すでせうか。

大方につけて かうした特別の關係なしに匂宮の御文を見て居つた時には興味も感じられたのだが。

われさかし人にて 自分が出しやばつて代つて御返事申すのも憚られるので。

紫苑色 表は薄色、裏は青。又表は蘇芳、裏は萌黄。

細長 童男や若い婦人の著る細長い衣。

匂宮は歸着早々後朝の文を中君に宮はいつしかと御文奉り給ふ。宇治山里には、姫君達誰も〳〵うつつの心地し給はず、思ひみだれ給へり。中君の心さま〳〵に思しかまへけるを、色にもいだし給はざりけるよと、うとましうつらく姉君をば思ひ聞え給ひて、目も見あはせ奉り給はず。知らざりしさまをも、さわ〳〵とはえあきらめ給はで、ことわりに心苦しく思ひ聞え給ふ。女房達人々も、「いかに侍りしことにか」など、探りを入れて見るけれども御氣色見奉れど、おぼしほれたるやうにて頼もし人のおはすれば、不思議な事だ怪しきわざかな、と思ひあへり。口にもえう出さないで御文も引きときて見せ奉り給へど、中君更におきあがり給はねば、「いと久しくなりぬ」と御使わびけり。世の常に思ひやすらむ露深き道の笹原分けて來つるも書き馴れ給へる墨つぎなどの、今日のは殊更に艶なるも、大君が大方につけて見給ひしはをかしう覺えしを、今では中君が捨てられでもせぬかと不安におもはれるのが心配でうしろめたう物思はしうて、われさかし人にて聞えむもいとつつましければ、まめやかに、書くあべき文句をるべきやうをいみじく中君を責めて書かせ奉り給ふ。紫苑色の細長一

三重がさねの袴　表裏の間に中倍のある袴。

御使苦しげに　忍びの使であるのに祿を戴いたので使者は當惑したのである。

事々しき　そんなに儀式ばつて祝儀する程の大した使でない。

例奉れ給ふ　匂宮が今迄始終宇治にお遣しになつた殿上童なのである。

かのしるべ　匂宮が例の案内役の薫を宇治へ。

例の　又例によつて薫が何かといふと男女關係に興味もないやうな顏をすると匂宮は憎く思召す。

いかがはせむ　かうなつた以上は仕方がない、望んでは居なかつた事だからといつて粗末に出來るものでもない。大君は中君の爲に薫を望んで居つたのである。

うちあはぬ　思ふまゝにならないお住居ながら。

さる方に　整はぬながらもおもしろく拵へて。

かつはあやしき　本意ならぬ匂宮ではあるが、それでも通つて來てくれれば嬉しく思はれるとは不思議な心持だと地の文。

世の中に　私は長生きしさうにも思はれませんので。

かさねに、三重がさねの袴具して賜ふ。（使の祿である）御使苦しげに思ひたれば、（祿の衣裳を）包ませて、（使者のお供の人に）供なる人になむ贈らせ給ふ。事々しき御使にもあらず、例奉れ給ふ上童なり。殊更に人に氣色漏らさじと思しければ、（使に祿を與へたのは）よべのさかしがりし老人のしわざなりけりと、（出過ぎ者の辨の君）物しく（聞いて不快に思召した）なむ聞召しける。

その夜も、かのしるべさそひ給へど、「冷泉院に必ずさぶらふ（參上せねばならぬ）用件がべきこと侍れば」とて、とまり給ひぬ。例の、事に觸れてすきまじげに世をもてなすと、憎くおぼす。いかがはせむ、（以下大君の心）本意ならざりしこととて、（匂宮を）おろかにやは、と思ひよわり（折れてしまつて）給ひて、（匂宮を迎へる爲の設備）つらひなど、（宇治の宮は）うちあはぬすみかのさまなれど、（イニナシ）さる方にをかしくしなして待ち聞え給ひけり。はるかなる御中道を、（匂宮が宇治に）急ぎおはしましたりけるも嬉しきわざなるぞかつはあやしき。（大君の心に）さうじみ有樣では我にもあらぬさまにて、（大君に衣裳や何や世話されつゝ）つくろはれ奉り給ふまゝに、（濃い紅の）濃き御ぞの（袖）いたく（濡）るれば、（大君も）さかし人も打泣き（給ひ）つゝ、（大君）「世の中に久しく（うあるべき心地）もと覺え侍らねば、明暮のながめにも、ただ御事（あなたの事を）のみなむ心苦しう（く）思ひ聞ゆるに、この人々も、よかるべきさまの事と、聞きにくきまでいひ知らすめれば、年經たる心ども（老女房達の）には、さりとも世のことわり（から何でも世間の道理を心得て居る事でせう）をも知りたらむ。はかばかしくもあらぬ心一つを立てて、（中君を薫と結婚させようと考へた事をいふのである）かうてのみやは見奉らむと、思ひなるやうもありしかど、只今かく（う）思ひもあへず（中君を匂宮にあはせた事）恥かしき事どもに亂れ思ふべくは（う）更に思ひかけ侍らざりしに、（を）これやげに人のいふめる、（世間でいふ）のがれがたき御契りなりけむ。いとこそ苦しけれ。すこしおぼし慰みなむに、知らざりしさまをも聞えむ。（慰を）憎しとなおぼし入りそ。罪もぞ得給ふ」と、（中君は）御ぐしを撫でつくろひつつ聞え給へば、いらへもし給はねど、（得んイ）さすがに斯くおぼし宣ふが、げにうしろめたく（う）惡しかれともおぼしおきてじを、（以下中君の心）人（に見捨てられる事を氣づかふのである）笑へに見苦しき事添ひて、見あつかはれ奉らむがいみじきを、（匂宮）よろづに思ひ居給へり。

よかるべき　匂宮との御緣は結構な事だと。

はかゞしくもあらぬ　私一人が碌でもない我を張つて、いつ迄もあなたを此儘獨身でおくでもあるまいといふ氣になる事情もありましたが。

只今かく　只今斯樣に不意に恥かしい事の爲に煩悶しようとは夢にも思ひかけなかつた事ですのに。

すこしおぼし慰み　あなたが少し落着かれた時に、匂宮を手引しましたのは私でなかつた子細を申しませう。

罪もぞ得給ふ　無實の人を恨んでは罪障を作る事になりますよ。

斯くおぼし宣ふが　斯樣に心にかけて仰しやられる姉上が成程仰しやられるとほり我身に取つて氣づかはしくる惡しかれと思召す筈もなかろうのに、此上に又物笑ひな見苦しい苦勞が附加はつて世話をかけるやうな事があつては大變だ。

さる心もなく　男にあふといふ用意もなく不意をくつて惘然としてゐられた中君の先夜の樣子でさへ一通りの美しさではなかつたのに。

世の常に　中君が今夜は人なみに幾分やさしくしてゐられるので匂宮の愛情も一入であるのに。

いひ知らず　非常に大事にされて育つた姫君でも、多少世間並に人々に通じして、親や兄などに接近して一般の人々の樣子をも見馴れてゐる人は、さう恥かしがるものではあるまい。

人に遠く　人に接近することもなく始終引込みがちに育つたので。

思ひかけぬ　思ひも寄らず匂宮にあつたのがきまりわるく恥かしくて。

何事も　自分などは何事も人並だと違つて妙に田舍じみてゐる事ならうと中君は卑屈になつて。

さるは　だが實はこの中君の方が却つて大君よりも巧者で才覺があるといふ點の潤ひはすぐれてゐられた。

三日にあたる夜は　三つ目の晩は祝の餅を食べるべきものだと女房達が申すので、これは是非しなければならぬ祝ひの儀式だと姉君は思召して監督せられる御自分でもよくお作りなるけれども、一人前らしく、又一方では一人前でもつけても、分らなくなさるにつけて、人の手前きまりわるくて。

さる心もなく・・・

古代のこと　古風な趣向だが。

さよ衣　大君は私と同衾しなれたとは仰しやらなくても、私の方では逢つたやうないひがかりを言はない譯でもありませぬ。「なれ」「かごと」の「かご」、「かけ」は何れも衣の縁語。「さよ衣」は夜具、「さ」は接頭語。

隔てなき　あなたとは心だけは隔てなくおつきあひしてをるとしても、逢つた仲だとは言はれたくありませぬ。「かけじ」は口に上さないことを望む意で、袖の縁語。

おぼしける　頭に浮んだ儘の歌故平凡なのも當然と解釋された。

その夜おぼし歎き　三日目の夜。折角の日に宇治に行けない御母明石中宮。

中宮なほく斯く一人おはしまして　薫は中君に好意を寄せてゐる人と匂宮が思召すので。

いかがすべき　今夜は三日目で宇治へ行かねばならないのに、どうしたらいゝでせう。

御宿直所　禁中における匂宮の御部屋。

御文　宇治へ行かれぬ由の斷狀を認めて中君へ。

そなたの　薫は中君に好意を寄せてゐる人と匂宮が思召すので。

日頃經て　幾日ぶりかで參内しながら、今晩御宿直なさらずに急いでお歸りになつては、中宮は一層面白からぬ事と思召すでせう。河内本に「給ふなむ」とあるのに從ふべきである。

臺盤所　清涼殿の西廂にある女房の詰所。

人知れず　「顏の色たがひ侍りつる」に係る。あなたを宇治へ手引したお蔭で、中宮からつまらぬ御叱責を蒙らうかと、内心青くなりました。

多くは人の　それは主として人が惡しざまに中宮に告げ口するからだらう。世間から非難されるやうな料簡を何で私が起すものか。

いと清らにしたるを、單衣の御ぞの袖に、古代のことなれど、

薫　さよ衣きてなれきとはいはずとも託言許はかけずしもあらじ

とおどし聞え給へり。此歌を見て一層自分も中君も共に薫に見られてしまつてゐるのだから奥ゆかしいところもなくなつてしまつた身の上を

・・・こなたかなたゆかしげなき御事を、

恥かしういとど見給ひて、御返りもいかが・聞えむとおぼし煩ふ・程、御使か一部分は・たへは逃げ隠れにけり。あやしき下人をひかへてぞ御返り・賜ふ。

大君　隔てなき心ばかりは通ふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ

心も落着かず思ひ亂れての果の歌として一入平凡な歌だが心あわただしく思ひ亂れ給へる名殘に、いとどなほ〳〵しきを、おぼしけるままと、待ち見給ふ人は、薫ただあはれにぞ思ひなされ給ふ。

匂宮　宮はその夜(日)禁中うちに參り給ひて、退出も出來かねさうなのでえまかで給ふまじげなるを、人知れず、御心も空にて・匂宮がおぼし歎きたるに、中宮・も、「なほ斯く一匂宮が獨身で人おはしまして、世の中に好色のすい給へる御名のやう〳〵聞ゆる、なほいと惡しきことなり。何ごとも、物好ましく立てたる・御心

な使ひ給ひそ。主上も御參念うへもうしろめたげに思し宣ふ」と、里ずみが禁中においでなく宿直所に出で給ひて、御文を小言仰しやるので諫め聞え給へば、宮はいと苦しとおぼして、御心寄せとおぼせば、例よりも折が折とて嬉しうて、匂「いかがすべき。いと斯く暗くなりぬめるを、心の整理がつかない心も亂れてなむ」と、歎かしげにおぼしたり。薫は匂宮が中君を思ふ心の程をたしかめようと思つて

よく御氣色を見奉らむと思して、薫「日頃經て斯く參り給へるを、今宵さぶらはせ給はで、急ぎまかで給ひなむ、いとどよろしからぬ事にや思し聞えさせ給はむ。臺盤所の方にて・承りつれば、人知れず、煩はしき宮仕の・・・・・・・しるしに、あいなき勘當や侍らむと、顏の色・・・たがひ侍りつる」と申し給へば、匂「いと聞きにくくぞ中宮がおぼし宣ふや。多くは人の取りなすこととなるべし。世にとがめあるばかりの心は、何事にかは使ふ・・・・・らむ。すべて・・・窮屈な身分が却つて迷惑だ所せき身の程こそ、なか〳〵なるわざなりけれ」

まことに 口先ばかりでなく眞實わが身の地位がいやになられた。

同じ御さわがれ 折角の三日目に行かなければ宇治から恨まれ、行けば中宮の御苦情が出る、何れにしても同じ事です。

今宵の罪には 今晩は私が代つて中宮のお叱りを受けて身を無きものに致しませう。

木幡の山に 萬葉十一・拾遺雜戀・六帖二「山科の木幡の里に馬はあれど かちよりぞ來る君を思へば」

馬はいかが 徒歩でゆくといふ木幡の山を馬で行くのはいかゞなものでせう。そんな事をなさつたらお供の人もゐる事だから、一入世間の口に戸はたてられますまい。

御後見を あとの事を然るべくやつておきませう。

宮は出で給ひぬ 宮は又お出かけだ。あまりにも困つた人だ。人が見たら何と思ふだらう。

宮たち 明石中宮の皇子達。

女一の宮かばかりにても 明石中宮の御腹。中宮とお話してゐる程度でもよろしい。

物近く 身近くお聲をなりと聞きたいものだ。

とて、まことに厭はしくさへ思したり。（薫は匂宮を氣の毒にいとほしう）見奉り給ひて、（薫）「同じ御さわがれにこそはおはすなれ。今宵の罪には代りて、聞えさせて、身をもいたづらになし侍りなむかし。木幡の山に馬はいかが侍るべき。いとど物の聞えや障りどころなからむ」と聞え給へば、ただ暮れに暮れて更けにける夜なれば、（匂宮は徒歩でおぼし行くのも難儀と）わびて、御馬にて出で給ひぬ。（薫）「御供にはなか〳〵（私がお供しては却て御迷惑でせうから）仕うまつらじ。御後見を」とて、（薫は禁中に居殘られた）この君はうちにさぶらひ給ふ。

中宮の御方に（薫が）參り給へれば、（中宮）宮（匂宮）は出で給ひぬなり。あさましくいとほしき御さまかな。いかに人見奉るらむ。（主上）うへ聞召しては、『いさめ（いつも注意してゐるのにもかゝはらず宮を叱らない）聞えぬがいふかひなき』と思し宣ふこそわりなけれ」と宣はす。あまた宮たちの大人びととのひ給へど、（明石中宮は、いよ〳〵若くおほどかに人をひきつける風情が增してゆくける。（以下薫の心）女一の宮も斯くぞおはしますべかめる。いかならむ折に、かばかりにても、物近く御聲をだに聞き奉らむ、（薫の心は動く）とあはれ

すいたる人の 好色者が不料簡を起すのも、女一宮と自分とのやうな間柄で、而も相當接近した關係にありながら、思ふ儘にならぬ時の事なのだらう。

わが心の 私のやうな偏屈者が又世にあるだらうか。

それだに そんな偏屈者の自分でさへやはり懸想し始めた人の事は思ひ切る事が出來ないのだ。

目にとまる 薫の目にとまる女房もあるが、薫は決してとりみだしたことはしはじめまいと決心して、極めて生眞面目な態度でゐられた。

殊更に見えしらがふ わざとおもはせぶりにあたりをちらつく女もある。

心々なる 十人十色が世の常故浮氣たつぷりな本心の見えすいてゐるのもあるので。

事々しげに 一三五頁に「今宵は雜役もやと思ひ給ふれど云々」と今日の三日目について大袈裟にいつてよこしたのに。

に覺ゆ。すいたる人の、思ふまじき心つかふらむも、かうやうなる御中らひの、さすがにけ遠からず入り立ちて、心にかなはぬ折（時）のことならむかし、わが心のやうに、ひが〳〵しき心のたぐひやは又世にあべかめる、それだになほ動きそめぬるあたり（宇治の大君）は、えこそ思ひ絶えね、と思ひ居給へり。（明石中宮に奉仕する）さぶらふ限りの女房のかたち心ざま、何れとなくわろびたるなくめやすく、とりどりにをかしきなかにも、あてにすぐれて目にとまるあれど、更に〳〵亂れそめじの心にて、いときすぐにもてなし給へり。殊更に見えしらがふ人もあり。（女房達も表面だけはしとやかにしてゐるものの）大方（中宮方は一體が氣の置ける程とりしまつておいでになる處故）恥かしげにもてしづめ給へるあたりなれば、うはべこそ心ばかりもてしづめたれ、心々なる世の中なりければ、色めかしげに進みたる、下の心漏りて見ゆるもあるを、さまざまにをかしくもあはれにもあるかなと、（常住坐臥）立ちても居ても、ただ常なき有樣を思ひありき給ふ。（世間の無常を胸に持つて動いてゐられる）かしこには、中納言殿の事々しげにいひなし給へりつるを、夜

さればよ　噂の通り色めかしい匂宮に一時の慰み物になつたのだと。

引きつくろひ　容姿を取りつくろつてゐられる中君の器量は、常より一段と無双に感じられる。

けしうはあらずと　句を隔てて「思さるれば」に續く文脈。

近まさり　遠目よりも近づいて一層美しく思ふ事。

まして　美人を常に見馴れてゐる匂宮でさへさうなのだからまして老女達は得意になつて。

思ふやうなる　句宮とは願つたり御縁だ。

姫君の御心を怪しくひがひがしく　大君の御料簡。この一句は「姫君の御心」を説明した形である。妙にひねくれた態度即ち薫に靡かぬ事をいふ。口をゆがめる事。にがにがしく思ふ意を表はす口つき。

更くるまで（句宮が宇治に）おはしまさで、（句宮の）御文のあるを、さればよと胸つぶれ（大君が胸を痛めて）居られる所へておはするに、夜中近うなりて、荒ましき風（風を冒して）のきほひに、いとも（句宮が）なまめかしく清らにて匂ひおはしたるも、いかがおろかに覺（大君の心に）え給はむ。（中君御自身も）さうじみも聊かうち靡（氣が折れて）きて、（宮の愛情を）思ひ知り給ふことあるべし。（中君は）いみじくをかしげに盛りと（女盛りと）見えて、引きつくろひ給へるさまは、ましてたぐひあらじはやと覺ゆ。さばかりよき人を（美人を）多く見給ふ（句宮の）御目にだに、（わるくはないと）けしうはあらずと、（中君の容貌を始めとして）かたちより始めて、多く近まさりしたりと思さるれば、（宇治の老女房達）山里の老人どもは、ましてあたら（中君の御器量だのに）なの口つき憎げにうちゑみつつ、（老女房）「斯くあたらしき御有様を、（つまらぬ）（歯が抜けてゐて口元がわるいのである）口つき憎げにうちゑみつつ、（身分の男が中君を妻にしたならば）めなるきはの人の見奉り給はましかば、いかに口惜しからまし。思ふやうなる御宿世（かな）」と聞えつつ、姫君（宮）の御心を、怪しく（も過ぎてゐる癖に）ぎたるさまどもに、（派手な色模様の花模様の）あざやかなる花のいろ〳〵、似つかはしからぬをさし縫ひ著つつ、（身にそぐはず）ありつかず取り繕ひたる姿どもの、（我慢）罪

我もやう〳〵　以下大君の心。

うしろでは　後姿の醜さは知らぬふりして正面ばかりを取繕つて。

引き掛けつつ　顔をつくろふのである。

わが身にては　大君自身では。句を隔てて「覺ゆるは」に續く。

恥かしげならむ　薫のやうな氣のおける人にあふ事は一段ときまりがわるく。

御手つきのほそやかに　やがて死ぬべき豫感もあるからの筆法である。

ありがたかりつる　今夜明石中宮から容易にお暇を戴く事が出來なかつた事を思ふと、今後も氣輕に宇治に通つて來る事は出來まいと。

思ひながら　氣にはかけてゐながら御無沙汰する事もありませうが、それをどうした事情かと御心配なさるな。

（の出來さうなのもないのを）ゆるされたるもなきを見わたさ（大君が）れ給ひて、姫君（宮）、我もやう〳〵（次第に）さかり過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば、（いと）痩せ〳〵になりもてゆくを、（各自は）おのがじしは、この人ども（女房達も）も、われ惡（醜いと）しとやは思へる、（髪が細つてゐる事）うしろでは知らずがほに、額髪（顔に）を引き掛けつつ、色（口紅頬紅と）どりたる顔づくりをよくして、うち振舞ふめり、わが身にては、まだいとあれが程（老女房達程）にはあらず、目も鼻もなほしと（普通）覺ゆるは、心のな（氣のせいかも）しにやあらむ、とうしろめたく（う）て、見いだして（そとを）臥し給へり。恥かしげならむ人に見えむことは、いよ〳〵（たよりない軍情にある自分なのに）傍痛く（う）、いま一年二（もう一二年もたつたら）年あらば、衰へまさりなむ、はかなげなる身の有様を、と御手（更に衰へを加へてゆくべき哀な我身であるのに）つきのほそやかにかよわくあはれなるをさし出でても、世の中（袖から出して見ながら）を思ひつづけ給ふ。（といふ事を）

宮は、ありがたかりつる御いとまの程を思しめぐらすに、なほ心やすかるまじき事にこそはと、いと胸ふたがりて覺え給ひけり。（明石中宮から戴いたお小言などを）大宮の聞え給ひしさまなど語り聞え給ひて、（中君に）思ひながら

夢にても 少しでもあなたを疎略に思ふならば、かうしてまでも今夜來る筈もありませんが。

心の程や 私の愛情の深淺を疑つて御心配なさるとお氣の毒故、今夜は身を捨てる積りでやつて來たのです。いつもかうしてまで來るといふ譯には參りませぬ。

さるべきさまにて 適當な用意をして近い所に引取りまして。

絶間あるべく 無沙汰する事のあるやうに今から思つてゐられるのは、さては例の浮氣心のあらはれかしら、と氣がおけて。

わが御有樣から 御自分のたよりない身上を考へると。

さま〳〵 來られなければ來られれば來られるで、來られないで、それ〳〵。

所がらの 宇治といふ場所柄故の感興も多く加はつて。

跡の白波 萬葉三・拾遺哀傷彌滿雪一世の中を何に譬へむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟の跡の白波一

色なる御心 匂宮の花やかな性質におもしろく感ぜられる。

限りなく 此上なく大事に育てゐる姫君でもこれ位のものだらう。

思ひなしの 氣のせいでわが同胞の女一宮などが立派に思はれるのだ。女一宮などは皇女で后腹であるから。

とだえあらむを、いかなるにかと思すな。夢にてもおろかならむに、斯くまでも參りくまじきを、心の程やいかがと疑ひて、思ひ亂れ給はむが心苦しさに、身を捨ててなむ。常に斯くはえ惑ひありか・じ。さるべきさまにて近く渡し奉らむ」と、いと心深く深く聞え給へど、絶間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心の程しるきにや、と心おかれて、わが御有樣から、さま〳〵物歎かしくてなむありける。明け方の明けゆく程の空に、妻戸押しあけ給ひて、中君をもろともにいざなひ出でて見給へば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多く添ひて、例の柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもあるすまひのさまかなと、色なる・・・・給へる・・・・夜が明けて來て御心には、をかしくおぼしなさる。山の端の光やう〳〵見ゆるに、中君の女君の御かたちの、本當にかはいらしくてまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫君(宮)も、かばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、わが方ざまのいといつくしきぞかし、かみしめて見た美のうまみなどはこまやかなる匂ひ

なか〳〵なる 却つて中君の方が優れてゐるやうな氣がする。

斯かる所に こんな殺風景な山莊に、どうして姫君達はいつ迄も住んでゐられるのだらう。

この世のみならず 來世をかけて變らぬ夫婦と約束されるので。

思ひ寄らざりし 匂宮に逢はうとは思ひも寄らぬ事ではあつたが、豫て知りあつた薫に逢ふよりも却つて氣がおけない。

よそに思ひ聞えし 匂宮を噂に聞いて想像して居た時分には、薫とは段違ひに及びもつかぬ程の段違ひにおもはれて、一行のお手紙のやうに返事でさへ氣が引けて居つたのだが、今では匂宮に久しく無沙汰されたら心細からうとふ氣になつけても、自分ないがらいやなものだと中君は移り氣な人心といふものをしみ〳〵感ぜられる。

京に 京に御歸着の時分、あまり明くなつてきまりわるい思ひをしないうちにと、大層氣がせいて。

心よりほかならむ 不本意ながら來られぬ夜もあらうといふ事を。

など、氣がねなしに赤裸々にして打解けて見まほしう、なか〳〵なる心地す。宇治川の水の音なひ騷がしすぎるのである なつかしからず、宇治橋のいと物ふりて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば、いとど荒々しい荒ましき岸のわたりを、匂宮斯かる所に、いかで年を經給ふらむ」など、打涙ぐまれ・給へるを、中君はいと恥かしと聞き給ふ。匂宮男の御さまの、恨りなくなまめかしく清らにて、この世のみならず契り賴め聞え給へば、中君の心思ひ寄らざりし事とは思ひながら、なか〳〵かの目馴れたりし中納言の恥かしさよりは、と覺え給ふ。薫は姉君に心を寄せて居つてかれは思ふ方ことにて、いといたくすみたるれるので逢ふのもきまりわるく氣づまりであつたが氣色の、見えにくく恥かしげなりしに、よそに思ひ聞えしは、ましてよなくはるかに、一宮の手紙に對する返事くだり書きいで給ふ御返しだに、つつましく覺えしを、久しうとだえ給はむは、心細からむと思ひならるるも、我ながらうたてと思ひ知り給ふ。人々宮の供人いたくこわづくり歸京を催し聞ゆれば、京におはしまさ・・・・む程はしたなからぬ程にと、いと心あわただしげにて、心よりほかならむ夜がれ

中絶えむ　夫婦の縁は切れる筈のものを、さぞかし私の來ぬのを待ちに、あかす夜もあり、寢に泣きまくらに、一人寢に古今戀も四一さむしろに衣片敷き今宵も宇治の橋姫一夫婦仲の切れない事をあてにして、杜絶えがちない事をあなたを待ちこがれて居られねばならぬのでせうか。「わたる」は待つ意で、橋の縁語。

絶えせじの　色めかしい匂宮故杜絶えもあらうかと。

物歎かしき　あとに殘つた御移香などを内心懷かしがつてゐる人だ、と地から評。

名殘とまれる　中君も風流氣のある人だ、と昨日までは暗いうちに歸京されたのだが、今朝は三日目故、あかるくなるまでゆつくりして歸られるのである。

今朝ぞ

思ひなしの　匂宮は皇族で薫よりは身分が一段高いお方と思ふせいか格別だ。

さまあしきまで　見つともない程中君の事が思はれるが。湖月抄によると「世の聞えを忍びて」ときつて「歸つてしまはれると」とでも解かなければならぬが、無理である。河内本に從ふべきである。

を返す〳〵宣ふ。

匂宮　中絶えむ物ならなくに橋姫の片敷く袖や夜半に濡らさむ

歸りかねて出でがてに、立ちかへり見がちにぐづくしてゐられぐ立ちかへりつつやすらひ給ふ。

中君　絶えせじのわが頼にや宇治橋の遙けき中を待ちわたるべき

婦人達の　言には出でねど、物歎かしき御けはひ、限りなく（哀）に中君に同情されたけり。若き人の御心にしみぬべく、世にも稀な匂宮の後朝姿たぐひすくなげなる朝けの

中君が　（御）姿を見送りて、名殘とまれる匂宮の御移香なども、人知れず物あはれなるは、ざれたる御心かな。今朝ぞ、物のあやめも見ゆる程

女房達が宮を　にて、人々のぞきて見奉る。女房「薫中納言殿は、なつかしく（う）恥かしげなるさまぞ添ひ給へりける。思ひなしのいま一きはにや、匂宮の御さまは、いと殊に」などめで聞ゆ。

歸京の道々　道すがら、心苦しかりつる中君の御氣色を宮がおぼし出でつつ、宇治に引返したく立ちも歸りなまほしく（う）、さまあしきまで思せど、世の聞えを忍（思しかへさ）びて歸ら

容易に人目を避けて宇治においでになる事も出來ない　せ給ふ程に、えたはやすくも紛れさせ給はず。御文は毎日明くる日

おろかには　この分では中君に對する匂宮の愛情も淺くはなからうと思ひながらも。

おぼつかなき　待ちぼけの日がかさなるので。あんまり氣の揉めぬる日にあひたくないものだと思つて居つたのに、我身の事以上に心苦しい事だ。自分が心配したら中君が一層心配なさる譯だから平氣を裝つて。

いと心づくしに

この君の

待ちどほにぞ　宇治で待遠しがつてゐられるだらうと推察して。

わがあやまちに　宇治の姫君達に苦勞させるのも自分の過失と考へて氣の毒故。

さりともと　いくら何でも棄てられるやうなことはあるまいと薫は安心した。

御心一つを　自分一人では宇治行をばしかねてゐる折節を推察して薫が宮の御方へ參られた。

ふるの山里　新千載冬（寛和二年殿上の歌合に）初時雨ふるの山里いかならむ住む人さへや袖の濡るらむ」

ごとに、幾重もあまたかへり・・・（ず）・（こ）奉らせ給ふ。以下大君の心おろかにはあらぬにやと思ひながら、おぼつかなき日かずの積るを、いと心づくしにて・見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しく（う）もあるかな、と姫君（宮）はおぼし歎かるれど、いとどこの君（中君）の思ひしづみ給はむにより、つれなくもてなして、大君はみづからだになほ斯かる事思ひ加へじ、といよ〳〵深くおぼす。

薫　中納言の君も、待ちどほにぞ思すらむかし、と思ひやりて、わがあやまちにいとほしくて・・（けれど）、宮を聞えおどろかしつつ、絶えず御氣色を見給ふに、いといたく（う）おもほし入れたるさまなれば、

匂宮の　さりともと、うしろやすかりけり。中君をすいてゐられる樣子故九月十（ながづき）・日（よ）の程なれば、宇治の山の氣色も思ひやらるるに、時雨めきてかきくらし、空の村雲怖ろしげなる夕暮、宮いとど靜心なくながめ給ひて、宇治の事が心配で氣が氣でなく宇治へ行かうかどいかにせむと、（うしようかと）御心一つを（に）出で立ちかね給ふ折推し量りて・・・（中納言）參り給へり。

大和の布留　ふるの山里時雨降る宇治は如何いかならむ」と、宇治へさそひをかけられる宮はおどろかし聞え給ふ。い

もろともに 河内本に「もろともにと一とあるに從ふ。**例の** 前にも二人同車した事があるから斯くいふ。

まいてながめ給ふ 山里の秋の末つ方は一入物淋しいから。**いとど** こゝへ來て見ると一層。

艶にて 優艶なる姿で二人連れ立つて來られた事故。**うちつぶやき** 宮の杜絶えを恨んでぶつ〳〵漏らして居つた不平の名殘もなく。**京にさるべき** 此處の女房達の娘や姪といつた風な人で暇を取つて京の然るべきお邸に仕へてゐるのを二三人招き寄せて中君に附添はせてある。**年頃あなづり** 今迄姫君達を輕蔑して居つた淺はかな者共（娘や姪等）は。**折嬉しく** 丁度よい折に匂宮が來られた事と嬉しく思召したが。**恥かしくもありぬべく** 氣がひけるやうでもあり、うるさいなとは思はれるが。**心ばへの** 薫は落着いて深いものがあるので、成程匂宮はかうではないらつしやらないと二人を比較するにつけても、薫の世に稀なる方である事が感ぜられると嬉しとおぼして、もろともに・（と）いざなひ給へば、例の一つ御車にておはす。宇治の山里に分け入り給ふままにぞ、まいてながめ給ふらむ中君の心のうち、いとど推し量られ給ふ。道の程も、ただこの事の心苦しきを語らひ聞え給ふ。たそがれ時のいみじく（う）心細げなるに、雨は冷かにうちそそぎて、秋の末の感じが秋果つる氣色のすごきに、秋霧や時雨の爲にうちしめり濡れ給へる匂ひどもは、世の・・ものに似ず艶（えん）にて打ちつれ給へるを、山莊の人々は二人の山がつどもは、いかが心惑ひもせざらむ。女房達女ばら日頃うちつぶやきつる、名殘なくゑみさかえつつ、大にこ〳〵の體で二人の爲に御茵をおまし引きつくろひなどす。京にさるべき所々にゆき散りたるむすめども姪だつ人、（著）二三人尋ねふたりみたり寄せて參らせたり。年頃あなづり聞えける心淺き人々（若人ども）・・、珍らかなる客人（まらうど）と、思ひ驚きたり。姫君（宮）も、折嬉しく思ひ聞え給ふに、世話燒きの薫が一緒故さかしら人の添ひ給へるぞ、恥かしく（う）もありぬべく、（う）なま煩はしう思へど、心ばへののどかに物深く（う）物し給ふを、げに人は・（た）かうはおはせざりけりと見あはせ給ふに、

あるじ方に 内輪の人として氣樂に遇しては、まだ客座敷の假初の席に遠のけておく事だと思つてゐられた。薫は大姫君の夫になつたまだ薫はゐられるのに。**恨み給ふも** 薫が待遇を恨むのも大君はさすがに氣の毒故、物を隔てて對面された。**たはぶれにくくも** 古今誹諧「ありぬやと試みがてらあひ見ねば」の歌によつて「たはぶれにくきまでぞ戀しき」の意を表現したのである。**人の御うへにても** 中君の事につけても大君は大層悲觀して、結婚の事をば一入いやなものと思ひ切つてしまはれて。「打解けじ」に係る。中君のやうに心ゆなほひたぶるに はるしたくないものだ。感心して結婚するといふやうな事ねる薫の人とは婚しあらば、必ずしも思ふ事もありさうな譯のものだ、お互に見げるといふやうな事仲選ひをせずに通したいものなく。**宮の御有樣など** 匂宮の中君に對する樣子なども。**さればよと** 果して宇治では匂宮の夜れを歎いて居つたのだと薫の悟るやうに大君が語られるので、薫は氣の毒になつて。**思したるさま** 匂宮が中君を愛ありがたしと思ひ知らる。大君の心に

宮を、山里は山里なりに大層大切に請じ入れて所につけては、いと殊にかしづき入れ奉りて、この君は、薫をは あるじ方に心やすくもてなし給ふものから、まだ客人（まらうど）居の假初なるかたに出だし放ち給へれば、いとからしと思ひ給へり。恨み給ふもさすがにいとほしくて（う）、物越（ものこし）に對面し給ふ。薫「たはぶれにくくもあるかな。斯くてのみや」と、かうした狀態でいつまでも居る事は堪へられないいみじく（う）恨み聞え給ふ。大君も薫の恨むのも道理とは次第に分つては來られたがやう〳〵ことわり知り給ひにたれど、人の御うへにても、中君に匂宮の杜絶えがちな事物をいみじく（う）思ひしづみ給ひて、いとど斯かるかたを憂きものに思ひ果てて、以下大君の心なほひたぶるに・（は）、いかで斯く（う）打解けじ、あはれと思ふ人の御心も、必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ、自分も薫も我も人も見おとさず、心たがはでやみにしがな、と思ふ心づかひ深く（う）し給へり。宮の御有樣なども問ひ聞え給へば、薫が大君に かす淡を匂はせつめつつ、匂宮の冷されば（御）・・氣色を見ありくやうなど語り聞え給ふ。大君はいつもよりも感じよく語ら例よりは心うつ

してゐられる事や、自分が句宮の態度を始終觀察してゐる事などを薫は語られる。

物思ひ加ふる 中君についての苦勞が絶えて少し氣持が落着いてからお話致しませう。

思さるるやう 大君にも何かお考へがあるのだらう、かるく〳〵しく他の男に靡かれる事はよもやあるまい。「はた」は自分に容易に靡かないとはいつてものの意。

よくおもひしづめ 河内本は本の儘。

ありしやうにて 前の時のやうに中の隔てなしに話しませう。

常よりも 此頃はいつもよりもしやつれて自分で恥かしいやうに思ふにつけても、それが結句氣樂な筈なのに、それでゐてどうらく感するのは、古今戀たといふ譯なのでせう。

「夢にだも見ゆとは見じ朝戀な〳〵わが面影に恥づる身なれば」

斯かる御心に そんな事をいはれて此儘あはずにねて同情させられて、結局私はどうなるのが悲しいでせう。虹蜂取らずになるのが

例の遠山鳥 一二九頁に「山鳥の心地して明かしかね給ふ」とあつた。溪を隔てて寢る意。主人の顏が羨しいつ迄も起きて來ないのが

ある方に 句宮が無理な首尾をして來られては直にお歸りになるのが中君に取つて物足らず苦しいのに。句宮の方でも色々氣苦勞があるのだが姫君達はその御心持を御存じがないので。

人笑へにや 宮に捨てられて世間の物笑になるのではなからうか。

げに 一四八頁に「斯く物思ひ加ふる程」とあるのを受けて「如何にも」

京にも 京中にも人目立たぬやうに中君を引取る適當な場所もない。

片つ方に 六條院内の一殿に。

さばかりいかでかと あれ程夕霧が是非とも句宮にと思つてゐられる六の君に氣がないのでせう。

すきく〳〵しき 句宮が浮氣で容赦なく非難しいけないと夕霧が

うちわたりにも 六の君と結婚して。

さやうのなみく〳〵には 句宮は中君をそんな並々には思召さず、もし時勢が變つて、主上や中宮の思召しに自分が春宮に立ちにでもなつたら、中君を中宮にも据ゑよう。今の處は氣になつてゐる通りに花やかに待遇する術もなくて。

くしう語らひて、大君「なほ斯く物思ひ加ふる程・・・・・、心地もすこし心地もしづまりて聞えむ」と宣ふ。人にくくけどほくはもて離れぬものから、障子の固めもいと強し。強ひて破らむをば、つらくいみじからむと思したれば、思さるるやうこそ・あらめ、かるく〳〵しくことざまに靡き給ふ・ことは・はた世にあらじと、氣の長い薫は心のどかなる人は、さは・いへど・・よくおもひしづめ給ふ。薫「ただいとおぼつかなく物隔てたるなむ、胸あかぬ心地するを、あるしやうにて聞えむ」と責め給へど、大君「常よりもわが面影に恥づる頃なれば、うとましと見給ひてむもさすがに心・苦しきは、いかなるにか」と、ほのかにうち笑ひ給へるけはひなど、大君の怪しうなつかしう覺ゆ。薫「斯かる御心にたゆめられ奉りて、つひにいか・なるべき身にか」と歎きがちにて、例の遠山鳥にて明けぬ。宮は、薫が大君に逢はずに獨寢で居ようとも知らずまだ旅寢なるらむともおぼさで、句「中納言の、あるじ方に・心のどかなる氣色こそ羨ましけれ」と宣へば、女君、

中君は薫と大君と關係があるとは知らないから

あやしと聞き給ふ。わりなくておはしましては、程なく歸り給ふが飽かず苦しきに、宮も・物をいみじくおぼしたるに、又いかならむ、人笑へにや、とおもひ歎き給へば、げに心づくしに苦しげなるわざかなと見ゆ。京にも、隱ろへて渡り給ふべき所も、さすがになし、六條の院には、左の大い殿片つ方に・住み給ひて、さばかりいかでかと思したる六の君の御事をおぼし寄らぬに、なま恨めしと思ひ聞え給ふべかめり、すき〳〵しき御さまと、許しなく謗り聞え給ひて、うちわたりにも愁へ聞え給ふべかめれば、いよ〳〵覺えなくて出だしすゑ給はむも、憚ることといと多かり、なべてに思す人のきはは、宮仕のすぢにて、なか〳〵心やすげなり、さやうのなみ〳〵には思されず、もし世の・中うつりて、御門きさいのおぼしおきつるままにもおはしまさば、人より高きさまにこそなさめなど、只今

苦しかりけり　「人より高きさまにこそなさめなど苦しかりけり」といふ文章である。

げにただ人は　「げに」は匂宮が中君の處置に當惑してゐられるのを受けていふ。さうして見るとと自分のやうな平人は氣樂なものだ。

斯くいと心苦しき　匂宮が中君を深く愛して居りながら不安な氣持で人目を忍んでゐられる爲に逢瀬も稀であるので、自然お互に煩悶してゐられるらしいのが氣の毒故。

忍びて　匂宮が宇治に通はれる由を中宮などにもそつとお知らせ申して、一時やかましくいはれるのはお氣の毒だが、中君については過失になるまい。

いと斯く　折角行かれても明け取つて御歸京になるのは苦しさうだ。

いみじくもてなして　うまく取計らつて晴れて夫婦にしてあげたいものだ。「漏らし聞召させていみじくもてなしてあらせ奉らばや」と續く文章である。

衣がへなど　十月には衣服を始め調度類一切を冬支度にするのである。

あつからむ　しつかり擔任するものもない。

御帳の帷子　御帳臺の垂布。

壁代　間の界などに壁の代りに垂れる布帛。夏は生絹冬は練絹。

はいと花やかに、御心にかかり給へるままに、もてなさむ方なく、苦しかりけり。中納言は、三條の宮造り果てて、さるべきさまにて渡し奉らむとおぼす。げにただ人は心安かりけり、斯くいと心苦しき御氣色ながら、安からず忍び給ふからに、かたみに思ひ惱み給ふべかめるも心苦しくて、忍びて、斯く通ひ給ふよしを中宮などにも漏らし聞召させて、暫しの・さわがれはいとほしくとも、女がたの御爲は咎もあらじ、いと斯く夜をだに明かし・・給はぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせ奉らばや、など思ひて、あながちにも隱ろへず、衣がへなど、はかく〳〵しく誰かはあつか・らむ、など思して、御帳の帷子、壁代など、三條の宮造り果てて、渡り給はむ心まうけにしおかせ給へるを、「まづさるべき用なむ」など、いと忍びて聞え給ひて、奉れ給ふ。さま〳〵なる女房のさ・うぞく、御乳母などにも宣ひつつ、わざともせさせ給ひけり。

渡り給はむ　大君を迎へて三條の宮に引越されるこの折の用意に整へておかれたのを。

まづさるべき　差當り必要があります。帷子や壁代などを下さいなどとそつと女三宮から受取つて。

網代も　網代は冬のものであるから。

宮人　匂宮方に奉仕する人。

所せき　主上中宮の御愛子なる匂宮の事故。

宰相の中將　もと藏人少將であつた人。

論なう　匂宮がそちらに御一泊なさる筈故、そのお積りでゐて下さい。

さきの春も　初瀨詣の折も。

時雨の紛れに　時節が時節だから時雨が降つたりして、その騷にまぎれて。

見奉りあらはす　姫君達をあらはに見るやうな事があつては大變です。

かつは　一切薫の指圖まかせにするのは奥ゆかしいところがないといふ點もあるが、仕方がない、これも前世の因緣だ、と大君は諦めて、お待受の準備をしてゐられた。

遊び給ふも　演奏される聲も。

神無月・の朔日頃、紅葉の外に網代もをかしき程ならむと、薫が匂宮をそそのかし聞え給ひて、宇治の紅葉御覽ずべう申し給ふ。親しき宮人ども、殿上人の睦まじくう匂宮がおぼす限り、人目に立たぬやうにといと忍びてと思せど、所せき大さうな御威勢だから御いきほひなれば、おのづから事ひろごりて、左右の大い殿の宰相夕霧左大臣の息の中將も參り給ふ。それ以外はさてはこの中納言薫・殿ばかりぞ上達部以下は仕お供うまつり給ふ。殿上人以下の人々ただ人は多かり。かしこ宇治の山莊へには、「論なう中宿りし給はむを、さるべきさまに思せ。さきの春も花見に尋ね參りこし宇治を訪問した人々がこれかれ、斯かるたよりにことよせて、時雨の紛れに見奉りあらはすやうかうした好機を利用してもぞ侍る」など、こまやかに聞え給へり。御簾懸けかへ、此處彼處かき拂ひ、岩隱れに積れる紅葉の朽葉すこしはるけ拂ひのけ、遣水の水草拂はせなどぞし給ふ。由ある風情ある菓子くだものさかなどお手傳の人などを、さるべき人なども奉れ給へり。かつはゆかしげなけれど、いかがはせむ、これもさるべきにこそは、と思ひゆるして、心まうけし給へり。

薫も

かくれも

舟にてのぼりくだり漕ぎめぐり、面白く遊び給ふも聞ゆ。ほの

句宮が宇治川を

斯く忍び給へる　かうした忍びの御遊覽にも拘らず人とは違つて立派なのを御覽になるにつけても。

げに棚機　棚機は年に一度の逢瀬だといふが、そのやうに年に一度の逢瀬でもよいから、こんな立派な夫を持ちたいものだ。

海仙樂　海青樂の事。黃鍾調の中曲、早八拍子。

あふみの海　紫明抄「いかなれば近江の海のかかりてふ人をみるめの絶えて生ひねば」後撰秋上「棚機の天の戸渡るなる今宵さへ遠方人のつれなからむ」

遠方人のまよひ　人々の騷ぎがすこし靜まつてから山莊を尋ねようとし薫も思召して、然るべく匂宮に申上げてゐられるうちに。

事々しき隨身　咲花抄一禪云左右近衞左右衞門左兵衞出仕には隨身を具する也。

ぼの有様見ゆるを、そなたに立ちいでて若き人々見奉る。（山莊の若女房達が）（匂宮御本）さうじみの御有様はそれと見分か（見えねイ）・・・・ねども、紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに、聲々吹きいづる物のね（管樂器の音）ども風につき（きほひ）・て、（騷がしい程）おどろ〳〵しきまで覺ゆ。世の人の（匂宮に）靡きかしづき奉るさま、斯く忍び給（たま）へる道にも、いと異にいつくしきを見給ふにも、（姫君達が）げに棚機ばかりにて（年に一夜の契なりと）・・・も、斯かる彥星の光をこそ待ちいでめ、など覺えたり。詩（ふみ）作らせ給ふべき心（用意）まうけに、博士などもさぶらひけり。たそがれ時に、御舟（岸に）さし寄せて遊びつつ、詩（ふみ）作り給ふ。（濃淡樣々の紅葉を冠にさして）紅葉を薄く濃くかざして、「海仙樂（かいせんらく）」といふものを吹きて、おの〳〵（滿悅の樣子）心ゆきたる氣色なるに、宮はあふみの海（中君に逢はれぬ意を古歌によつて云つたもの）の心地して、（をちかたびと）遠方人の恨みいかにとのみ、御心空なり。時に（折にふさはしい詩題を）つけたる題いだして、（詩を）うそぶき誦（ず）じあへり。人のまよひすこししづめておはせむと中納言もおぼして、さるべきやうに聞え給ふ程に、うちより、（明石）中宮の仰言にて、宰相（夕霧息）の・（御）兄のゑもんの・督、（大層らしい）事々しき隨身

かうやうの　この種の御他出は內密になさらうとしても、自然一般に知れ渡つて、前例にもなりがちなものだのに。

御心のうちをば　殿上人達は宮や薫の御心持に頓着なく。

今日は斯くて　今日は此儘宇治に居たいと宮は思召したが。

宮の大夫　中宮大夫。

奉り給へり　中宮が匂宮お迎へに宇治へ。

かずならぬ　自分のやうなつまらぬ身分では、結構な匂宮の家庭にはひつてもはひりがひのない事だ。

よそにて　離れて居る時には久しく逢はなくても、離れてゐればこそ逢へないのも當然だと考へて、いくら何でも始終かうではあるまいと自ら慰めて居られたのだが。

引きつれて、（正式の行裝で）うるはしきさまして參り給へり。かうやうの御ありきは、忍び給ふとすれど、おのづから事ひろごりて、のちのためしにもなるわざなるを、（宮が）おも〳〵しき人（供人を）かずあまたもなくて俄におはしましにけるを、（中宮が）聞召し驚きて、殿上人あまた具し（宇治に）て（お迎に）參りたるに、（工合のわるい事になつてしまつた）はしたなくなりぬ。宮も中納言も（當惑して）苦しとおぼして、物の興もなくなりぬ。御心のうちをば知らず、醉ひ亂れて遊びあかしつ。

今日は斯くて・（も）とおぼすに、又・（御迎へに）・・・宮の大夫、（其他の）さらぬ殿上人など、あまた奉り給へり。（宮は）心あわただしくて（うて）口惜しく（うて）・、歸り給はむ空なし。（中君方へ）かしこには御文をぞ奉れ給ふ。（その手紙には風流な事も書）をかしやかなる事もなく、いとまめだちて、（宮の率直のお心持を）思しける事どもをこま〳〵と書き續け給へれど、人目繁うさわがしからむにとて、（中君が難酌して）御返りなし。（中君の心）かずならぬ有様にては、めでたき御あたりにまじらはむ、かひなきわざかなと、いとど（我身の程を）思し知り給ふ。よそにて隔たる月日は、

近き程に　近所まで賑かにやつて來られて、知らぬ顏で其儘歸つてしまはれる事を。

ましていぶせく　匂宮は内心中君を尋ねたく思召したが人目が多くて自由にならぬので、中君以上に氣がふさいでたまらなく感ぜられる。

いろ〳〵の　花鳥餘情、水原抄云庖丁譜に氷魚には紅葉をしく云々。様々の紅葉の葉に氷魚を盛つて賞翫する事を下々の人々などは面白がつてゐるので。

古宮　姫君達の山莊。

なか〳〵　宇治の宮を尋ねるやうな事をいひ送つておいて、なまなか先方にあてにさせておいた事を、歎かはしい事だと薫は思はれる。

去年の春大方にとやかくやと　初瀬詣の折の事。後文の「口々にいふ」にかゝる。「大方に」は匂宮との關係で評判するのでなく、一婦人として問題にしてゐるの義。

人の御うへは　姫君達の御身の上の事は、こんな山奥ではあるが、何やかやと自然噂に上るのが常であるから。

おぼつかなさもことわりに、さりともなど慰め給ふを、近き程にののしりおはして、つれなく過ぎ給ふなむ、つらくも口惜しくも思ひ亂れ給ふ。宮は、ましていぶせくわりなしと思すこと限りなし。網代の氷魚も心寄せ奉りて、いろ〳〵の木の葉にか

中君が

匂宮に好惡を寄せて澤山捕れ

氷魚

には紅葉した木の葉を敷くのが習ひである

きまぜもてあそぶを、下人などはいとをかしき事に思へ・ば、

宮も人々と調子を合せて滿足さうにしてゐられる御遊覽ではあるが

人に從ひつつ、心ゆく御ありきに、みづからの御心地は、胸のみつとふたがりて、空をのみ眺め給ふに、この古宮の梢は、いと殊に面白く、常磐木に這ひまじれる蔦の色なども、物深げに見えて、遠目さへ凄ごげなるを、中納言の君も、なか〳〵頼め聞えけるを、うれはしきわざかなと覺ゆ。去年の春御供なりし君だちは、花の色を思ひいでて、

姫君達の

あの時の

匂宮が宇治へ

父宮に

む心細さをいふ。かう忍び〳〵に通ひ給ふと、ほの聞きたるもあるべし、心知らぬもまじりて、大方にとやかくやと、人の御うへは、斯かる山隱れなれど、おのづから聞ゆるものなれば、

事情を

じやうず　上手。

いつぞやも　嘗て花盛の折に一目見た姫君達もこの秋は八宮が亡くて淋しく暮してゐられる事でせうか。

あるじ方と　薫を姫君方の人と思つて薫に詠みかけると。

櫻こそ　憂世の無常なる事を櫻が思ひ知らせてくれます。「咲匂ふ花も紅葉も」は「常ならぬ」の枕詞である。

いづこより　此の山里の紅葉のもとはこれ程立去りにくいのに、秋はどこから立去つた事だらう。今は冬であるから「秋はゆきけむ」といつたのである。

見し人も　嘗てお目に懸つた事のある八宮も亡くなられたのに葛だけは相變らず岩垣に這ひまつはつてゐる。氣長な葛を見てあわただしく死なれた八宮を思ひやつたのである。

秋果てて　秋も了つて紅葉も多くは散つていつて淋しさも一と吹いほである木の下を餘り甚しく吹いた紅葉や散り殘つた紅葉や散り敷やうな事をするな、峰の松風よ。「吹きな過ぐしそ」は「吹き過ぎくなの」ではない。定量以上に吹くなの意である。

ほのかに知る　匂宮と中君との關係を。

宇治の姫君達は美人だ

人々「いとをかしげにこそ物し給ふなれ。箏のことじやうずにて、

姫君達に

八宮

故宮の明暮遊びならはし給ひければ」など、口々にいふ。宰相

夕霧の息

の中將、

いつぞやも花の盛に一目見し木のもとさへや秋は淋しき

子をひゞかす

あるじ方と思ひていへば、中納言、

薫

櫻こそ思ひ知らすれ咲匂ふ花も紅葉も常ならぬ世を

夕霧の息

衞門の督、

いづこより秋はゆきけむ山里の紅葉の蔭は過ぎ憂きものを

宮の大夫、

見し人もなき山里の岩垣に心長くも這へる葛かな

宮の大夫は一行中の老人で

なかに老いしらひて、打泣き給ふ。親王の若くおはしける世の

八宮の壯年時代を

ことなど思ひいづるなめり。匂宮、

秋果てて淋しさまさる木の下を吹きな過ぐしそ峯の松風

とて、いたう涙ぐみ給へるを、ほのかに知る人は、げに深

今日のたよりを 折角の好機會を逸しなさるのがお氣の毒な。**事々しく** 仰々しいお供廻りで宇治の宮へお立寄りになることは出來ず。

かしこには 姫君達の方では素通りにされた匂宮の樣子を。この句は次の「遠うなるまで云々」の句と併立して「ただならず覺え給ふ」に續く語法であるが、「過ぎ給ひぬるけはひ」は「遠うなるまで聞ゆるさきの聲々」で知られるので、畢竟此れは彼れの說明になつてゐる。**おとに聞く** 古今戀四「いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色異にして」**ほのかに** 「聞けば」に續く。**人かずならぬ** 此處にゐる身分卑しい侍女達が自分達の過去の經驗談にいふのを。**人の聞き思ふ** 外聞や人の手前が憚られて勝手な眞似も出來ぬものと思つてゐたが、實はさうでもないのであつたのだ。

(う)匂宮が中君をくおぼすなりけり、今日のたよりを過ぐし給ふ御心苦しさ、と見奉る人あれど、事々しく引き續きて、はえおはしまし寄らず、作りける詩ふみどもの、面白き所々をかしき節々うちずじ、大和歌も事につけて多かれど、かやうの醉ひ泣きの紛れに、まして立派な歌が出來る筈もないはかく〳〵しき事あらむやは。數ある歌の片端書きとどめてだに見苦しくなむ。

かしこには、過ぎ給ひぬるけはひを、遠うなるまで聞ゆるさき前驅の聲々、無頓着に聞きすぐされないただならず覺え給ふ。匂宮を待受ける用意をして居つた宇治の人々心まうけしつる人々も、いと口惜しと思へり。姫君(宮)はまして、なほおとに聞く月草の色移り易いなる御心なりけり、ほのかに人のいふを聞けば、世間の男といふものは、空言をこそいとよくすなれ、思はぬ人を思ひがほに取裝ふなす言の葉多かるものと、この人かずならぬ女ばらの昔物語にいふを、さうした常並の人々の間にこそ不心得な男も居ようがさるなほ〳〵しき仲にこそは、けしからぬ心あるもまじるらめ、何事も筋特殊な身分になると ことなるきはになりぬれば、人の聞き思ふことつつま

あやしきまで 湖月抄に「薫の匂宮を心深くおはする由を宣ひしと也」とあるが正しい。それは後に「かう見劣りする御心をかつは」とあるので明かである。「宣ひわたり」を匂宮の行爲と解くのは誤。**思ひの外に** 思ひがけずも中君の婿にしたにつけても、我身のつらさを增したのがつまらぬ事だ。**かう見劣りする** 愛情が深いやうに聞いてゐたが、見ると聞くとは大變な相違で、實はこんなに見劣りのする淺い匂宮の御心であるのに、薫は一方でほめたてながら、一方で笑つてゐられるだらう。**おの〳〵** 各つまらない事をしたものだと思ふであらうと思ふと、不體裁でもあり、馬鹿らしくもあると。**おぼつかなきも** 宮が無沙汰をされても、餘儀ない差支がおありなのだらうと、さう考へて氣を紛らせてゐられる點がある。それに、其の氣安めを裏切つて、そこへ來てをりながら還つてしまはれたのだから一層悲しいのである。「…思しかはらじと」「…物し給ふらめと」は共に「思ひ慰め給ふ」にかゝる。**程經にけるが** 久しい杜絶えが氣の揉めないでもない所へ、なまなか立寄らずに素通りされた事を。

しう、所せかるべきものと思ひしは、さしもあるまじきわざなりけり、あだめき給へるやうに故宮も聞き傳へ給ひて、かうやこんなに婿にとまでは思ひつきもなさらなかつたのにうにけぢかき程までは思し寄らざりしものを、あやしきまで心深げに宣ひわたり、思ひの外に見奉るにつけてさへ、身の憂さ中君の事につけて大君の心配の殖えた事を思ひ添ふるがあぢきなくもあるかな、かう見劣りする御心を、かつはかの中納言もいかに思ひ給ふらむ、此處にも殊に恥かしげなる人はうちまじらねど、おの〳〵思ふらむが人笑へにを氣のおける人も居ないが(た)この山莊にも聞かれて恥かしいと思ふ程格別こがましき事、と思ひ亂れ給ふに、心地もたがひて、いと惱ましう覺え給ふ。中君さうじみは、たまさかにたいめし給ふ時、自分の愛情は無限に深いものだと信頼させ約束なさるので限りなく深きことを賴め契り思へれば、さりともこよなうは思しかはらじと、おぼつかなきも、わりなき障りこそは物し給ふらめと、心のうちに思ひ慰め給ふかたあり。程經にけるが思ひい・られ給はぬにしもあらぬに、なか〳〵にて打過ぎ給ひぬるを、中君の心につらうも口惜しうもおもほゆるに、いとど物あはれなり。

忍びがたき　中君が堪へられぬ物思はしさでゐられるのを大君が御覽になつて。以下大君の心。

かうやうに　匂宮もかやうに中君を無視した待遇はなさるまいに、こんな貧弱な生活貧弱な住宅だから、輕蔑されるのだ。

我も心一つに　大君の心。自分一人だけが薫から遠ざかる氣で居つても、逃げる口實にも際限のあるものだ。

ある人の　こゝなる侍女達が性懲りもなく、ぜひとも結婚させたいと、そんな事許り思つてゐるやうだから、不本意ながらも結局夫を持たされさうに思ふ。

さる心地して　その積りで用心して。

さもこそは　父母に死後のやうに。

さるべき人々にも　父母を指してゐるやうに思はれるがそれならば「おくれ奉りけめ」と過去にいはなければならぬ筈であつてくる。だから、こゝは今後起つてくる場合をいつてゐるものと解かなければならぬ。從つて「さるべき人々」は匂薫を指すでもあのと考へなければならぬやうな。即ち夫に先立たれるやうなあふだらうの意となる。

やうのものと　私も中君と同じやうに見捨てられて物笑ひを招く身となつて、亡き兩親にまで心配をかけるのがつらい事だ。

なほ我だに　やはりせめて自分

忍びがたき御氣色（中君の）なるを、人なみ〳〵（中君を人並にかしづき立てて）にもてなして、例の人め（世間並の住居なら）きたるすまひならば、かうやうにもてなし給ふまじきを、などと姉君（宮）は、いとどしく（う）あはれと見奉り給ふ。我も世に（長生きしたら）ながらへば、かうやうなること（苦しい目を）と見つべきにこそはあめれ、中納言の、とざま（何かと私にいひ寄られるのも）かうざまにいひありき給ふも、（私の氣を引いて見ようとなさるのであつたのだ）人の心を見むとなりけり、心一つにもて離れて思ふとも、こしらへやる限りこそあれ、ある人の（と）（こ）、（匂宮の事に懲りもせず）懲りずまに、斯かるすぢの事をのみ、いかでと思ひたさ、なほ我（に）だに、（結婚に伴なふ心配）さる物思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ、とおぼし沈むに、心地も誠に苦しければ、物も露（少しもたべず）ばかりまゐらず、ただ亡（死後の）からむのちのあらま（將來かうある）しごとを明暮思ひ續け給ふに、物心細くて、（中君）この君を見奉り給ふもいと心苦しう、我に（以下大君の心）さへおくれ給ひて、いかにいみじう慰むかたなからむ、あたらしく（う）をかしきさま（中君の姿を）を明暮の見ものにて、いかで人々しうも見なし奉らむと思ひあつかふをこそ、人知れぬ行く先の頼みにも思ひつれ、限りなき人に物し給ふとも、かばかり人笑へなる目を見てむ人の、世の中に立ちまじり、例の人ざまにて經給はむは、たぐひすくなく心憂からむ、などおぼし續くるに、いふかひもなく、（現世に於ては少しもほつとする事なしに死んでいく自分達なのだ）この世には聊か思ひ慰む方なくて過ぎぬべき身どもなめ（りけ）・り、と心細く（う）おぼす。

匂宮は、立ちかへり例のやうに忍びて、と出で立ち給ひけるを、禁中うちに、衛門（初瀬詣宇治遊覽など）「斯かる御忍びごとにより、山里の御ありきも、ゆく（ふいと）りかに思し立つなりけり。『かる〳〵（う）しき御有樣』と、世人も下（した）に譏り申すなり」と、衛門（夕霧の息明石）督の漏らし申し給ひければ、中宮も

だけでもさうした苦勞をせずに、罪障などもあまり深くならぬ前にぜひ死にたいものだ。

我にさへ　中君が父母亡き上に自分にまで死におくれては。

いかで人々しう　ぜひとも中君を立派な人に緣づけて相當の暮しをさせるやうにと骨折る事を內心將來の希望に思つて居つたのだ。

限りなき人に　いくら匂宮が高貴な方であつても、これ程世の物笑ひとなつた中君が、世間に顏を出して、人並の生活をするといふ事は、餘り例の無い事でもあらうし、またつらくもあらう。

いふかひもなく　「身どもなめり」を修飾する。

立ちかへり　直ぐそのあとで例の微行でと、宇治行の計劃されたのであるが。

御忍びごとにより　秘密な變人があるので。

かる〳〵しき　宮の御振舞は輕率だと世間でも蔭で惡口して居ります。

大方　一體あなたが宮を氣儘に里住みさせておかれるのがわるいのです。

うけひかず　匂宮が不承知であつたのだが、無理に差上げるやうにと一切が取りきめられた。**あいなく**　匂宮に六君が出來れば自然宇治には杜絶えがちになつて中君が歎く事になる。薫はそれに對して自ら責任を感ずるのである。**わがあまり**　自分があまり人と變てゐるのだ。**親王の**　八宮が姫君達を氣遣つてゐる御生前の様子が如何にもいとしい、又この美しい姫君達が、格別仕合なる目も忘れられないし、零落され、一人前の生活をさせたいとは見ずにゐるのが惜しく思はれるのに、自分ながらの不思議に思はれる程世話を燒くのは私の思つてゐる氣になつた所へ。**わが思ふ方は**　大君は中君を代りに立てられるのも面白くない事を思ふと後悔に堪へない。**いづれをも**　どちらの姫君を我物にして居ても誰も咎め手はなかつたのだ。伊釋引歌「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我身と思はむ」

聞召し歎き、今上うへもいとど假借なき御立腹で許さぬ御氣色にて、帝「大方、心にまかせ給へる御里住みのあしきなりけり」と、宮を禁中に始終引付けてお置きになるうちにつときびしき事ども出で來て、夕霧の第六女やかましい問題がいろ〳〵起つてうを、うけひかず思したる事なれど、おし立ちて參らせ給ふべく皆定めらる。薫中納言殿聞き給ひて、何にもならぬことにつまらなく色々物思をし續けてゐられるあいなく物を思ひありき給ふ。以下薫の心わがあまり異樣なるぞや、然るべき因緣があつたのかさるべき契りやありけむ、親王のうしろめたしとおぼしたりしさまもあはれに忘れがたく、この君だちの御有樣けはひも、殊なることなくて世に衰へ給はむ事の惜しくも覺ゆるあまりに、人々しうもてなさばやと、怪しきまでもてあつかはるるに、宮もあやにくに取りもちて責め給ひしかば、わが思ふ方は異なるに、讓らるる有樣もあいなくて、斯くもてなしてしを思へば、くやしくもありけるかな、いづれをもわが物にて見奉らむに、咎むべき人もなしかし、取り返すものならねど、今更なやんでゐられるのは馬鹿げてゐるをこがましう心一つに思ひ亂れ給ふ。匂宮はま

御心につきて　お氣に召した女があるならば、手もとに迎へ寄せて、人並に落着いて居なさい。**筋殊に**　他の皇子とはちがつてあなたを春宮にもと主上は思召していらつしやるのに、輕々しいやうに申上げてゐるやうで大變殘念です。

女一の宮　匂宮の御妹。

お前に　女一宮のおそばに。

年頃二つなき　匂宮は今迄女一宮を無二の美人と思召して。**又この御有樣に**　女一宮の御器量に比べられる人が世に又とあらうか。**冷泉院の姫君**　河内本の如く「姫宮」とあるべきである。弘徽殿女御の御腹で女一宮と申す。

して御心にかからぬ折なく、中君の事が戀しう人に奉はれはしないかと不安にうしろめたしと思す。中宮「御心につきて思す人あらば、此處に參らせて、例ざまにのどやかにもてなし給へ。筋殊に思ひ聞え給へるに、かるびたるやうに人の聞ゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と、明石中宮大宮は明暮聞え給ふ。

時雨いたくしてのどやかなる日、閑散な日女一の宮の御方に參り給へれば、お前に人多くもさぶらはず、女房達しめやかに、御繪な・ど御覽ずる程なり。匂宮と女一宮と御几帳ばかり隔てて、御物語聞え給ふ。限りもなくあてにけだかきものから、なよびかにをかしき御けはひを、年頃二つなきものに思ひ聞え給ひて、又この御有樣になずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫君（宮）姫宮だけは女一宮に匹敵すべき方だの意ばかりこそ、御覺えの程うちうちの御けはひも心にくく聞ゆれど、懸想しながらも匂宮は打ちあけるすべもなくうち出でむ方もなく思しわたるに、かの山里人は、らうたげに・あてなる方の劣り聞ゆまじきぞかし、などまづ思ひいづるに、中君の事をいとど戀しさ・まさるくて慰めにイ

女繪 美人畫。

心々に 畫家が思ひ〳〵に男女關係の狀態を畫いてゐる、その畫を中君に贈らうとお考へになる。「有樣かきたるをかしこへ奉らむと」と續く。伊勢物語。在五は在原業平。

在五が物語 伊勢物語「昔男、妹のいとをかしげなるを見居りて、うらなく若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむ事をしぞ思ふ、返し、初草のなほ珍らしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな」

人の結ばむいかなる繪にか 匂宮がどんな繪を御覽になつてそんな事を仰しやるのかと女一宮が思召すと。

うつぶして御覽ずる 「御髮の打靡きて」は「こぼれいでたる」の序である。即ち御髮が几帳の外にこぼれ出てゐるその如くに見える御横顏のほんの一部の義。こぼれ出てゐるのだから「ほのかに」とてゐるべきはずなら「ほのかに」とかに見奉り給ふ」は顏のことである。

すこしも物隔てず もし少しでも血緣の遠い例へば別腹などの間柄であつたらどんなにか嬉しからに。

若草の 眞の同胞の事故夫婦の語らひはしたいとは思はないがあまりの美しさに何だか惱みを慰めに、御繪どもの女一宮のお前にあまた散りたるを見給へば、をかしげなる女繪どもの、戀する男のすまひなど書きまぜ、山里のをかしき家居など、心々に世の有樣かきたるを、匂宮と中君との仲の事によそへらるる事多くて、御目とまり給へば、その繪を少々女一宮から頂いてすこし聞え給ひて、中君へかしこへ奉らむとおぼす。在五が物語を書きて、妹に琴今の伊勢物語にはない教へたるところの、「人の結ばむ」といひたるを見て、匂宮は何と思召してかいかが思すらむ、女一宮の方へすこし近く參り寄り給ひて、匂古への人も、同胞のやうな間柄はさるべき程は、隔てなくこそならはして侍りけれ。私をいとうとく〳〵しうのみもてなさせ給ふこそ」と、忍びて聞え給へば、いかなる繪にかと思すに、匂宮がその繪卷をおし卷き寄せて、お前にさし入れ給へるを、女一宮がうつぶして御覽ずる、御髮の打靡き几帳の下から見飽かずてこぼれ出でたる片一部分だけそばばかり、ほのかに見奉り給ふが飽かずめでたく、すこしも物隔てたる人と思ひ聞えましかば、と思すに、忍びがたくて、

匂宮 根見むに寢見むを響かす

若草のねみむものとは思はねど結ぼほれたる心地こそすれ

感じるやうな氣がします。「若草の」は「ねみむ」の枕詞。

事しもこそあれ 外の事ならともかく、いやな事を、けしからん事をと。

ことわりにて 女一宮がさう思召すのも御尤も故。

うらなく物を 伊勢物語中の女の返歌。前出。恥ぢもしないで返事などした人ずれした態度を非難したものである。

世になく 父帝母后が非常にお大事にされるので。

かたほに 醜く少しでも缺點のある女は、宮仕の仲間入りをきまりわるくおもひさうだ。

御心の移ろひやすきは 移り氣な匂宮は、新參の女房達に一時の關係を結ばれたりなどして。

なほかうなめり やはり案の定匂宮に捨てられたのだらう。

いと心地惑ふ たまらぬといふ程の御病氣でもないが、大君は病氣にかこつけて薫に對面なさらない。

おそばに居つた侍女達お前なりつる人々は、この宮匂宮をば殊に恥ぢ聞えて、物のうしろに隱れたり。事しもこそあれ、女一宮の御心うたて匂宮の御心ことわりにて、「うらなく物を」といひたる姫君も、ざれはず。

大勢の御兄弟中 紫上の、取り分きて、あまたの御中に、隔てなく思ひかはし聞え給ひて憎くおぼさるる。

この二人が 匂宮と女一宮とを互に馴染ませて育てられたので 聞え給ひしかば、この二所をばならはしへり。

今上と明石中宮とが 世になくかしづき聞え給ひて、女一宮の侍女達も さぶらふ人々も、かたほにすこし飽かぬところあるは、はしたなげなり。侍女の中にやんごとなき人の御女なども、いと多かり。御心の移ろひやすきは、珍らしき人々に、はかなく語らひつきなどし給ひつつ、宇治の中君をかのわたりをおぼし忘るる折なきものから、音づれ給はで日頃經ぬ。

宇治では 待ち聞え給ふ所は、絕間遠き(待遠なる)心地して、なほかうなめりと、心細うながめ給ふに、薫が宇治に中納言おはしたり。大君の御病氣と 惱ましげにし給ふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心地惑ふばかりの御惱みにもあらねど、ことつけて對面し給はず。薫「御病氣と聞いて驚きながら遙けき程を

なほかの やはり大君の御病床近くに。

いと傍痛き 薫に病床近くに來られて大君が迷惑がられるのである。

けにくくはあらで 無愛相な態度はせずに。

宮の御心もゆかで 匂宮が先日紅葉御覽の折に中君を訪ふ事も出來ず不本意ながら立寄りもなさらなかつた事などを語られて。

ここには 中君は別に何とも言つてはゐられないやうです。

亡き人の 故宮の御遺誡は、かういふやうに夫を持つて苦勞するといふ意味であつた事が分りまして、それが氣の毒なのです。

世の中は 世の中といふものは所詮一本調子では渡られないのですに、世間知らずのあなた方には、一圖に恨めしいなどと思召す事もありませうに、同情申上げます。強ひて氣を長く持つていたゞきたい。

うしろめたうは 匂宮との關係は、心配な事はよもやあるまいと存じます。

人の御うへを 匂宮に有利になるやうな口をきかれるのも、つまらない事が言へるのかと、自分が何分ながら一方では不思議に感ぜられる。

參り來つるを。なほかの惱み給ふらむ御あたり近く」と、薫が大君せちに（おましぶきて）入れけにくくはあらで、御大君は宮の御心もゆかで（匂宮が姫君達が平素くつろいでゐられる方の御病氣を深く氣づかつてゐられるので）おはし過ぎにし有樣など語り聞え給ひて、薫が大君に聞え給へば、打解けて住まひ給へる方の御簾の前に、氣長く構へてゐなさいどかに思せ。心いられして、な恨み聞え給ひそ」など教へ聞え給へば、大君「ここにはともかくも聞え給はざめり。亡き人の御諫めは、斯かる事にこそと見侍るばかりなむいとほしかりける」とて、泣き給ふ氣色なり。薫は「いと心苦しう、われさへ恥かしき心地して、世の中は、とてもかくても、一つさまにて過ぐすこと難くなむ侍るを、いかなる事をも御覽じ知らぬ御心どもには、偏へに恨めしなどおぼす事もあらむを、強ひておぼしのどめよ。うしろめたうはよにあらじとなむ思ひ侍る」など、人の御うへをさへあつかふも、かつは怪しく覺ゆ。夜々はましていと苦し

例のあなたに いつもの通りあちらのお部屋においで下さい。

斯かる折の かうした御病氣中の介抱も、私以外に誰がしつかりする人がありませう。

いと見苦しう 御祈禱などするのは見苦しい事だ、それどころかわざとでも死にたい自分だの。

思ひぐまなく 人の氣持を顧みないやうな事をいふのもいやで、薫のいふまゝにまかしてゐられる。

さすがに 「あはれなり」にかゝる。

昨日ばかり せめて昨日位にしてでも又お話したいものです。

ありしよりは 以前よりも薫をなつかしがつてゐられる樣子が見えるのも、大君に變事があるのではないかと、薫の心にはつと思はれたので。

近うまりて 河内本によるべきである。

げにし給ひければ、薫がそばにゐられる事をもうとき人の御けはひの近きも中の君（宮）の苦しげに思したれば、女房「なほ例のあなたに」と人々聞ゆれど、薫「まして斯く煩ひ給ふ程のおぼつかなさを、思ひのままに參り來て、いだし放ち給へれば、いとわりなくなむ。斯かる折の御あつかひも、誰かははかく（う）しく仕うまつる」など、辨のおもとに語らひ給ひて、御修法ども始むべきことなど宣ふ。いと見苦しう、殊更にもいとはしき身を、と聞き給へど、思ひぐまなく宣はむもうたてあれば。さすがにながらへよと思ひ給へる心ばへもあはれなり。

（御病中が心配で思ひ通りお見舞に參りましたのに私を遠ざけられるので甚だ當惑します）（それでも命あれかしと念ずる薫の心も姫君はありがたく思召す）（大君の心）

翌朝 又のあしたに、薫「すこしもよろしくおぼさるや。昨日ばかりにてだに聞えさせむ」とあれば、大君「日頃經ればにや、今日はいと苦しうなむ。さらばこなたに」と言ひいだし給へり。いとあはれに、いかに物し給ふべきにかあらむ、ありしよりはなつかしき御氣色なるも胸つぶれて覺ゆれば、・・近うまりてよろづの

（氣分は）（大君がどうなられるのかしら）（薫の心）

さすがに いくら大君の事が心配でも安閑と宇治に長逗留も出來ぬ事故。

斯かる御すまひ この山莊のやうな所はやはり氣がかりだ。場所をかへて祈禱するのにかこつけて、大君を適當な所に引取りませう。物怪は所を換へて祈禱すると効驗があるから。

いつしかと 早々に山莊の若女房と關係を結んだ者があつた。

おのがじしの 薫の供人と女房との内證話に。

左の大臣殿の 夕霧が息女六君を匂宮にめあはされる筈だが、夕霧の方では年來の希望故、躊躇なく年内には實現される筈です。

うちわたりにも 禁中にあつても浮氣事にばかり熱中してゐられて、主上中宮の御警告にも浮氣をやめられさうもないやうです。

事を聞え給ふ。大君「苦しうてえ聞えず。（返事が出來ませぬ）すこしためらはむ程に・」（を）とて、いとかすかにあはれなるけはひを、（大君の）限りなう心苦しうて、（薫の心に）歎き居給へり。さすがにつれ〳〵と斯くておはしがたければ、いとうしろめたけれど歸り給ふ・・・・。（空なし）薫「（猶）・斯かる御すまひは、なほ苦しかりけり。處去り給ふにことよせて、さるべき所に移ろはし奉らむ」など聞えおきて、阿闍梨にも、（專心に病氣平癒の祈禱をするやう）御祈り心に入るに命じて（歸京された）べく宣ひ知らせて出で給ひぬ。

この君（薫）の御供なる人の、いつしかと此處なる若き人を語らひ寄りたるありけり。おのがじしの物語に、（供）「かの宮（匂宮）の御忍びありき制せられ給ひて、（禁中）うちにのみこもりおはします事。（右）左の大臣（い）殿の姫君をなむあはせ奉り給ふべかなるを、女がたは年頃の御本意なれば、おぼし滯ることなくて、年の内にありぬべかなり。（匂宮は氣が進まなくて）宮はしぶ〳〵に思して、うちわたりにも、ただすきがましき事に御心を入れて、（今上明石中宮）御門きさい（き）の御いましめにしづまり給ふべく（う）

目もあやに あの人が宇治通ひとは驚き入つた事で、並大抵の思ひやうぢやないのだらう。

さこそいひつれ 薫殿の家來がかやう〳〵申しました。

今は限りにこそ もう最後なのだ、身分の高い方と結婚なさる迄の一時の慰みにかうまで中君を愛されたのだらうに、それでも薫などの思はくを憚つて、口先だけ情愛深さうに仰しやるのであつたのだと解釋なさるので。

人の御つらさは 匂宮の薄情をとやかく恨んでゐる餘裕はなく、一入どうしていゝやら分らなくて。

弱き御心地は 衰弱した大君はいよ〳〵命が續きさうにも思はれない。

思ふらむところ 女房達が何と思はうかとそれがつらいので。

姫君 大君。ずつと句を隔てて「見やりつつ」に續く。

物思ふ時の 拾遺戀四「垂乳根の親のいさめしたたねは物思ふ時のわざにぞありける」

もあらざめり。（な）わが殿（薫）こそ、なほ怪しう人に似（他人と違つて）給はず、あまり（眞面目）まめにおはしまして、（人から厄介がられてゐられる）人にはもて惱まれ給へ。（宇治通ひだけは）ここに斯くわたり給ふのみなむ、『目もあやにおぼろげならぬこと』と人申す」など語りけるを、（女房）「さこそいひつれ」（女房達の中で）など人々のなかにて語る（姫君達が）を聞き給ふにも、（大君の心）今は限りにこそあなれ、いとど胸ふたがりて、（夕霧の六君）やんごとなき方に定まり給はぬ程の、なほざりの御すさびに斯くまで思しけむを、（う）さすがに中納言などの思はむ所を思して、言の葉の限り深きなりけり、と思ひなし給ふに、（大君が）ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いとど身のおき所なき心地して、（大君は）しをれ臥し給へり。弱き御心地は、（病身故）いとど世に立ちとまるべうも覺えず。（女房達は皆氣の置ける人々ではないが）恥かしげなる人々にはあらねど、思ふらむところ・（の）苦しければ、聞かぬやうにて（中君が前から）寢給へるを、姫君（宮）、（以下中君のさま）物思ふ時のわざと聞きしうたたねの（中君の）御さまの、いとらうたげにて、かひなを枕にて寢給へるに、御ぐしの（かひなの上に）たまりたる程など、（世にも珍らしく）ありがたうう

親のいさめし 引歌の詞を用ひたもので、故宮が減多な夫を持つなと誡められたその御遺誡が返す〳〵思ひ出されて悲しいので。

かういみじく こんなにひどく苦勞してゐる私共を捨てておかくれになつて、夢の中にも見えては下さらないよと。

添ひ臥し 脇息にうつむきかゝつてゐられる樣子。

まよふ筋なく 亂れた毛筋もなく。

青み給へるしも 顏色の少し青ざめてゐられるのが却つて一層なまめかしく見えて。

山吹薄色 山吹色卽ち黃色。薄紅梅色。

つくしげなるを見やりつつ、親のいさめし言の葉も、返す〳〵思ひいでられ給ひて悲しければ、罪深かなる底にはよも沈み給はじ、いづこにも〳〵、おはすらむ方に迎へたまひてよ、かういみじく物思ふ身どもを打捨てたまひて、夢にだに見え給はぬよ、と思ひつづけ給ふ。

夕暮の空の氣色、いとすごくしぐれて、木の下吹き拂ふ風の音など・たとへむ方なく、きし方ゆく先思ひ續けられて、添ひ臥し給へるさま、・・・あてに限りなく見え給ふ。白き御ぞに、髮・・はけづる事もし給はで程經ぬれど、まよふ筋なくうちやられて、日頃にすこし青み給へるしも、・・・なまめかしさまさりて、眺めいだし給へるまみ額つきの程も、・見知らむ人に見せまほし。畫寢の君、風のいと荒きにおどろかされて、起きあがり給へり。山吹、薄色など花やかなる色あひに、御顏は殊更に染め匂はしたらむやうに、いとをかしう花々として、聊

このわたりに 手眞似でその場所を示しつつ語られるのである。

此頃明暮 以下大君の心。

ほのめきもや 亡靈がこのあたりにちよい〳〵來てゐられるのかも知れぬ。

罪深げなる人の國に 罪障深げな自分達は到底極樂往生も出來まい。李夫人の亡後、漢の武帝甘泉殿內にかの反魂香の事。李夫人の像を描き方士をして靈藥を合せしめて金爐に焚いた所、香煙の間に夫人の姿が彷彿したといふ。白氏文集卷四諷諭四李夫人「九華帳深夜悄々、反魂香降二夫人魂一、夫人之魂在二何許一、香煙引到焚レ香處」

斯うて 此儘私が死にでもしたら、匂宮よりもつれなくあしらふ人が出て來はせぬかと心配なのですが、稀にでも匂宮が思ひ出して函つて來て下さるならば、さうした不心得な料簡を持つ人はあるまいと思ひますと、匂宮を恨めしいと思ふ中にも頼る氣になります。

か物思ふべきさまもし給へらず。「故宮の、夢に見え給へる。氣色にて、このわたりにこそほのめき給へ・る。いと物おぼしたる氣色にて、「亡せ給ひてれ」と語り給へれば、いとどしく悲しさ添ひて、「亡せ給ひてのち、いかで夢にも見奉らむと思ふを、更にこそ見奉らぬ」とて、二所ながら、いみじう泣き給ふ。此頃明暮思ひいで奉れば、ほのめきもやおはすらむ、いかでおはすらむ所に尋ね參らむ、罪深げなる身どもにて、と後の世をさへ思ひやり給ふ。人の國にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしくおぼさるる。いと暗うなる程に、宮より御使あり。折はすこし物思ひ慰みぬべし。御方はとみにも見給はず。「なほ心うつくしくおいらかなるさまに聞え給へ。斯うてはかなうもなり侍りなば、これより名殘なき方にもてなし聞ゆる人もや出でこむとうしろめたきを、稀にもこの人の思ひいで聞え給はむに・、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ頼ま

限りあれば　「ながらふるわざなりけり」の當時直にも死ぬものと思つてあつたが、定命といふものが居まして、死ぬねないのであつた。生きながらへるのでするよ。思つてゐるのでは今迄の今日は人こそ悲しかりけれ」

明日知らぬ　「明日知ら古今哀傷ぬ我身と思へど暮れぬまの

眺むるは　私の眺めてゐる時雨の空はいつも同じ事ですのに、今日に限つてどうしてこんなに逢ひたい心をそゝるのでせう。

斯く袖ひづる　伊行釋引歌「神無月いつも降りしかど斯く袖ひづる時雨は降りしかりき」

程經るに　大分御無沙汰が續くにつけても中君は匂宮が戀しく思はれて。

さばかり所せき　匂宮があれ程身動きもならぬ程にやかましく約束しておかれたのだもの、いくら何でもこのまゝになるといふ事はあるまい、と中君は始終思ひ直す心持が離れなかつた。

御返り　「ただ一言なむ」につづく。

霰降る　始終霰の降つてゐる宇治の山里では、朝夕眺めてゐる空も、曇つて居ります。そのやうに私の心も晴れる時はありませぬ。

月も隔たり　匂宮の紅葉遊覽は十月朔日頃であつた。

蹙り多み　萬葉・拾遺戀四「湊入の葦分け小舟障り多みわが思ふ人にあはぬ頃かな」

五節など　五節は大嘗祭又は新嘗祭に行はれた儀式で、毎年十一月の中の丑の日から辰の日にわたつて行はれるのであるが、二丑の時は上の丑の日である。「疾く出で來たる」とあるからこの年は二丑であつて、五節は七日から十二日迄の間に行はれた筈である。

左の大臣殿のわたり　夕霧の六君の事について。

暫し　暫くお待ち下さい。私にも思ふ子細があるのです。

聞えすまひ　反對されて。

見し程よりは　匂宮といふ方は今迄思つて居つたよりも輕々しい方だ、いくら何でも冷淡なおいでなのに思つて居つたのは氣の毒ないと責任上さうおなつて、匂宮の處へは殆ど參上なさらない。

れ侍る」と聞え給へば、中君「私を殘して死なうと考へてゐられるのがあまりにひどいとおくらさむと思しけるこそいみじうとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひ侍るぞや。明日知らぬ世のさすがに歎かしきも、皆あなた故ですたがため惜しき命にかは」とて、大殿油參らせて見給ふ。例のこまやかに書き給ひて、

匂宮「眺むるは同じ雲居をいかなれば覺束なさを添ふる時雨ぞ

斯く袖ひづる」などいふこともやありけむ、耳馴れにたるを、それも默つてもゐられまいとお義理一片に書いてよこされたのだと思ふにつけても恨めしさまさり給ふ。さばかなほあらじ事と見るにつけても、匂宮の美しい容姿をり世にありがたき御有様かたちを、いとどいかで人にめでられむと、好ましく好いたらしくつやつぽい取りなしぶりだからえんにもてなし給へれば、若き人の中君が心寄せ奉り給はむもことわりなり。程經るにつけても戀しう、以下中君の心さばかり所せきまで契りおき給ひしを、さりともいと斯くてはやまじ、と思ひなほす心ぞ常に添ひける。御返り、「今晩泊らずに歸京しませう今宵參りなむ」と聞ゆ

女房達が中君に返事を催促するので

これかれそそのかし聞ゆれば、ただ一言なむ、

霰降る深山の里は朝夕に眺むる空もかきくらしつつ

斯くいふは神無月の晦日なりけり。宇治への無沙汰が一箇月にもなるよ　月も隔たりぬるよ、と宮は

氣が氣でなく靜心なく思されて、今夜こそ行かうと今宵々々と思しつつ、禁中うちわたり陽氣に今めかしく紛れがちにて、用事が多くて宇治ではわざともなければ過ぐい給ふ程に、あさまなる程に、五節など疾く出で來たる年にて、匂宮は殊更に無沙汰されるのではないがはかなう人を見給ふにつけても、さるは御中君しう待ちどほなり。匂宮が假初に女に逢はれるにつけても左の大臣殿のわたりのこと、明石中宮の事が大宮も、「なほ心に離るる折なし。六君のやうな口やかましくない本妻を持たれて迎へ取りたい女がさるのどやかなる御後見をまうけ給ひて、そのほかの尋ねまほあつたら引取ってしう思さるる人あらば參らせて、輕々しく出あるかないでおも〳〵しくもてなし給へ」薫と聞え給へど、匂「暫し。さ思う給ふるやう」など聞えすまひ給中君に何でつらい目を見せるものかと思召す匂宮の御心を中君は御存じないからひて、誠につらき目はいかでか見せむ、など思す御心を知り給はねば、月日に添へて、物をのみおぼす。

薫中納言も、以下薫の心見し程よりは、かろびたる御心かな、さりともと思

公わたくし　五節の頃故。

わりなき　餘儀ない多忙な事務をほつたらかして。「事の繁さ」で一語。

そこはかと　格別どこがどうと痛い所もなく大病といふではないが、物は少しも召上りませぬ。

もとより　もと〳〵大君は人と違つてか弱いたちでいらつしやいますが、わけて匂宮の御様子からは一段と御物思ひの御一件かし一寸たお果物さへ召上らなかつたのが高じてか、ひどく御衰弱遊ばされて、迎も助かる見込みもございませぬ。私はしんからつらい長生きを致しまして、かうして世に心憂く拝見した事でございますから、ぜひとも眞先にたいまいと思ひこんで居ります。死

ひ聞えけるもいと中君に對してほしく心からお・ぼえつつ、をさ〳〵参り給はず。薫が宇治へは山里には、「いかに御病氣如何〳〵」と・・・・とぶらひ聞え給ふ。十一月の月となりては、大君の病氣がすこしよろしうおはすと聞き給ひけるに、公わたくし物さわがしき頃にて、五六日人薫が宇治に使を奉り給はぬに、いか大君の病氣如何ならむ、と打驚かれ・給ひて・・・、わりなき事の繁さを打捨ててまう・で給ふ。修法は怠全快まで續けて行へと薫が命じておかれたのにり果て給ふまでと宣ひおきけるを、よろしくなりにけるとて、阿闍梨をもかへし給ひければ、いと人ずくなにて、例の老人出で來て、大君の御容態を御有様聞ゆ。辨「そこはかと痛きとこ辨ろもなく、おどろ〳〵しからぬ御悩みに、物をなむ更に聞召さぬ。もとより人に似給はず、あえかにおはしますうちに、この匂宮と中君との關係宮の御事出で來にしのち、いとど物おぼしたるさまにて、はかなき御菓子だに御覽じ入れざりし積りにや、あさましく弱くなり給ひて、更に頼むべくも見え給はず。世に心憂く侍りける身の命の長さにて、斯かることを見奉・・れば、まづいかで先立

日頃も　此頃中一向御見舞の出來なかつた氣遣はしさ。

大方世に　其他一般世間から祈禱の効驗ありとの定評ある驗者だけ澤山お招きになる。

殿人あなたに　薫の家來。あちらの客間において下さい。

僧の座　加持僧の詰所。

ひんがしおもての　東面で南廂よりは少し大君に接近した所に。

中の君苦しと　薫があまり近くになるので中君は迷惑がられるけれども。

この御中を　大君の態度は冷淡であつても薫は大君を棄てようとはなさらなかつたとお二人の仲を疎々しく取扱つて遠ざけようとしない。「この御中を」は「うとくももてなし云々」につづく。

ち聞えなむと思う給へ入り・て・侍る」と、いひもやらず泣くさま・・・・ことわりなり。薫「心憂く・・・・、などか斯くとも告げ給はざりける。院にもうちにも、あさましう事繁き頃にて、日頃もえ聞えざりつるおぼつかなさ」とて、大君は前々通された部屋にありし方に入り給ふ。御枕がみ近くて物聞え給へど、御聲もなきやうにて、えいらへ給はず。薫「斯くおもくなり給ふまで、誰も〳〵告げ給はざりけるがつらう、思ふにかひなきこと」と恨みて、宇治の例の阿闍梨、大方世にしるしありと聞ゆる人の限り、あまた請じ給ふ。御修法、讀經、明くる日より始めさせ給はむとて、殿人あまた參りつどひ、上下の人立ちさわぎたれば、心細い感じなどは何處へやら心細さの名殘なく、頼もしげなり。暮れぬれば、例の、女房「あなたに」と聞えて、薫に御湯漬など參らせ・むとすれど、薫「同室は出來ないまでもせめて近くゐてみりともお世話しよう近くてだに見奉らむ」とて、南の廂は僧の座なれば、ひんがし東面おもての今すこしけぢかき方に、屏風など立てさせて、入り居給ふ。中の君苦しとおぼしたれど、この御中を、

初夜 六時の一。

心地には お話申上げたいとは思ひますが。

日頃音づれ 此頃中おいでがなかつたので、もうお目に懸らずに死んでしまふのかと殘念に思つて居りました。

息の下にかすかな聲で。 斯く待たれこんなに待つて頂く程まで御無沙汰しましてすみませぬ。

御ぐしなど 大君は熱があるので頭などもすこし熱くいらせられた。

何の罪障なる 何の罪障でこんな御病氣になられたのでせう。人を欺かせた責をおふ人がかうして苦しむのです。

なほもて離れ給はぬなりけり、と皆思ひて、薫をうとくも・もてなし隔て奉らず。初夜より始めて、法華經を不斷に讀ませ給ふ。聲尊き限り十二人して、いと尊し。火はこなたの南の間にともして、内は暗きに、几帳を引きあげて、すこしすべり入り見奉り給へば、老人ども二三人ぞさぶらふ。中の君は、ふと隠れ給ひぬれば、いと人ずくなに、心細くて臥し給へるを、薫「などか御聲をだに聞かせ給はぬ」とて、御手をとらへて驚かし聞え給へば、大君「心地には覺えながら、物いふがいと苦しくてなむ。日頃音づれ給はざりつれば、おぼつかなくて過ぎ侍りぬべきにやと、口惜しうこそ侍りつれ」と、息の下に宣ふ。薫「斯く待たれ奉りつる程まで參りこざりけること」とて、さくりもよよと泣き給ふ。御ぐしなど、すこしあつくぞおはしける。薫「何の罪なる御心地にか。人の歎き負ふこそ斯くはあんなれ」と、御耳にさし當てて、物を多く聞え給へば、うるさうも恥かしうも覺

いとどなよ〳〵と 衰弱の爲平素より一入かぼそくなつて。

むなしう 大君を死なしては自分はどんな氣持がするだらうと薫は胸が押潰されたやうな氣がする。

日頃見奉り 長い御看病で氣疲れなさつた事でせう。せめて今晩だけでもゆつくりお休み下さい。私が夜伽致しませう。

ひたおもてには 面と向つてではないが薫は大君のそばにそつと寄つて大君の顏を見るべき因緣がありかうなるべきと。

斯かるべきがあつたのだらうと 大君は思召して。

こよなうのどやかに 非常にのんびりして居つて少しも警戒を要しない薫の御心を、あのもう一人の方と比べて見られると、なつかしさが身にしみて感ぜられた。

むなしく 自分が死んだ後に薫から思ひ出して貰ふ場合にも、強情で、同情の餘地もないやうには、ありたくないと遠慮されて、薫を病床から追ひ出すやうなさはしたないお仕打はえうなさらない。

いみじのわざや 大變な事だ、どうしたらお命を取りとめる事が出來ようか。

不斷經 前に「法華經を不斷に讀ませ給ふ」とあつた。不斷經は十二人づつの僧が一時（二時間）交替に讀むのである。

えて、顏をふたぎ給へり。いとどなよ〳〵とあえかにて臥し給へるを、むなしう見なしていかなる心地せむと、胸もひしげて覺ゆ。薫「日頃見奉り給へらむ御心地も、安からずおぼされつらむ。今宵だに心やすくうち休ませ給へ。宿直人さぶらふべし」と聞え給へば、うしろめたけれど、さるやうこそはと思して、すこしぞき給へり。ひたおもてにはあらねど、這ひ寄りつつ見奉り給へば、いと苦しく恥かしけれど、斯かるべき契りこそはありけめ、と思して、こよなうのどやかにうしろやすき御心を、かの片つ方の人に見くらべ奉り給へば、あはれとも思ひ知られにたり。むなしくなりなむのちの思ひいでにも、心ごはく思ひぐまなからじ、とつつみ給ひて、はしたなくもえ押し放ち給はず。夜もすがら人をそそのかして、御湯など參らせ奉り給へど、露ばかり參る氣色もなし。いみじのわざや、いかにしてかはかけとどむべきと、いはむ方なく思ひ居給へり。不斷經

夜居 夜居の僧といつて終夜詰めきりの祈禱僧。

いかが今宵は 昨晩は御加減如何でしたか。曉に尋ねるのであるから「今宵」とは昨晩の事。

いかなる所に 八宮はどんな處にいつていらつしやるのでせう。

世の中を 以下八宮の夢中のお詞。冷界を深く厭離しましたので何の執心もなかつたのです。

卿かうち思ひし 一寸氣がかりな事の爲に正念が亂れて居ります。

ただ暫し ほんの當分の間極樂に行けない事を思ふと殘念です。極樂往生の助けになる供養を營んで下さい。

忽に 差當つてどうしてよいか分りませんので、私の出來る程度で、佛道修行に專念してゐる法師達五六人に命じて、彌陀の稱名念佛を唱へさせて居ります。

さては その外私に思ひついた事がございまして常不輕を行はせて居ります。「つかせ」は「頒づかせ」で禮拜させる事。河海抄「法華經不輕品云、我深敬二汝等一不二敢輕慢一、所以者何汝等皆行二菩薩道一當レ得レ作レ佛。釋尊因位に常不輕菩薩の時に此二十四字の偈を唱へて四衆を禮拜し給へり。是は一切衆生の佛性ある故に拜み給へるにや」

の曉がたの、居かはりたる聲のいと尊きに、阿闍梨も夜居にさぶらひてねぶりたる、うちおどろきて陀羅尼讀む。老いかれにたれど、いとくうづきて賴もしう聞ゆ。「いかが今宵はおはしましつらむ」など聞ゆるついでに、故宮の御事など聞えいでて、鼻しばしばしうちかみて、「いかなる所におはしますらむ。さりとも涼しきかたにぞと思ひやり奉るを、さいつ頃の夢になむ見えおはしましし。俗の御かたちにて、『世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまる事・なかりしを、聊かうち思ひしことに亂れてなむ。ただ暫し願ひの所を隔たれるを思ふなむいとくやしき。すすむるわざせよ』と、いとさだかに仰せられしを、忽に仕うまつるべきことの覺え侍らねば、堪へたるに從ひて、行ひし侍る法師ばら五六人して、なにがしの念佛なむ仕うまつらせ侍る。さては思ひ給へ得たること侍りて、常不輕をなむつかせ侍る」など申すに、君もいみじう泣き給ふ。かの世にさへ妨げ聞ゆら

この常不輕 常不輕を勤める僧が。（抄）此おこないやう不輕菩薩のまねをして廿四文字の文を唱へてめくりありくにこそ。

いと尊くつく 廿四字の偈文を尊い聲で唱へながら額づく。

回向の末つ方 廿四字の偈文の終りの部分の句。

客人も 薫も佛道心の深いお方故。

あざやかに 薫がきちんと居ずまひを正されて。

おも〳〵しき 常不輕といふものは重々しい祈禱の場合には行はないものですが、それでも尊い事です。

霜冴ゆる 霜深い汀の千鳥が寒さになやんで鳴いてゐるその聲の悲しく身にしみる曉だ。

つれなき人の 薫の樣子が冷淡な匂宮にも似て居つて、二人引比べて考へられるけれども。

む罪の程を、苦しき・心地にも、いとど消え入りぬばかり覺え給ふ。いかでかのまだ定まり給はざらむ先にまうでて、同じ所にもと聞き臥し給へり。阿闍梨は言ずくなにて立ちぬ。この・常不輕、そのわたりの里々、京までありきけるを、曉の嵐にわびて、阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、中門のもとにゐて、いと尊くつく回向の末つ方の心ばへ、いとあはれなり。客人もこなたに進みたる御心にて、あはれ忍ばれ給はず。中の君、せちに覺束なくて、奥のかたなる几帳のうしろに寄り給へるけはひを聞き給ひて、あざやかに居なほり給ひて、「不輕の聲はいかが聞かせ給ひつらむ。おも〳〵しき道には行はぬことなれど、尊くこそ侍りけれ」とて、

霜冴ゆる汀の千鳥うちわびて鳴くね悲しき朝ぼらけかな

と、言葉のやうに聞え給ふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、いらへにくくて、辨してぞ聞え給ふ。

あかつきの霜打拂ひ鳴く千鳥物おもふ人の心をや知る　曉に鳴く千鳥は、物思ひに沈んでゐる私の心持が分るのだらうか、いかにも悲しげに鳴いてゐる。

似つかはしからぬ御かはりなれど、故なからず聞えなす。　老いて醜い辨が中君の代理とは。

かやうの　こんな一寸した歌の贈答なども、大君は遠慮がちの中に而もなつかしく贈答のしがひのあるやうに取りつくろつて仰しやつて下さるのに、これきり死別しては、どんなに悲しい事だらう。

宮の夢に　八宮が阿闍梨の夢にお見えになつた事を思ひ合せて御覽になるに。

おはしましし　八宮が念佛に籠られた阿闍梨の御寺にも、故宮追善の爲に御誦經をおさせになる。

祭祓　大君の病氣平癒祈願の爲に。

物の罪めきたる　神佛の祟りなどいふ性質の御病氣でもなかつたから。

みづからも　大君自身も平癒を望んで佛などを祈禱なさるならばとにかく。

この君の　薫がかうして附きつて居つて二人の間には全く隔てがなくなつてゐるのだもの、全く快の上はいやでも夫婦になぬ譯にはいけない。

かうおろかならず　今はかうして親切に見えても、結婚後、思つた程ではなかつた事が二人に分つては、つらくて腹も立つ事だらう。

あかつきの霜打拂ひ鳴く千鳥物おもふ人の心をや知る（中君自身の事）

似つかはしからぬ御かはりなれど、故なからず聞えなす。（まんざらでもなくお取次申上げる）かやうのはかなしごとも、つつましげなるものから、なつかしうかひあるさまに取りなし給ふものを、今はとて別れなば、いかなる心地せむ、と思ひ惑ひ・給ふ。（薫は）宮の夢に見え給ひけむさま思（薫が）しあはするに、かう心苦しき御有様どもを、（姫君達を）天翔りてもいかに（故宮の霊が）見給ふらむ、と推し量られて、おはしましし御寺にも、御誦經せさせ給ふ。（薫の心に宮の悲しみが）所々に御・祈りの使いだし立てさせ給・ふ。（寺々に）（朝廷にも自宅にも）おほやけにも私にも御いとまの由申し給ひて、祭祓、よろづにいたらぬ事なくし給へど、物の罪めきたる御病ひにもあらざりければ、（心地）何のしるしも見えず。（効驗）みづからも平らかにあらむと・佛をも念じ給はばこそあらめ、なほ斯かるついでにいかでうせなむ、（以下大君の心）この君の斯く添ひゐて殘りなくなりぬるを、今はもて離れむ方・なし、さりとて、かうおろかならず見ゆめる心のばへの、見劣りして我も人も見えむが心やすからず憂かるべきこと、もし命強ひてとまらば、病にことつけて、（かこつけて尼にでもならう）かたちをも變へてむ、さてのみこそ長き心をもかたみに見果つべきわざなれ、と思ひしみ給ひて、とあるにてもかかるにても、いかでこの思ふ事してむ・、と思すを、さまでさかしき事はえ打出で給はで、中の君に、（どんな事があつても）（出家の素懷を遂げよう）（大君は深く思ひこまれて）（宮）

大君「心地のいよ〳〵賴もしげなく覺ゆるを、忌むことなむいとしるしありて命延ぶる事と聞きしを、さやうに阿闍梨に宣へ」と聞え給へば、皆泣きさわぎて、女房「いとあるまじき御事なり。斯くばかり思し惑ふめる中納言殿も、いかがあへなきやうに思ひ聞え給はむ」と、似げなきことに思ひて、賴もし人にも申しつがねば、口惜しうおぼす。（やがて死ぬやうな氣がするから）（とんでもない事です）（薫）（出家を今の薫對姫君の事情には似合はしからぬ事と）（大君は）（がつかりなさる事でせう）

斯くこもりぬ給へれば、聞きつぎつつ、御とぶらひにふりはへ物し給ふ人もあり。おろかに思されぬ事と見奉れば、殿人、親しき家司などは、おの〳〵、よろづの御祈りをせさせ歎き聞ゆ。（薫を見舞に）（薫の家來）（大君の病氣平癒の爲に）

さてのみこそ　これがお互に永久に變らぬ心を見屆ける唯一の道なのだ。

さまでさかしき　出家するなどとそれ程賢女ぶつた事は薫にいひ出しかねて。

忌むことなむ　受戒が延命に大層効驗のある事と聞いて居りますので、その事を阿闍梨に賴んで下さい。

賴もし人にも　賴りにしてゐる薫にもその事を取次がないので。

斯くこもり　薫が宇治に引籠つてゐられるので、その由を次々傳へ聞いて、わざ〳〵お見舞にやつて來られる人もある。

おろかに　薫が大君を愛してゐられることの並々でないのをお察しするので。

豐明　五節から二日を隔てて辰の日に催される節會。二辰の年は上の辰、三辰の時は中の辰。その年の稻を神に供へて主上も聞召し群臣にも賜ふ節會である。

人やりならず　自ら求めて心細い目をして。都に居ればこんな心細い目は見ないですむのに。

恨むべうもあらず　恨みたくても恨めない程やさしく可憐な大君の態度故、ほんの暫くでもよいから全快させて、思ひのたけを告げたいものだ。

搔曇り　花鳥餘情「新嘗會豐明節會に小忌をきる人日かげのかづらといふ物を冠に懸くる也。日蔭草をばさがり苔ともいふ。糸にて結びて懸くるは日かげ草にかたどる也」「日影も」は日光に日かげのかづらをひじかせた言葉。

心地に念じてゐるかひもなく。御聲をだに　對面は勿論。

おくらかし　私を殘して死なれたならば非常に恨めしくおもはれる事だらう。

顏をばいとよく　たしなみ深い大君のさまである。

よろしき隙　一寸樂な折がありましたならば申上げたい事もございますが、消え入るやうになつてゆく一方で殘念な事でございます。

ゆゆしう　涙を流すのは不吉だから、こんなに心細がつてゐると人には思はれまいと涙を隱さうとなさるけれども、聲も惜しみ得ずに薫はお泣きになる。「ゆゆしう」は「つつみ給へど」を修飾する。

まもれど　薫が大君をじつと見つめて見るけれども。

色あひ　肌の。

白き御ぞどもの　柔かな白い御衣に包まれて、衾をわきに押しのけて寢てゐられるさまは、鑓の殼を寢かせてあるやうな氣がして。體があまり痩せて小さくなつてゐるから。

身もなき雛　前に「顏をばいとよく隱し給へり」とあるのを見たもので、顏が見えないで衣裳ばかり見えてゐるから、かう書いたものである。

御ぐしは　髮の毛はさうるさくもなくて投げやられてゐる程多くて、それが枕から下にこぼれ落ちてゐる、それがつや〳〵としてゐる、美しいにつけても

いかになり給ひなむと　大君がどうなられるのかと思ふと。この一句は次の「あるべきものにもあらざめりと」と同格で共に「見るが」に續く句法。

豐明（とよのあかり）は今日ぞかし、と京（薫の心に）思ひやり給ふ。風いたう吹きて、雪の降るさまあわただしく（騷々しく）荒れ惑ふ。都にはいとかうしもあらじかしと、人やりならず心細うて、うとくてやみぬべきにやと（大君とは夫婦になれずに終るのかと思ふとつらい運命ではあるが）思ふ契りはつらけれど、恨むべうもあらずなつかしうらうたげなる御もてなしを、只暫しにても例になして、思ひつる事ども語らはばや、と思ひ續けて眺め給ふ。光も（終日曇つた儘で）なくて暮れ果てぬ。

薫　搔曇り日影も見えぬ奥山に心をくらす頃にもあるかな（私は暗い心で悲しんで居ります）

薫が此處にゐられる事を宇治の人々は皆力に思つて居つたただ斯くておはするを頼みに皆思ひ聞えたり。例の近きかたに（薫が大君の）居給へるに、御几帳などを風のあらはに吹きなせば、中の君（宮）奥に入り給ふ。見苦しげなる人々も、（老女房達）かがやき隱れぬる程に、（薫を恥かしがつて奥に隱れた儘に）いと近う寄りて、薫「いかが思さるる。（御氣分如何）心地に思ひ殘すことなく念じ聞ゆるかひなく、御聲をだに聞かずなりにたれば、いとこそわびしけれ。おくらかし給はば、いみじうつらからむ」と、泣く〳〵聞え給ふ。物覺えずなりにたるさまなれど、（大君は理解の力もなくなつてゐるやうではあるが）顏をばい

とよく隱し給へり。（大君）「よろしき隙（ひま）・あらば、聞えまほしき事も侍れど、ただ消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにこそ」と、（大君が大層悲しがつてゐられる樣子なので）いとあはれと思ひ給へる氣色なるに、（薫は）いよ〳〵せき（涙を）とどめがたくて、ゆゆしう、斯く心細げに思ふとは見えじとつつみ給へど、聲も惜しまれず。いかなる契りにて、（どうした運命で、以下薫の心）限りなく思ひ聞・えながら、つらき事多くて（死別）別れ奉るべきにか、（大君の事を）すこし憂き（大君が少しでもいやな態度をなさるならばわが戀心をますますきつかけにもしようと）さまをだに見せ給はばなむ思ひさます節にもせむ、とまもれど、（大君を）いよ〳〵あはれげに、（捨てがたい心をひきつけるやうな御樣子ばかりが目につく）あたらしくをかしき御有樣のみ見ゆ。かひなども、いとほそうなりて（窶せ細つて）、影のやうに弱げなるものから、色あ・ひ・（は）（も）變らず、白ううつくしげになよ〳〵（しなやかで）として、白き御ぞどものなよびかなるに、衾（ふすま）を押しやりて、なかに身もなき雛（ひいな）を臥せたらむ心地して、御ぐしはいとこちたうもあらぬ程にうちやられたる、枕より・・・（すべり）落ちたるきはの、つや〳〵とめでたうをかしげなるも、（薫の心）いかになり給ひなむとするぞと、（二人とこの世）あるべ